
存在証明

まめ太

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

存在証明

【Nコード】

N3047T

【作者名】

まめ太

【あらすじ】

『気付いた時、妹は偽物だった。』

西暦2X18年、日本の首都はネオ・トーキョー。人類の大半は宇宙に展開するコロニーへ移住し、残されるのは一部の特権階級と重文建築を相続した僅かな人々だけ。街には当たり前前にロボットが溢れ、しかし、ロボット製造規制法により、人間に見せかけたアンドロイドは一体として存在しない。（異世界もトリップもチートネタもありません。コテコテのサイエンス・フィクションです。）

プロローグ

人は生まれ落ちた時から模倣を始める。

親の顔を見て表情を学ぶ事から始まり、
周囲の状況を見て葛藤を学び、
人との繋がりから集団を学ぶ。

会話から言葉を知り、
書物から文字を知る。

およそ人は他者から何かを得る。

他者の命から自身のエネルギーを得ることが食事であり、
他者の情報から自身の知識を得ることが学ぶという事である。

人間は常に、
何かを求め続けて生きてゆく。

自身に足りないものを補うに、
他者の中から探し出そうとする。

それは、恋であり妬みであり渴望である。

他者に習い、自身に取り込む・・・
人間は、すべからず、この行為のみを繰り返している。

「不完全」な心が他者を求める。

不完全である事は不安定である事。
安定のない足元が揺らぐ事。

愛情も、
支配も、
暴力も、
嫌悪も、
欺瞞も、

・・・全ての感情はその一点に集約される。

自身にないから、得ようと欲しているだけだ。
「安定」は「安心」

「完璧なる安らぎ」

エゴイズム

欲望の果てに、
不毛の大地が横たわっている。

手にした以上、

抜け殻は「用無し」となる。

・・・完全停止。

我 思 っ 故 に 我 在 り

『 存 在 証 明 』

第一章 第一話　ネオ・トーキョー

2X18年、ネオ・トーキョー。

統一政府発足50周年を記念するセレモニーが大々的に行われる、とモニターからは流れてくる。

宣伝は毎日、毎日、このイベントの関連ばかりで、そろそろ飽きてきた感がある。

『・・・続いてのニュースです。

先日、古い型のロボット数千体がスクラップ工場にて処分され、愛護団体などの反対の声を押し切る形に、市民からは強い反発が寄せられています。

インタビュアーの声を聞きください。』

モニターに、人の良さそうなおじさんの顔が映る。

『・・・だいたい、まだ動いて働けるヤツ等ばかりなんだ、壊れてしまっても直して使ってやれば済むし、リニユールだって出来る。

・・・それを、生産工場の活気だかなんだか知らないが、・・・』
手にしたカップをテーブルに置く。

「切ってくれ、」

家政ロボットに命じて、モニターをオフにさせた。

この手の話も聞き飽きた。現在、ロボットの数は人間よりも多いくらいで、多少は仕方がないんじゃないかと思うし、どちらも都合よくはいかないものだろう。・・・古い型はスクラップにでもしなけりや、景気に響くんだろう。

スクラップと言っても、完全に解体した上で、他の方面で再利用されるのだから、無駄にはならない。

俺に呼ばれて、もたもたと足元の床を這っているコイツにしても、そうとう古いタイプのロボットだ。

家政婦と言っても人間とは似ても似つかない。ずんぐりむっくりな白いボディは硬質プラスチックで、巨大なあんころ餅、といった風

体だ。ボディの一部がパカと外れて、中から金属製のアームを伸ばす。

そのアームだって、伸縮警棒の細いのか歯科のソレみたいで、色気もない。静音設計だから、音もなくスイッチを切って、また元通りに収まった。

命令を遂行すると、プログラム通りに掃除作業へ戻る。床を磨く、ウイイイイ・ン、という機械音だけが低く微かに響き始める。

こんな無難なタイプのロボットでなくてもいい、と思うが、中身が見えるスケルトン・タイプなんかはすぐ飽きると言っし、無難な方が長持ちすると聞いているから、これにした。

ロボット製造規制法があるから、ヒューマノイドは基本的に製造販売が禁止されている。ロクな使用法を成されなかった、という過去の実績がモノを言ったらしく、満場一致で可決したのも、遠い昔の話だ。

犯罪のアリバイ工作や、人身売買の小道具、性産業のインフレを招いたり・・・ロクでもないニュースが飛び交ったという。そういう理由で、ここ60年間は、ロボットを人間に似せて作る事自体が重罪とされた。

人口皮膚を張り付ける事を許されるのは、医療用の義手足の類のみだ。

世に溢れ返っているロボット達は、そういう事だから、それぞれの用途に合わせた形と機能を備えている。

・・・用を成すだけなら、むしろ人間に似ていない方が効率がいいくらいだそうで・・・。

ロボットが人間のカタチをしていなくてはならない理由など、どこにもないのだし。

もう一口、コーヒーを啜った時点で、俺はキッチンのテーブルから離れた。

「・・・そろそろ麻里子を起こさないとな。」

朝、俺は決まった作業のように朝食を摂り、コーヒーを啜り、モニ

ターレレビジョンのニュースをチェックしてから、高校生の妹を起こしに行く。

俺は二十歳、妹は十七。

妹の麻里子は来年、高校を卒業と同時にネオ・トーキョーへ出て、独立したいと希望していて、目下、頭を悩ませている最中だ。・・・都心へ出ると、疎遠になり、そのうち実家との繋がりは絶えてしまっうのが普通だから。

ネオ・トーキョーで生活基盤が出来るとすぐに、宇宙コロニーへ移住してしまう。

「麻里、そろそろ起きないと、朝食抜きになるぞ！」

ドアを強めにノックして、外から声を掛けてやる。

「うーん・・・！ 解かったあ！」

どこか寝ぼけたような声が、少ししてから返ってきた。

第一章 第二話 バーチャル

・・・俺の名前は、須崎遼平。

普通のサラリーマンはやっていない。駅付近の歓楽街にあるショッ
トバーの店員だ。

・・・夜の仕事は夕方5時からの出勤でいい。そういう訳で、俺は
妹を学校へ送り出すと、もう一度、ベッドへユーターンするのだ。
それが毎日の行動パターンだった。

時たまには、そのパターンを崩して、昼間から街へ出掛けてキャッ
チ・シヨップへ入る事もある。

キャッチ・シヨップは、バーチャル空間に作られた歓楽街への接続
サービスの店で、言わば安価な売春窟だ。

ロボットを作る事は禁止されているが、バーチャル空間でリアルな
3D映像を作り上げる事は禁じられていないから、こういうサービ
スが繁盛している。

互いに人間、現実とはまるきり違う人物像になりきって、一時の恋
愛を楽しむ場だ。

比較的安い登録料金で、自身が成りきるキャラクターを買って、店
舗ごとに工夫されたバーチャル空間での出会いを楽しむ。全国展開
している大手だと色々な人間に会えるし、チェーンでない店なら常
連という形で親密に付き合えるから、現実でも恋愛に発展する可能
性が高いと言われている。

むろん、身体は置いてきぼりだから、本当の満足を得られるわけ
はない、体験型のAVというくらいの物だ。

生身の相手を一晩買うのは、やはり高価だし、皆、お手軽なシヨッ
プで済ませてしまう。

一部のコダワリが強い金持ちなどが、バカみたいな金を積んで違法
な道楽に走るのだ。・・・ロボット製造法違反や、人権擁護法違反
で、時々、ニユースを賑わせる。

性犯罪の刑罰は厳しい。・・・重罪なら生殖器を手術で切除される。それが再犯防止には一番らしい。

バーチャル空間では、例えばサバイバル・ゲームで相手を殺したり、サイバーコアと呼ばれるようなジャンルなら、強姦した挙句に虐待死させることだって許される。

それだけに、虚構と現実とを履き違えた者に対する司法の態度は冷酷だ。

どれほど重い刑罰を用意しても、違反者が絶えない事もまた、現実だが。

生身の異性との出会いを提供するサービスも盛んだ。会員情報は、市民情報と同じにコンピュータが管理するから、不正は不可能だと謳っている。・・・結婚は、数百年前と変わらず、市民の憧れだ。・・・

独身者とは比べ物にならないような待遇が受けられるし、なにより、バーチャルよりリアルがいいんだ、皆。

独身よりも既婚、既婚よりも子持ちの方が、税制でも優遇される。

俺は独身だが、妹を養っているお蔭で、他の友人ほど締め付けられる事もない。

・・・友達の、バカみたいな市民税に目を剥いた事もある。

暖かな家庭・・・夫が居て、妻が居て、子供達が笑う、それが理想であると、政府は謳う。

「行つてきまーす！」

いつものように、妹の麻里子は慌てた様子で玄関から走り出て行った。

妹はまだ高校生だから、派手な恰好はさせていない。髪を染めることはもちろん、ボディピアスなどもつての他だ。学生は学生らしく、色気づくのは卒業後にしろ、と言ってある。

だから麻里子の髪は黒のまま、ピアスの一つもつけずに健全そのものだ。どんぐりまなことと言える大きな目で、表情もくるくるとよく変化した。

子供の養育次第で税金まで変わってくるから、どの家庭も子育ては熱心にならざるを得ない。・・・間違つて補導でもされ、親に養育資格がないと判断されれば、子供は施設へ、税制は元へ戻り、施設の維持費用までが負担に掛かるようになる。・・・だから、結婚には慎重になる。相手選びは重大な関心だ。

第一章 第三話 疑惑

世界中の、主要都市と言われる一部の街以外は、どこも色んな様式の建物が入り混じる街並みだ。

うちも例に漏れず、普通の住宅街の一角にある、普通の家だ。

この辺りの建築様式は1900年代末のもので、相当古い街並みとして、文化財保護の指定を受けているから、そうそうモダンな建て替えなどは出来ない地域だ。昔は新興住宅地として揃いの家屋が建っていた。現在はタイムスリップを楽しむ指定地区として、観光客を呼んでいる。

裏へ廻れば、最新の科学を投入して補強の限りを尽くしてはあるが・・・。唯一、それでも家屋に対する固定資産税が掛からない事だけは有り難い。

「・・・シロ！」

飼い犬を呼んだ。

呼ばれば、尻尾を振って、喜んで駆けつける。いつものように。

・・・それが、なんだか、奇妙に引掛かった。

なんだろうか・・・微妙に、説明出来ないくらいに、妙だと感じてしまう・・・。

「よしよし、・・・イイ子だな、散歩に行くか？」

やっと覚えさせたばかりのワザを、すっかりと忘れている愛犬に、首を傾げてしまう。

散歩と言えば、すぐにリードを啜えてくるように躡たのに・・・。どうして忘れてしまったんだろう。

夕方、愛犬に感じた漠然とした不審を、まさかと思う人物に向けた。

・・・妹の、麻里子だ。

「兄貴、どうかした？」

いつものように旺盛な食欲で、テーブルの上に並べられた食器を力

ラにしていく妹。

成長盛りの子供は男女の別なく食欲旺盛だ。色気付いてきたら、少しは控えるようになるだろう。

別にそこは問題じゃない。好き嫌いのないイイ子で育ってきたから、基本的に俺達兄妹は好き嫌いが無いから。

・・・けど、麻里子は・・・紫蘇だけは、食べないんだ・・・。

刺身に添えられた紫蘇だけは、生臭くなるからと言って、幼い頃に泣きながら吐き出して以来、食べた試しがない・・・。他の料理法では平然としていても、こだわりのように刺身の添え物のそれだけは、食べないんだ。

「・・・麻里子、俺の分もやるよ、」

差し出された緑の葉を、妹は「ラッキー、」と呟いて、刺身を巻いて口へ放り込んだ。

間違いない、妹じゃない。

・・・お前は、誰だ？

疑惑が生じてからは、この偽者が何なのかを観察する事で日を費やした。

まさか好き嫌いの一つ程度で確信したわけではない、一つの疑惑は長じて幾つもの疑惑に目を向けさせた。

僅かな仕草や表情が、やっぱり妹ではないと確信させる。

ほんの些細な違いが重なれば、どう見ても別人としか思えなくさせるんだ。

理屈じゃない、本能のようなもの・・・肉親だから判る特別なものだ。

そうして、本物の所在が気に掛かり始める。

それでも俺は辛抱して、疑惑を向けている事に気付かれないように平静を装った。

妹はどこで何をしているのか・・・どうして偽者の・・・それも、ここまで本物そっくりの存在が遣されたのか、そもそも、なぜ妹が狙

われたのか、その理由を知るためだ。

一日観察してみても、よく解からなかった。だんだん、気の迷いではないか、とさえ思えてくる。

それほどに、この偽者は麻里子とური二つに見えた。

我慢も限界に近付く。

妹が無事なのか、気が気でないんだ。

「・・・麻里、お前ほんとに麻里子か？」

堪らなくなつて、直接、ぶつけてみた。

「?・・・なに、言つてんの？ 兄貴。」

まるで冗談でも言つたかのように避けられた。

それ以上には踏み込まない・・・いや、踏み込めない。

もし、マズイ状況に陥ったら、妹の身が危ない。慎重に、と自身に言い聞かせた。

「あ・・・あ、すまん。」

ぎこちない返答に、偽の妹は不審げな視線を向ける。しかしそれは、バレているとは考えても見ない、自信満々の態度だ。

まず浮かんだのは、この偽者の正体がロボットである事・・・けれど、そうだとして、誰がなんのために妹と入れ替えたのが解からない。いや、ここまで精巧で人間そっくりのロボットなんて、それ自体が無理だ。

人間だとすると、もっと解からなくなる。人間がここまで他人に化けるなんて、考えられない。

コピー・・・クローンか、などと非現実的な疑いを慌てて否定した。いくら科学が発展していると言つて、不可能がないワケではない、ここまで実存の人物に似せられるだけの技術は、現代の科学力でも有り得ない事だ。

再び、探るような目で見ていたら、妹は肩を竦めて二階へ上がつて行った。

「・・・バカみたいな事、言わないでよお。」

またキャッチ・シヨップで下らないネタ、仕入れて来たんでしょお。

俺の視線に居た堪れなくなった、とかじゃない。自信満々で、バレっこない、と思いきってる。

俺自身、本当に偽者なのかと確信が持てなくなるくらいに自然に装う。

それほど、妹にそっくりの少女だ。

けれど、どこがどう、と言えないけれど、明らかに妹ではない少女だ。

目的も、本物が無事かも解からないから、下手に刺激はしない方がいい・俺は曖昧な返事で、その場に佇んでいた。

第一章 第四話 樹々いつき

疑いの視線を向け始めて数日……。

疑惑は3日目で、間違いかとも思いかけ、けれど4日目には確信に戻る。やはり、妹ではない。

妹の安否が気遣われる……。せめて、無事かどうかだけは、知りたい。

もう、目の前の妹は偽者としか映ってはいなかった。

「……麻里子は無事なのか？」

「え？ ……なに言ってるの、怒るよ、もう！」

明らかに狼狽して、偽者は俺を避けた。

「……ちよつと、出掛けてくる。」

「ああ、俺も出るから鍵は持つとけよ。」

偽者を偽者と断定してしまえば、新たな発見もある。

……偽者は、三人は居るという事実。

とても信じられないが、どうやら精巧に作られたロボットか、そうでなければ妹のクローン。

それが、三日のローテーションで入れ替わる。……中には、本物の妹も混ざっているのかも知れないが……もう、見分けがつかない。

本物なのか、偽者なのか……俺に解かるのは、三人くらいの別人格を持った「妹らしき存在」が居るという事だけだ。

どの存在がどう、とは言えない……漠然と、「違う」と思うだけなんだから。

彼等の正体は解からない……ロボット製造規制法があるから、クローンという説も捨て難い。

ロボット法同様に、クローン技術にもストップが掛けられたのは同じ60年前。道義的にも、こちらは強い反発があった。クローニング技術は一部、医療分野で臓器移植の最先端技術として残るのみだ。

もつとも最近では、バイオテクノロジーの発達で擬似細胞組織が開発されてからは、お役御免の感がある。

そもそも、人間の記憶や才能、その他の細かな部分を完璧にクローニングするだけの技術はまだない。解明さえ成されていないモノがコピーなど出来るわけがない。それは、未だに空想小説の中だけの話だ。

農作物への試用も、コロニー栽培という新たな技術に取って替わられた。宇宙空間という無限の農場が手に入って、人類の食糧危機と地球の環境汚染問題は永遠に去った。

生体細胞さえ、ゼロから自在に作り出す時代……。
……クローニングという技術自体が、もう、時代遅れとなりつつある。

ロボットか、クローンか……どちらにせよ、妹が何かの事件に巻き込まれた事は間違いないんだ。

それに、ロボットよりはクローンの方が信憑性がある、……ここまで人間そっくりのロボットなど有り得ないから。

そして、中身まではクローニング出来ないから、三人は全部違うという事実にも納得がいった。

非合法的な裏社会の誰かが、そういう研究を続けていないとも限らないわけだ……。

三日間、毎日違う偽者が家には居た。三人の偽者は、それぞれが少しずつだけ違う。

ほんの僅かな違い……性格的にはかなり違うんだろう、それを無理矢理、「麻里子」という型に押し込めているようにも見えた。どう、と断定は出来ない。微妙な違いで、説明は難しい。

例えば、今日、家に居る「妹」は、三人の偽者の中でも比較的身勝手な性質で、短気だ。彼女は最初に俺が気付いた時の、その同じ偽者。二度目の来訪という事になるのか。

その偽者は俺が尾行している事にも気付かず、外出先で見知らぬ誰

かと会っていた。

「・・・樹、急に呼び出し掛けてゴメン、」

「なんだ？ 本当にいきなりで驚いたぞ。」

駅前の地下街、妹が待ち合わせていたのは、俺と同年代くらいの青年で、背の高い男だった。

冷たいイメージがあるかなりの男前で、視線は強い。薄く色を抜いた髪がよく似合う。

痩せて、ダーク系のスーツを粋に着こなしている姿は水商売の男にも見えた。同類かも知れない。

合流して、二人は喫茶店へと入る。

気付かれないように俺も二人に続いた。

『いらつしゃいませ、』

レジカウンターに取り付けられた、上半身だけののっぺりしたタイプのロボットが金属的な声を掛ける。

センサーアイが緑色に光って、俺が不審者でないかをチェックした中へ通る俺の背中をじっとセンサーで追い、どの席に着くかを確認するのだろう。『いらつしゃいませ、』続けて入った別の客にも同様のチェックを繰り返していた。

一度に何人の客を捕捉し、チェック出来るのかは知らないが、高性能なロボットだ。

奥の席へ着く。・・・すぐ前に偽者の妹が座り、その前に対面して樹と呼ばれた男が座っている。

幸い、二人には気付かれる事無く、傍のテーブルに着けた俺は、二人に背中を向けたまま、耳をそばだてた。

「・・・どうするんだ？」

「・・・」

樹の声は、少々呆れたような色を含み、それに対する偽者の返事はない。

なにを、どうすると言っのたろう？

「・・・バレてない、」

「・・・バカか、お前。」

妹の言葉に、キレたように声を荒げて、樹がテーブルを叩いた。

『お客さま、御注文は?』

テーブルに影が差した。

のっぺりとした楕円形の頭部に目を向ける。溝が一本だけ横に走っていて、赤い点滅が左右に流れている。

それ以外はデッサン用の関節人形そっくりのメイド型ロボットが、俺の前に立ち、メニューを差し出していた。

この店はロボットのメイドを置いているのか・・・、そう思う間に、前に座る二人は動き出した。

「要らない、」

メイドに一声掛けて、俺も席を立つ。

店を出た二人は、取り立てて会話もないまま、別々に歩き出した。

第一章 第五話 焦り

・・・俺は、樹を追う。

なんとなく、二人の行動の変化は俺の尾行に気付いたからだと思っ
た。

どこでバレたのかは解からないが、二人の態度は明らかに、俺が聞き耳を立てている事に気付いて口を閉ざしたから、としか思えない。
あんな一言、二言で済む用事なら、一々、外出して待ち合わせはしない。

もう一度、別の場所で落ち合うに違いない・・・。

そう思っていたが、樹が向かった先はネオ・トーキョー行きの改札
だった。

まさか、この男、そんな遠くから来たのか？

ネオ・トーキョーへ向かう旅行者は、どの地域の駅でも一発で見分け
がつく。

駅の脇に専用のブースがあり、そこで寝台特急なり光速鉄道なりの
乗車券を購入しなければいけないからだ。鉄道以外なら空間タクシ
ーの利用もあつたが。

どうする・・・？

今更引き返せない・・・いや、戻らない俺に偽者は不審を覚えるか？
ブースの自動ドアが音もなく開き、中へ樹を通すとまた静かに閉じ
た。

散々迷った挙句に、俺は踵を返した。

・・・妹の安否が最優先だ。下手に深追いして、妹を危険に晒さな
いとも限らない。

樹の正体も気に掛かるところだが、それよりも今はあの偽者から探
ってゆくべきだろう。

なんにせよ、手掛かりはまだあるのだ。

出直すでしょう。

今なら、妹の偽者が先に帰っているはずだ。・・・観察するにはもってこいだろうと思う。

どこかへ出ているにせよ、俺を欺くつもりなら、夕刻までには戻らだろう・・・。

周囲に気を配りながら、俺は家へ帰った。

いつもの経路を避け、神社の境内と家の裏手にある雑木林のルートを選んだ。

そっと裏口へ回る。・・・地下室になっている倉庫のドアが裏口で、そこから泥棒のように侵入した。

居間には家政ロボットが居て、相変わらず床にワックスを掛けている。ちら、と覗いて、姿を見せずに二階へ上がった。階段は居間からは見えない死角にあつて、家政ロボットは俺に気付かない。

気付けば必ず『おかえりなさいませ！』と挨拶をするから、見られるわけにはいかなかった。

音を立てずに二階へ上がる。

妹は二階の自室に居るらしく、なにやら騒がしく物音を立てているようだった。

何をしているのか・・・俺は隣室からベランダへ出て、妹の部屋を覗いた。そこから見えた光景は・・・妹が・・・いや、今度こそはつきりと表情が違う、妹と同じ力才を持つ何者かが、部屋の壁に自身の拳を打ち付けている姿だった。眉間に皺を寄せ、歯を剥いて、目をぎらつかせて・・・。

ひどく狂暴な面を剥き出しにした偽者が、その正体を曝け出していた。

本能的に、ヤバイ、と思った。

あれは狂暴な野獣だ、どうして麻里子があんなモノと入れ替わってしまったんだ・・・。

妹の安否が気遣われる。

なにか得体の知れない力が働いているのは確かだが、それが何なのかは皆目見当も付かない。

闇組織？　フイに、最近ニュースを賑わせている犯罪組織の噂が思いついた。俺は眩暈によろめいた。

まさか、妹は誘拐されて人身売買かなにかで売られてしまったんじゃないだろうか？

ロボットが人間の社会に深く浸透している傍らで、人間そのものも根強く商品価値が囁かれ、闇で取引されていると言う。生命崇拜の歪んだ形だろうか、生きた人間を奴隷のように扱っていた男が裁判に掛けられて、先週、有罪が確定した事を思い出した。

多額の賠償金の支払い命令、禁固刑、それに男の生殖器の摘出手術が行われ、正式に公表された……。

モニターに映し出されたホルマリン浸けの男性器……睪丸からパイパス、精巣組織まで、全部切除された物がガラスケースに保存されていた。脳幹の一部も一緒に摘出される……性欲を司る器官で、これを取ると欲望自体が湧かなくなるという。ただし、性欲は意欲に直結するため、これについては賛否が両方らしいが……。

それらの映像が証拠物件として、一般に公表されるのが慣わしだ。男の、一気に老け込んだ顔と、丸めた背中が哀愁を漂わせていたのを覚えている。

懲役15年、かなりの重罪という判決だ。被害者を死なせているから殊更に罰は重い。

犯人の精神構造における闇を解明する特番……色んな角度からの検証が行われ、そして誰もが匙を投げる。結局のところは何も解からない、理解出来ない、と。中途半端な検証で終わるお決まりの番組。

この犯人により、およそ人間の尊厳を奪われ、権利を踏み躪られて無残な死を遂げた一人の少女の遺影が、後にモニターにも流されて憤りを覚えたものだ。

犯人の心の闇がどうだろうが、関係ない。巻き込まれる者は堪った

ものじゃない。

・・・最悪の想像に、背筋がぞくりと震えた。

どうする？・・・問い質すか？

いっそのこと、麻里子の行方を偽者に直接問い質してみたい気がした。

カマを掛けてみるか？ 危険は承知の上だ、なんでもいい、手掛かりが欲しい。

じりじりと過ごして、もう4日が経ってしまったんだ、いや、4日目も進展なく終わろうとしているのに・・・。

・・・妹が無事なのか、どうやって探り出せばいいんだ・・・。

イライラと歩き回っている偽者から目を背け、俺はベランダを離れた。

廻り込んで、妹の部屋のドアをノックする。

ヤバイ・・・まだ時期尚早だ・・・そう心では解かっけていて、けたましいサイレンが響いている。

危険を知らせるシグナルだろう。

「はい？・・・なに？ 兄貴、」

さっきまでの狂暴さは鳴りを潜め、いつもの妹とよく似た穏やかな表情を貼り付けて、偽者が出てきた。

口内に溜まった唾液を飲み下す、心はまだ迷っている・・・。
切り出すか・・・。時期を見るべきか・・・。

第一章 第六話 麻里子 1

「・・・早かったんだな。」
「どうする？ 聞くか？」

・・・偽者を前にする瞬間まで迷い、ドアが開く様を目の前で眺める。

躊躇の拳句、俺は喉元にまで出掛かっていた言葉を飲み込んだ。

妹はどこに居るのか、無事で居るのか、喉から出掛かっていたものを無理に飲み込んだんだ。

そんな事を聞いて、この偽者が素直に答えるわけがない、・・・嘘を教えられるか、最悪、妹の身に危険を招き寄せてしまうかのどちらか、だ。

まだ早い・・・自身に、必死に言い聞かせたんだ。

偽の妹は一見、屈託のない笑顔を俺に向ける。

「あー、うん。なんか呼び出されたんだけど、なんもなかった。

眠かったし・・・別れて、そのまま帰ってきちゃった。」

適当な言葉を使って言い繕う。俺も嘘の笑顔を貼り付けて答えた。

「もつと遅くなるかと思って、何もしてないんだ。・・・これから買物のリストを入れるから。」

本当に言いたい言葉は飲み込んで、当たり障りなく言葉を選んでカムフラージュする。・・・家政ロボットに夕食の準備をさせていない言い訳を、そう言って誤魔化した。

リスト表のパネルに指示を打ち込むだけで、家政ロボットは買物から料理、後片付けまで済ませてくれる。

「あつ！ じゃあ、あたし、肉じゃががいいなっ、」

期待に胸を膨らませる、というように・・・目をキラキラさせて、大きな目をさらに大きく見開いて、俺を見上げる。

偽者の妹は・・・、本物なら絶対にしないような笑顔を俺に向けてそう言った。

・・・不覚にも、俺はどきりとしてしまった。
一瞬だけで消えた表情だが、本物の麻里子があんな顔をしたのは、
ずっと昔だ。

無邪気で怖いものなどなかった子供の頃に、あんな風は無防備な顔を他人にも向けていたのを思い出す。

成長と共に、大人に近付いてゆくことに消えてしまった子供の顔だ。あんな狂暴な面を見せていたと思えば、打って変わったさっきの顔は、いったい何だ？

幼い子供のように邪気がなかったような気がする・・・、あの笑顔はたぶん、彼女の本心から出たものだろうが。

「ああ、じゃあ・・・肉じゃがにしよう。」

「やったあー！」

素直に喜んでいるのか、単にフリなのかは判別が付かないが・・・。偽者はやはり本物とは少しずつ違うのだ、妹とは違う好物で喜んだ。

進展のないまま、また一日が過ぎてしまった・・・。

朝、起こした時の感覚で知る。偽の妹は、また、昨日とは違う者に入れ替わっている。

俺は最近よく眠れないから、何か物音でもすれば目が醒める・・・。けれど、何の音もなく、家は静まり返っていたはずだから、本当にいつの間に入れ替わったのが判らない。

偽者が眠っている間に、少しばかり観察してそう思った。

よく寝返りを打つ癖とか、身体を曲げたり伸ばしたりを繰り返してみたりとか、・・・なんだか今朝の「妹」は、淡い期待を抱くほどに、本物の麻里子によく似ている・・・。

偽者だとハナから思いきっていた妹が、寝姿を見る限りで、本物に見える・・・。

まさか、戻っている？・・・いや、期待はしない方がいい・・・、戻すにしても理由が解からない。

攫った事さえ疑問だらけなのに、その上にまだ・・・？

いや、けれど、何か理由があつてまた戻されたのではないか、この考えが浮かぶ。

都合のいい幻想だ。

そんな巧い解決など有り得ないと判つていて、尚、片隅で期待した偽者か、本物か、・・・見極めようと目を凝らす。

飽くほど寝顔を眺めていても、何の解決にもならない・・・。

焦燥が湧き上がる前に、深呼吸で息を整える。

自身で判断する事を諦め、俺は妹を揺り起こした。

「麻里、起きろ。」

「・・・ん？ ああ、オハヨ・・・兄貴、」

寝ぼけた目をこすりながら、妹は疑うような視線を俺に向けた。

目に、照れが混じっている。寝顔を見られていた事に気付いたようだ。

拗ねたように頬を膨らませる。

「なに？ あたしの部屋に入って来るなんて、珍しいね・・・？」

露骨に眉を顰めて、いつもは階下からしか声を掛けないのに、と訝つた。

「・・・まさか、本物？ まさか、戻つたのか？」

「麻里子・・・？」

恐る恐る、手を差し延べた。

妹がその掌に片手を乗せる。・・・違う、妹じゃない。

掴んだ手が、その態度が、違うと教えた。

コイツは二人目の偽者だ。昨日のヤツほどはつきりと違いが解かれれば確信が持てるのに、コイツはかなり妹自身に似せるのが巧くて、あやうく騙されるところだった・・・。

寝姿も、癖も、表情まで、本当によく似せている。

だから、似せようとしている事自体が、注意して見ていれば時折ちらちらと覗く。

たぶん・・・偽者。

俺がノイローゼか何かでもない限り、ここに居る少女は妹じゃない……。

そう断定した上で、浮かぶ疑問を考えた。

無理をして俺の妹、麻里子になろうとしている偽者……。

どうして、他人になりきろうとしているのか……また、疑問が増える。

彼女等自身のオリジナリティーを抹消してまで……どうして、「麻里子」に成ろうとするんだろう……。

「……そういえば、昨日は何をしに行ったんだ？」

俺がそう振れば、きつとこの偽者は答えられないだろう。……昨日のヤツとは明らかに別物……違う者のした事が解かるわけはない。

「うん？ ……昨日は駅前でちょっと……、

けど、それ、昨日も話したよ？」

昨日の偽者との会話もちゃんとチェックが済んでいるというわけか……なるほど、俺の言葉は全て、どこかで録音でもされているらしいな。

ちら、と視線を部屋の四方へ飛ばした俺に、偽の妹は訝しむような目を向ける。

「なあに……、どうかしたの？ 兄貴、変だよ？」

「いや、最近、知らぬ間に盗聴機を付けられたりするケースが多いそうだからさ。」

そんな適当な事を言って、誤魔化した。

「早く起きて支度をしないと、また遅刻するぞ。」

これ以上には刺激せずに、俺はそれだけを言うと、妹の部屋を出た。

第一章 第七話 麻里子 2

それからまた数日が過ぎた。

相変わらず、本物の妹については、何の手掛かりも掴めないまま・

・無情に日にちだけが過ぎる。

どこから、どう、手をつければいいんだろう。

どうすれば、妹の安否を知る事が叶うのだろう。

もし、犯人が居たとして・・・どうして何の連絡もしてこないの
だろう。

目的は・・・？

八方塞りで、途方に暮れてしまう・・・。麻里子はまだ無事でいて
くれるだろうか・・・？

偽の妹を学校へと送り出して、俺はもう一度、自分の部屋のベッド
に倒れこんだ。

もう布団に潜り込む気力もない。脱力、いや・・・絶望というやつ
に支配されている。

重くなる瞼を逆らわずに落とした。

緊張だけで疲れ果てている。普段と変わらないはずの日常が、予測
もつかないほどに異常だなんて、こんな事ってあるだろうか。

突然気付かされた、偽者に摺り替えられていた妹の存在。

得体の知れない者が、妹のフリをして同居する異常。

それとも俺が、おかしくなってしまうただけなのだろうか。

・・・耐えられない・・・。

いつしか眠りに落ちた俺は、日が沈み、空が赤く染まる頃になつて
ようやく目を覚ました。

もうそろそろ、あの偽者が戻る・・・。

「ただいまー！」

玄関に走り込んできた偽者を出迎えて、俺はいつも通りに振舞った。
食事の用意をして、妹の世話を焼き、時間が来る前に出勤する。

家を出るのは、本来なら心配があつて不安に駆られるのが常だったが、最近は出勤する事が心の安らぎとなつてしまつていた。・・・なんにしても、こんな家、居たくない。

「じゃあ、出掛けるから。」

素つ氣無く言つて、玄関を出ようとした。

「・・・兄貴、最近はずいぶん早く出るんだね・・・」

不満そうな上目遣いで妹は俺に言った。

カツ、となつた。

「仕事なんだ、文句言つな！」

俺が怒鳴ると、偽物も激昂した。

「なんでよ!? 仕事の時間はもつと遅いじゃんか!!!」

最近、なんだかあたしの事避けてんじゃん!? どうして!? た

つた二人の兄妹なのに!!!」

・・・!!!」

そつだよ、たつた二人の兄妹なんだ、俺と麻里子は。

それを、お前等のような得体の知れない連中が引き離れたんだろう

が!!!

だんだんと頭に血がたぎり、たぶん俺は血走つた目をしていただけだろ
う。

妹の身体を突き飛ばし、食つてかかつていた。

「お前等が麻里子をどこかへやつたんだろう!？」

心配で心配で・・・俺はお前等の顔も見たくないんだよ!!!」

怒鳴り付けた後で、少しだけ後悔した。

偽者とは言え、妹を傷付けてしまった・・・。

ショックを受けた麻里子の目が、脳裏に焼き付く。

・・・こんな、細やかな表情を、果たしてロボットが作り得るんだ
ろつか・・・。

いったい、お前等の正体はなんなんだ・・・?

「・・・じゃ、行つてくるからな。」

無情な響きがあるかも知れないな……。けれど、得体の知らない物にはあまり触れたくない。

「待つてよ、兄貴！ 待つて!!」

悲痛な叫びだった。

偽物は敏感に俺の言葉に反応する。言葉の裏にある、俺の苛立ちや疑惑を感じ取り、焦りと不快を顕わにした。甘えるような視線を向けていた妹の目が、今では大きな戸惑いを写す。玄関から出ようとする俺の前に回りこんで出口を塞ぐ。

「なに!? ……どういう意味、それ!!」

言葉だけは強く、表情には焦りが浮かぶその顔。俺の苛立ちはさらに加速する。

今までの鬱積された思いが一気に噴き出して、拙いと解かっけても止められなかった。

下手に刺激はしない、と自身に言い聞かせていたものが、決壊する。「得体の知れない場所になっちまったって、言ってるだろう！」

こんな家より、店の方がいくらかマシなんだよ！」

「なに言ってるんのか、わかんないよ!? 得体が知れないって、なに!? ……あたしのこと!?!」

妹はやけに呼吸を荒げ、パニックでも起こしたかのような反応で、それでも俺に食って掛かる。

激しい口調とは裏腹に、必死で、縋るような視線が居た堪れない……。

「自分に聞け！」

押し問答に苛立って、言葉を投げ付けた。

妹は珍しいほどに激昂して息を荒げていたが、突然、胸を押ええずくまった。

「!?!」

見る間に、その場へ倒れ込む。

どうしたんだ!? 何が、起きた……!?!

慌てて俺は妹の傍へ寄り、抱き起こした。・・・妹と同じ顔、妹と同じ細い身体・・・本当に、気味が悪いくらいに、彼女等は妹そっくりで胸が悪い。

抱きかかえた身体は温もりを持つてはいたが、続いて胸に耳を当てて、俺は驚愕する。

・・・心音が、響いてこない・・・！

いや・・・しばらく耳を当てていると、再び動き出したのが解かった。

浅い息を吐いていて、心臓も動いている。時間にすればほんの数秒か。

けれど、確実に心音は一旦、停止していた。

混乱する・・・クローンなのかと思っていたが、生身なら少なくとも心停止はないだろう。

いや、ロボットと疑うにもこの精巧さで心停止とはお粗末すぎる。

そうだ、ロボットにしてはあまりに精巧すぎる・・・居間から見える家政ロボットとこの妹を見比べてしまう。

髪のひとつ房を摘まんでみる。瞼に目を凝らす。皮膚の皺、ひとつひとつを凝視した。

有り得ない・・・こんな精巧なロボットなど、作れるわけがない・・・。

例えば医療用に開発されている人口皮膚にしても、本物そっくりの品などないと聞く。

店の客にも義手足の人が居るから、それとなく見て知っているんだ。オートマチックで過不足なく滑らかに動くが、それでも生身のスムーズさには及ばない。

それらを間近で見えていたから、この妹がロボットだという懸念だけは早くに消したんだ。

俺がおかしいのか、それともやっぱり・・・。自分自身までが信用しきれなくなる。

戸惑ううちに、妹は目を覚ました。

「……う……ん、」

ほっとして、俺は妹を廊下の床に下ろした。

「……。。。」

逃げるように、後ろも見ずに、俺は玄関のドアを開け、そのまま身体を滑らせて外へ、……家を離れた。

第一章 第八話 探偵

どこをどう歩いたのか記憶がはつきりしない……。

気付けば店の前に辿り着いていて、けれど出勤時間には間があり過ぎた。

仕方なく踵を返す。

……どうせ、この時間では店は開いていない。まだ鍵も掛けられずのままに違いない。

……さて、どうする？ 皮肉なことに、時間はたつぷりと出来てしまった……。

考えたところでどうしようもなく、俺は店の前を離れ大通りへと引き返した。

すぐ近くの喫茶店で時間を潰すことにして、ドアを開ける。

カウンター席から覗く厨房の天井は斜めに傾げていて、裏が階段になっているのだろうと思うが、その面をうまく利用してテレビモニターが一面に取り付けてある。

大きな画面が邪魔にならずに設置されて、客にも観やすい造りになっていた。

ニュース番組が流れている……。

『……ここで臨時ニュースです、昨夜未明に行われたサイドパークゲートの一斉摘発において、犯行グループと見られる密売組織の構成員一人が捜査員を振り切り、逃亡した模様です。』

最近流れるニュースは物騒な事ばかりだが、このニュースもかなりのものだと思った。

密売組織や闇取引の摘発は、警察の恒例行事のようになってきているが、一向に被害が減ったとの情報は聞かれない。

サイドパークゲートという名称にしてみても、俺には何のことかさっぱり解からなかった。

たぶん、ネオ・トーキョーのどこかだ。

いつもの癖で珈琲はさっさと飲み干してしまい、空のカップを持って余す。

入って気が付いたんだが、この店はひっきりなしに客が出入りしてとても落ち着いていられる雰囲気ではなかった。

さっきから店員がしきりにウロウロするのは、回転を悪くする俺を追い出したいからだろう。

人間のメイドより、まだロボットのほうが愛想があると思えるくらいだった。

半時間ほどで、俺はなかば追い出されるようにしてその店を後にした。

とりあえず、行く宛てもないから駅前を少し歩いてみた。

こうしてゆっくりと通りを見渡すのも久しぶりだと感じる。．．．いつも店と家とを往復するだけの毎日だったから、気付かなかった変化が幾つも見つかる。

商店街の店舗が幾つか様変わりしていたし、並んでいる商品も流行の移り変わりに応じて、変化している。

気付かぬうちに俺の感覚は、モードからは遠くなっているようだった。

目に止まるのは派手な外装のキャッチ・ショップや若者向けの古着屋。

「へーえ、．．最近はこの様なモノが流行ってるのか．．．」

すっかりオヤジになった口調で、俺は若者向けのショップで「流行！」とポップの付いた商品を手に取っている。

ふと、視線を向かいに投げると、そのビルの二階に真新しいテナントの看板が目に入った。

『扶桑興信所』．．探偵事務所？

俺は、商品のＴシャツから手を放し、誘われるようにそのビルを指して歩き出していた．．．。

事務所の中は・・・なんと言うか、乱雑で、どこかの雑誌の編集室のような雑然とした空気だ。

中へ入ってまず通された部屋は、それでも綺麗に片付いていて、応接セットのソファも、心地良い。

事務所内にロボットはおらず、さらにカメラやパソコンの類もない。・・・デジタル系は何もない。

木製の机、応接セットのソファ、スチールの大きな書類棚が2つ並んでいて沢山の紙類が収まる。

テーブルの上には雑誌が数冊、適当に積まれている。資料か何かだろうか、とうてい来客用とは思えないタイトルばかりだ。たぶん、置き忘れたんだろうな。

何の考えもなく飛び込んでしまったけれど、これからどうしようか・・・。

麻里子のことを話してみるか？ でも、信じてもらえるものだろうか？

単に俺がノイローゼ気味なだけなのかも知れないのに・・・それでも？

気を紛らわすように、適当にテーブルの上の雑誌に手を伸ばす。

『オフィス・ラブ特集〜不倫の清算〜』なんだコレ？

突然ドアが開いて、俺は慌てて本を閉じる。

応対に来たのは女性で、とりたてて特徴もない普通のOLに見えた。彼女にお茶を出され、さらに少し待って、所長らしき人物が来て会釈をくれた。

所長はまだ若いだろう、俺よりは年上か。・・・30代くらいかな？ 端正なマスクと、なにより目が力を持っていて、信頼に足る人物だと即座に思った。

俺も背が高い方だが、彼も同じくらいに背が高く、体格も良さそうだ。・・・女性にモテるだろう。

癩に障る、というのだろうか・・・少しだけ、つまらないライバル心に火を付けられたような気になった。

それどころではないというのに、俺も客商売が抜けないな。

同じ男として、見目の良い相手には嫉妬の念が浮かぶものだ。

俺だってモテる、と思っってしまった。

それどころじゃない、妹が危ないかも知れないんだ。

「・・・私がこの所長をしております、桑名です。」

「あ・・・よ、よろしく。」

腰を浮かせた俺に、彼は手で座るように勧め、自身もソファに腰を下ろした。

「・・・で？　どんな御用件ですか？」

単刀直入だ。

いきなり言っただけ良いものかどうか、俺は少しだけ迷ったが・・・ここまで来て、他にはどうにも成す術がない、と思い切った。

「はい、実は・・・、」

信じてもらえるかどうか・・・自信はないが、洗いざらいをぶつけて見るしかない。

俺は、数日間の出来事、妹に対する不審を全て、彼に話した。

「・・・妹さんが、偽者かも知れない・・・と？」

「ええ・・・知れない、ではなく、これは確信です。」

あれは妹じゃない、得体の知れない・・・なんだか、気味の悪い連中です。」

妹でない事は確かなのに、驚くほど妹にそっくりな・・・バケモノ。

「落ち着いて・・・そうですね・・・まず、携帯をお預かりしましょう。」

携帯？　少しばかり不審に思ったが、俺は相手を信用して素直にそれを差し出した。

受け取った携帯を、彼は呼び出した部下に手渡し、何やら指示を下す。

「・・・少し、調べさせて頂きますね。結構、細工がされているも

のですから。」

細工・・・って、誰にも触らせていないけど・・・、そういう事もあ
るんだらうか・・・。

再びソファに座り直した彼を見て、深い息を吐く。

桑名と名乗った人物は、賢そうな目をじっと俺に向けて何かを考え
ているようだった。表情からは読めないが、俺を狂人と思うか、不
思議な事件に興味を引かれたかのどちらかだろう。

探るように、俺は言葉を紡いだ。どういう返答が返るかは解からな
いが。

「ヤツ等の正体を探ってもらえませんか？

俺は顔を知られている。尾行もしたけれど気付かれてしまったん
です。」

「ヤツ等、というのは貴方の言う・・・妹さんの偽者達の事ですね？

・・・ロボットか、クローンか・・・第一に、妹さんが攫われる理
由を考えなくてはいけない。」

良かった、どうやら信用してもらえたらしい。

もっとも、狂人と思われて適当にあしらわれているだけなのかも知
れなかったが、とりあえず話は聞いてもらえそうだ。

心当たりはあるか？と聞かれ、俺は首を振った。

・・・その辺りが解かっているなら、もっと動きようもあるんだ・
。

「警察には？・・・と言って、取り合うとも思えませんが、これ
は・・・。」

彼も難しい事件と感じたようで、そう言って溜息を吐いた。

警察への通報は真っ先に考えたさ。

でも・・・信じてもらえるかどうか疑わしくなって、結局は未だ
に連絡出来ないままだ。

第一章 第九話 探偵2

「・・・実は、貴方と似たケースが、ここ数年前から幾らか報告されています。」

意外な事実を、彼は告げた。

「大体は、思い過ごしとして処理されていますが・・・中には、どうしても納得が行かないとして、我々のような興信所へ依頼に来られるのです。」

本人が居て、さらに検査結果が本人と断定するのでは警察も動けない・・・そうならば、家族としては探偵を頼る以外に手は残されていないわけですな。

被疑者の筆跡鑑定からDNA検査まで、警察庁が科学的に調べても本人だと言う確証しか出てこない。

なのに、家族は別人だと主張する・・・。犯罪関連で身代わりの口ボットが送られるケースとは明らかに異なり、どう調べても、家族の思い違いとしか考えられないのです。

我々が手を尽くしても、結果は芳しくない・・・そのうちに、大方は依頼を取り下げてしまわれます。

審議が進むうちに、ご家族の方でも、無理矢理に納得するしかなくなるのでしようか・・・。」

話を聞いて啞然とした。

俺も警察に通報しようかと考えていた。手に負えなくなればそれは必然の事だ。

あまりに荒唐無稽な気がして躊躇していたが、最後に頼れるのは警察だから・・・。

警察は、いわば最後のカードだと思っていたから、とりあえず自身で動いてみただけなのだ。

その警察が・・・切り札が、まったく通用しない？

「どういうカラクリかは解かりません・・・しかし、私自身は、

あなたの話を信用します。

あなたと同じように感じる人間が、あまりにも多いのです。

何かの事件が起きているのだと確信しています。

たぶん、本物の妹さんは何者かに拉致されているでしょう。・・・

そして、それに、樹という人物が噛んでいる。」

信用されている、という事が、これほど心強いことだったなんて・・・

・。俺は心にじんわりとした疼きを覚え、不覚にも目を潤ませていた。

「御安心下さい、協力しますよ。」

彼の笑顔が心底、心に沁みた。

桑名さんはその翌日から動いてくれた。

「・・・調査の経過を報告しておきましょう。」

今日は事務所を訪れ、張り込みの結果などを聞かせてもらう。・・・相談を持ち掛けてから、三日が過ぎていた。妹の安否は気掛かりだが、焦っても良い結果は出ない、と彼に諭され、なんとか押えている。

「住民登録などを当たってみた結果・・・樹という人物は登録されていませんね。」

そんなバカな事が、と、俺は桑名さんに詰め寄った。

一度しか会っていない俺の記憶を引き出して、正確な「樹」の肖像をCGで合成してみせてくれた時は、感嘆したものだったが、それが今度は打って変わった酷薄な回答で、俺は腹が立った。

「待つてください、落ち付いて。・・・裏と関連のある人物にマトモな住民登録があると思いますか？

それに、一部特権階級の者にもないでしょう。・・・彼はネオ・トキーヨーへ向かったんでしたよね？

だったら、そこからコロニーへ向かう以外にも、もう一つ、居住区があるのを思い出しませんか？」

そこまで言われて、俺も気付いた。

ネオ・トーキョーのステイツビルに関する人間なら、確かに住民登録はされない。

都心の真ん中にそびえる巨大な超高層ビル。そのまま宇宙ステーションを兼ね、衛星軌道にある幾多のコロニーへの連絡橋としての役割も果たす、最新テクノロジーの中枢部だ。

政府機関も多くがそこに集められて、そのビル自体が一つの街を形成する。ビルの大きさが、富士山を軽く飲み込むほどだ。けれど、そこで新たな疑問も浮かんだ。

「・・・特権階級なんて・・・それこそ、妹との関連がありません。」

こんな都心から離れた田舎町の女子高生が、どうしてそんな場所に住む人間に拉致されるというんだ。

あのビルに住むという事は、政治に深く関連したほんの一握りの人間だけだという噂だ。人類の八割は宇宙に展開するコロニーへ移住し、一部の裕福な家庭と、俺達のような重文建築を相続した家庭だけが、地球に残る事を許されている。

無駄な建物は取り壊され、緑地回復のための植林が行われ、原生林へと姿を変えていく。

統一政府が推進する『地球再生100年計画』のためだ。

近代に入って絶滅した動植物のみが、クローン技術によっての復活を許される。

俺達のような、平凡な一市民には何の関係もない場所だ。

「・・・可能性、の話だよ、遼平くん。」

もちろん、そんな連中が相手だとは思っていない。・・・たぶん、もう一つ、裏の関連でしょう。

ステイツビルが都心の表なら、その周りの過密地帯は闇の部分です。複雑に入り組み、絡み合う、地下街の連絡網・・・あの迷宮のどこかに居る換算が強い。」

都心の地下迷宮・・・！

近代の終わり頃に無計画に作り出された、何階層にも及ぶ地下街だ。

非認可の売春窟や犯罪のシンジケートのアジトがあるという噂だけ
ど……。

そんな場所に妹が……？

「第一階層、第二階層あたりまでは、人間の居住可能区域です。

その下になると、現在では未知の領域……狂った機械が蠢く危険
地帯だから、そんな所には居ないでしょう。

明日からは重点的に第一・第二階層への聞き込みに入る事にします。
……いいですね？」

俺はもう、黙って頷くだけが精一杯だ。

地下街の成り立ちなどは昔授業で聞かされた程度の知識しかない。
機械を狂わせる多くの要因があり、違法に廃棄されるロボットたち
がやがては変調を来たして狂ってしまう、とかいう話だ。普通の人
間が足を踏み入れるような場所ではないという。

なんだか、大変な事件に巻き込まれているような気がする……。

第一章 第十話 探偵3

探偵に依頼した後はまた、普通の生活に戻った。不審を抱かせない為にも連絡があるまで、こちらから事務所には行かないようにと念を押されたからだ。

いつも通りの適当な暇潰しに飽きて家に帰る。極力、彼女等に会う事は避けていた。

偽者達は、俺の態度の変化に不服げだ。

構ってくれない、と一番ワガママな偽者がついに癪癢を起こした。

「なんなのよ！ 最近、ぜんぜん家に寄り付かないじゃんか！

なんかあんの！？ ねえ、どうして帰って来ないのよ、飯だけ食わせて放つとくつての！？」

酷く敏感なヤツ等だから、なるべく事務所には行かないように、桑名さんにも会わないようにと努めて、偽者達を誤魔化してきた。

俺が距離を置くと、偽者達は酷く焦って付きまとう。

俺が避けている方がバレにくくていいようなものだろうに、何が目的なのかが、さっぱり解からない連中だ。

「うるさいな・・・、恋人が出来たら会いに行くのは当たり前だろ？」

苦し紛れの言い訳だ。

最近チャット・シヨップで常連になってしまい、色々話の合う相手にも恵まれたのだ。

性別は不明だが、この際は彼女（彼かも知れないが）に、俺の想い人になってもらう事にした。

もちろん、用心して、彼女にも事件の事は何一つ語っていない。

「え？ 兄貴、恋人出来たの！？」

素っ頓狂な声を上げて、偽の妹は大袈裟に驚いてみせた。

鼻に付く態度だ・・・。

もし、それが本当だったとして、それは本来、本物の妹・・・麻里子

に、真つ先に聞かせてやりたかったのに……。
どうしてお前なんか喋ってなくちゃいけないんだ。

……そう思う反面、次の瞬間にほっとしたような笑顔を浮かべた偽の麻里子に、また戸惑いを感じてしまう……。何日も一緒に居れば、例えそれが憎い敵でも情が涌くのは仕方がないだろう……。置いてきぼりの仔犬が、ようやく主人に拾い上げられたような顔をするのだから。

「なんだ……。そっかぁ……。恋人が出来たからかぁ……。」「
何と考えていたのか、自分の予想が外れた事が嬉しかったらしく、妹は途端に機嫌を直した。

「けど、ま……。おめでとう、兄貴！」
本心はどうか知らないが、とりあえずは祝福してくれる偽者に、俺は複雑な心境だった。

数日後、俺は人に会うため、都心の地下街に足を運んでいた。
妹には泊まりの逢引きだと嘘を吐いて、寝台特急に乗り込んだ。何度も携帯が鳴り、妹は声を聞きたがる。

平然と応えてやりながら、予定通り……。誤まって落としたフリで、河川の橋げたから捨てた。

これで、携帯電話の電波を解析して、俺の居場所を特定する事は不可能になる。

そんな事まで出来るなんて知らなかったが、携帯はGPSが付いているようがいまいが関係ないそうだ。

調べようと思えば、個人のデータなどすべて筒抜けだ。

あとは指定のあった道を進み、適当に地下街に紛れ込むだけだ。……
・そこから、待ち合わせた場所へ。

桑名さんからの呼び出しは、いつも他人を介して俺に届く。

まったく見た覚えのない客が店に来ると、注意をするようになった。その人はバーに来た客を装い、そっと俺にメモを渡して、何食わぬ

顔で帰ってゆく……たぶん、探偵だろう。

メールや電話で直接連絡をくれてもいいのに、と言うと、それは危険だと諭された。

「もし、闇のブローカーが相手なら、どこに盗聴機があるか……ロボットのメモリーにハッキングを掛ける可能性だってあるんですよ。機械はなるべく、通さない方がいい。」

世の中が便利になった分、危険は比例して増大したらしい。

どこを見ても、もはやプライバシーを保持できる場所はない、と言うって彼は眉を顰めた。

妹と誘拐犯との接点を探ることは難しいそうだが、まず偽者の正体を探る事から始まり、その確認のために今日は来てもらった、と言う。「……これから行く場所には、君が驚くような物が置いてあります。」

まずは、それを見てもらいます。今、君の家に居る偽者が何なのかは、それによって判明するはずですよ。」

かつては栄華を極めた東京区地下センター……今は薄汚れて、ホームレスや犯罪関係者の根城となった場所へと足を踏み入れた。

貼り付けられた装飾の白いタイルが大きく剥がれ落ち、コンクリの壁を剥き出しにしている。

電灯は薄暗く、半分は電球が切れているような状態。

汚い恰好をした老人がうずくまり、物珍しそうな顔で俺達を見上げていた。

「……数種類の風俗店があります。今は違法として禁止されている類の店です。」

生身の人間や、よく出来たドールを置いていたり……いつ、摘発のために警官が飛び込んで来るかも知れない場所ですから、気を付けて。」

違法の風俗とは、だいたいはSM絡みの事が多い。危険なプレイは身体の負担を考え、バーチャル空間でプログラムを相手に行いましょう、という触れ込みだ。

生身の人間もバーチャルの擬似キャラクターも、ほとんど見分けはつかないから、ここで遊ぶ人間は単に拘っているだけなのだろう。無論、逮捕されれば重罪に科せられる可能性が高い。

階層はB2・・・けれど、地下二階とは言え、俺にとっては奈落の底に思えた・・・。

第一章 第十一話 探偵4

汚い玄関口のドアを開けて中へ通されると、比較的キレイな空間が現われる。

桑名さんは胡散臭い中年男に耳打ちし、俺を伴い奥の廊下へと進む。そのまま、仕切りで区切られた小部屋へと通った。・・・しばらくすると、女が一人、部屋に入って来て、俺達に挨拶をした。

・・・あまり綺麗でも若くもない女。疲れた顔をして、どこかすれっ枯らした態度をしていて不快だった。

「お客さん、コースはどうします？」

ぞんざいな口調。

俺が不機嫌な顔でいるのを見て、桑名さんは苦笑を浮かべ、女に手を振った。

「ああ・・・、悪いけど、チェンジ。」

女は不服そうな顔をして、眉を顰めてこう言った。

「・・・いいですけど・・・、ウチに居る人間はアタシだけですよお？」

「それでもいいよ、チェンジしてくれ。」

女が部屋を出てゆく時には、挨拶もない。

「・・・彼女だけが人間だ。次に来るのはロボットだからね。」

桑名さんの言葉に愕然とした。

それは・・・ロボット規制法違反では・・・？

俺が何を言いたいのかを察して、彼は俺が口を開くより先に言う。

「ある所にはあるんですよ、違法の商品はね。」

・・・ここは本サロと言って、売春行為の本番をやらせる店ですが、無論、それは違法だから、相手を務める女性を確保する事自体が難しい。下手に手を染めて妊娠したとして、正規の医者には罹れませんからね。」

医学を学ぶ者は志した時点で政府に登録が成されるから、モグリの

医師は存在しない。医療関連の製品や薬剤も、全てがコンピュータを通して流通するから、流れに不正があればすぐに判る、それは俺も知っている。

金も、もちろん電子マネーのみが流通し、紙幣・硬貨は廃止されている。

中絶となればDNA鑑定による両親の確認、医療費支払いの流れから当事者の交流関係まで洗い出されると聞いている。

・・・売春による妊娠となれば、紹介者である店も客ものきなみ逮捕、という事になるんだろう。

政府は女性の売春による本番行為を認めていない・・・中絶も基本的には禁止条項だ。例外的措置として、医療上必要と認められた時だけの手術だったと思う。

科学も環境も揃っている中で、間違っただけで妊娠するという事例そのものが否定される傾向にある。

「以前、この仕事に就いてまもなくでしたが、売春に関り妊娠したために殺されかけたという女性から、依頼を受けたこともあります。」

そう付け加えた後で、けっこう、被害女性の訴えが元で、警察の一斉摘発が行われる事が多いのだ、と桑名さんは言った。

風俗として罷り通るバーチャルでは飽き足りず、こういう違法に魅力を感じる男も多いのだそうで、彼等にとってはバーチャルよりはロボット、ロボットよりは人間、というランクが存在すると言う。

裏の稼業はあくどい事が多いから、誘拐紛いの斡旋などは当たり前に起きているのだ、と教えられた。

身代わりとして、例のロボットが残された可能性も、とても低いながら「ある」と・・・。

偽物の妹は、とても精巧だ。あれがありきたりな売春組織の関係だとは思えないが、と。

次の子が部屋を訪れた。

「はじめまして、ユリです。」
くりつとした大きな目の、とても可愛い女の子が来て、俺の胸は高鳴った。

「……こんな可愛い子が相手をしてくれるのか？ そう思い、けれど一瞬でその昂ぶりは消える。」

よく見れば、作り物だと解かってしまう皮膚と表情。

桑名さんが言っていた、ロボットだ。

入って来た時にはまったく気付かなかった。

「ごく初期のロボットです、……妹さんは、こんなもんじゃない。」

桑名さんが苦笑を浮かべながら言った。

こちらの会話にもまったく反応を返さず、にこにここと笑い続けている美少女……。彼女のプログラムには、反応出来る言葉とそれ以外の言葉に対するリアクションの例文しかないのだろう。

確かに、家で俺の帰りを待っている偽者とは大違いだと思った。

「……やはり、あの妹達はロボット？」

それから、桑名さんは彼女にもチェンジを申し渡して、交代させた。

「……時間稼ぎのために。」

「ここへ連れて来たのは、彼女等を見てもらうためです。」

今の技術なら、相当に優れたロボットでも制作可能なのだという事を教えたかった。ここは違法の場所だから、あの程度のロボットしか置けないという事情があるものの……。それでもヒューマノイドは製造されています。人間そっくりのロボットも、不可能ではないのです。

「……家に居る妹さんは、間違いなくロボットですよ。」

桑名さんの声が、重く耳の内側に反響する……。薄々気付いてはいいたけど、シヨックを受けた。

あんなモノが送り込まれるなんて……。妹は、どれほどの組織に誘拐されたというんだろう……。嫌な汗がどつと噴出して、背中を濡らす。俺は部屋に備え付けの簡易ベッドにどさりと腰を落とした。

桑名さんは傍へ来て、スーツの内ポケットに手を入れ、写真を数枚、俺の前に広げた。

レントゲン写真のようにも見える、骨格やら肉の内部の空洞なんか鮮明に映っているモノクロ映像。

「・・・妹さんの偽者です。」

隣に映っているのは学校の友人。・・・見て下さい、妹さんの周りを明るく帯が包んでいるでしょう？

けれど、友人のそれに比べると、歪でとても不安定だ。・・・オーラを完全に作るだけの技術は無いのでしょうか。機械の測定範囲は誤魔化せても、人間の目でチェックすれば一目瞭然です。」

バイオメデイカルの生体電荷撮影装置・・・無機物には絶対に出現しないオーラを撮影するカメラだ。警察の犯罪捜査や違法取引摘発などで使用されると聞いた事がある。出入国ゲートにも付いている。・・・いや、あらゆる所に取り付けられ、違法なロボットの摘発に利用されている。

これがあって、誘拐事件が明るみになる事も多い。・・・もっとも被害者は一般ではなく、著名な人物で、身代金目的の誘拐がほとんどだったが・・・。

そうだ、こんな精巧なロボットが送り付けられる誘拐なんて、億単位の身代金が動く事件だけだ。

彼は続けて、毛髪が数本入った小さなビニールパックを出した。

「ゴミ回収車から回収した妹さんの髪の毛です。・・・二種類が見つかりました。」

一種は人間のもの、もう一種はとても精巧に作られた人口毛髪です。

・・・市場には出ていない。」

決定だ、俺は溜息を吐いて頂垂れた。

「・・・樹については、まだ消息が掴めません。それに、麻里子さんも。」

現在、この界隈の非認可店舗を片端から当たっているとところですが、・・・結果は、思わしくない。

個人が非合法に拉致している可能性も出てきました。」

それは・・・暗礁に乗り上げた、という明示。

「何にせよ、樹を捜す事が先決です。彼も組織の一員で誘拐に關与した可能性が高い。」

・・・麻里子さんの行方は、彼が知っている。」

桑名さんも、事の重大性を思うのか声のトーンが低い。

世紀の大事件に発展するかも知れない・・・。

いつもよりも厳しく見えたその表情が、そう語っていた。

焦りがこの苛立ちを作り出すのだろうか・・・。

居た溜まれず、俺はベッドから立ち上がり、部屋をうろつくと徘徊した。

ありもしないのに、桑名さんの視線が気になって誤魔化すようにドアに手を掛けた。

「・・・戻りますか？」

「あ、ハイ。・・・別に、もう用はないし・・・。」

感情の乏しいロボットを相手にする事も、すれっ枯らした人間にしぶしぶ相手になってもらう事も、今の俺には関心が無い。早くこの陰気な場所から抜け出て、日差しの下で伸びをしたい気分だ。

ふと、何もしないで帰る客など、不審がられるのではないかと懸念が浮かんだ。

「あの・・・桑名さん。ここでこのまま帰ったら、不審に思われるんじゃないのかな？」

「いいえ。・・・初めての客は、物見遊山の興味本意で来る事が多いんです。」

彼等は結局遊ばないまま帰るから大丈夫。初日から、いきなり犯罪行為の買春は出来るものじゃないですからね。・・・普通の反応として、不審に思われる事もないですよ。」

桑名さんの返答に納得して、俺はドアノブを回し、外へ出た。

ばったりと、次の女の子に鉢合わせる。・・・その子もロボットだ。

「あ、お帰りですか？ ……今度は必ずトモコを御指名くださいね。」
感情の籠もらない瞳と、演技の巧い声が、そうやって俺の前で品を作った。
苦笑を返す。

バーチャル世界でプログラムのキャラクターを相手にした方が、よほど、リアリティーがある。

制御チップの容量だけで人間一人分の全てを納めようというのだから、無理もないのだろうが……。リアルな人間一人、作り出そうと思えば、膨大な量のデータを搭載しなくてはいけないんだ……。こんなちっぴけなボディでは収まりきらない……。

「ここは非合法の場所です、表で使用出来ない分の制約が非常に大きいんですよ。」

精巧なロボットを作る技術は確かに存在します。けれど、それを悪用する事は到底不可能です。」

桑名さんの言おうとしてる事は解かる。

医療関連同様、ロボット工学やその他、様々な事柄はコンピュータを通じて政府が管理しているから、悪用する事自体がとても難しいんだ。

でも、だったら、あの偽物はどこから来た？

「では、我々もここで別れましょう。……次の連絡は、樹の消息を掴んでから。」

俺は桑名さんと別々に、地上へと戻った。

第二章 第一話 駅ビル

俺は桑名さんからの連絡を待ちながら、日常を繰り返していた。相変わらず偽物たちはローテーションで誰かが家に居る。いつ入れ替わるのかさえ解からない。

最近、特に元から麻里子によく似ていたヤツが殊更に見分けが付きにくくなって、一瞬妹が戻ったものかと淡い期待を抱かせられたりする。

いくら麻里子の真似をしたところで、麻里子じゃない。

偽物は偽物、所詮はロボットだ。

そんな日々の中で、またヤツと遭遇した。

・・・樹。

キャッチシヨップから出た俺の視界の隅、人々の中で妙に目立つ男の姿。

駅へ続く商店街、奴はゆっくりとした足取りで前方を歩いていた。

しばらく俺は戸惑い、立ち止まってしまう。

不審そうに、周囲の人々の目が俺を映し出してゆく・・・。

一瞬の躊躇。

桑名さんに連絡をした方が賢明だとは解かっている。

が。

せつかく向こうから現われてくれた手掛かりだ、このまま逃げられるのも癪に障る。

後を追うと、奴は専用ブースへ入り、しばらくして戻ってきた。やはり、ネオ・トーキョーか。

意を決して、俺は樹に続いて乗車券を買い求めに走った。

早くしないと、見失ってしまう・・・。

焦ってロボット駅員に購入の旨を伝え、乗車券を発行してもらおう。

樹は・・・？ 居た。

乗車する奴の姿を遠目に確認して、俺も慌てて列車に飛び込む。奴が乗り込んだ車両に向かって、そのまま通路を進んだ。ようやく見つけたぞ、樹！

『御乗車、有り難う御座います、』

金属の楕円形の顔が、そんな言葉を発して、続けて警笛を鳴らした。『御乗車の方はお急ぎ下さい、ネオ・トーキョー行き308号特急寝台車、これより出発致します、』

環境や景観保護を優先させた結果、列車系はのんびりした旅行用に、空間タクシーは時間を急ぐビジネスマンに、と用途が分別された。事故の多い空輸系の輸送は、現在ではほぼ廃止状態だ。

樹がどうしてビジネスクラスである空間タクシーを利用しなかったのか、少し疑問も残っている。

タクシーなら、軌道残滓が残されるから、その跡を追跡すれば簡単に樹の向かった場所へも辿り着ける。もしその事を知っていて、樹に俺を出し抜く意思があるとしたら、このままネオ・トーキョーで撒かれてしまいかも知れない……。

そうしたら、本物の妹へ繋がる糸も、そこでプツリと途切れてしまふ事になる。

ヤツが俺の尾行に気付いていたなら……俺に見せた態度の全てがヤツの余裕なら。

俺の手には特急寝台車の乗車券、明日の昼にはネオ・トーキョーへ到着する……。

どうする、ここで樹と話してみるか、それとも……？
とにかくヤツを捜すんだ、ここまで来たなら、それが先決だ。

中に入ろうとドアノブに手を触れさせると、即座に機械の警戒シグナルが短く鳴った。

『お客様、申し訳ございません、ここより先はトップシートとなっております、』

前方3両目を目前に、扉の上部に設置されたガードロボットに行動を遮断された。

トップシートは特別階級者など、厳重に警護される人物専用の列車で、グリーン車より上の特等車だ。

一般市民は立ち入りを許されない空間というものが、けっこう至る所に設けられていて、ここもその一つ。

多少以上に気分を悪くしながら、俺はしぶしぶ引き返す事にした。

・・・テロリストなどを警戒して、特別に警護の必要な人物を隔離するため、というのも解かる。・・・けれど、こついうあからさまな差別は、あまり気分のいいものじゃない。

・・・この向こうに、まさか「樹」が居るんじゃないだろうな・・・？

Uターンして、後部列車を1両ずつ探る。

・・・樹は居なかった・・・。

この列車に乗っていなかったのか？ それとも・・・。まさか、特権階級・・・？

ネオ・トーキョーに到着して、その疑念が確信になった。

前方三両は乗客を下ろさぬまま、さらに前方の特設ホームへと静かに移動し、滑り込んでいく。

俺は目の前でその光景を眺めながら、唇を噛んで悔やむしかなかった・・・。

樹は消えてしまった。

トップシートに座っていたという確認も出来ないまま、けれど、エコーミーに座っていなかった事は確かだ。

トップシートに座れる人物・・・？

それとも、何か別のルートで特権階級に紛れ込んでいたのだろうか・・・？

一般人でしかない俺には、もう、事件の手掛かりを追う手立てがない・・・。どうしたらいいんだ・・・。

妹に繋がる糸は、ここでプツン、と途切れた・・・。

第二章 第一話 駅ビル（後書き）

まあ、なんとゆうーか・・・サブタイトルはそのうち編集。

第二章 第二話

列車が入ったのは、広大なスペースを誇るネオ・トーキョー・ステーション、俺が最初に乗りに込んだ地元の駅とは段違いの広さで、改札までどのくらいの距離があるのか、目算では測れない。

数々の系統の列車、線路が入り混じり、ここで一つに束ねられ、またバラけてゆく。

巨大な建物は、まるで神話の巨木のように天に向かってそびえ、上部には宇宙ステーションの管制塔があると言う。・・・生まれてこのかた、修学旅行でしか、こんな場所には来た覚えもないから、よくは知らないが。

世界中に、こんな総合ステーションが点在する。パリ、ニューヨーク、ロンドン・・・各国で、首都だった場所。

・・・ここから、幾多とある、宇宙コロニー行きの定期シャトルが発進するんだ。

現在、地上に住む事を許されるのは、特別な事情を持った何%かの人間だけだ・・・。

今からおよそ数百年前、核に頼ったエネルギー事情は大きく崩れ、代替エネルギーが求められた。

そして科学技術は飛躍的に発展し、特にエネルギー関連の新技术が地球に大きな転換期をもたらした。

数々の発電技術と蓄電技術の向上、複合エネルギーによる駆動を可能にする統合技術などだ。

時を置き、現在の世界を支える基盤となる「重力制御機構」が開発されるに至り、人類の営みは宇宙を舞台とすることになった。

・・・ま、すべて教科書の受け売りだけだ。

ネオ・トーキョー・ステイツビル・・・正式な名称。

ビルというより、巨大な要塞か山だ。

実際、富士山がすっぽり入る大きさ、と修学旅行の前に習った。タクシーで少し離れた郊外へ出る。そびえ立つ白亜の巨木は神話世界の遺構に見えた。

・・・この辺りはまた、別の神話が眠る場所だ。

トーキョー・ターミナル地下のラビリンズ・・・世界でも屈指と言われる、地下犯罪シンジケートの温床。

ステイツビルが都心の表なら、その周りの過密地帯は闇の部分。複雑に入り組み、絡み合う、地下街の連絡網・・・都心の地下迷宮・・・。

近代の終わり頃に無計画に作り出された、何階層にも及ぶ地下街だ。歴史の教科書で習ったのはその程度の知識。・・・実際に、どういう環境で、何が蠢いているのかは、一般市民の預かり知らぬところだ。

指定地区の表面部分は、現在、広大な作農地帯で、稲穂が金色の波を描いている。

この真下には、危険が渦巻く巨大な地下迷宮が眠っているという・・・。

『お客様、そろそろ戻った方が・・・日が暮れますと、この近辺は危険です、』

タクシーのロボット運転手が機械的な声を掛けた。

「何か危険な事でもあるの？」

俺ははつきり言っておのぼりさんだから、疑問をぶつけてみた。

都心に入りする人間なら、聞きもしない当たり前の質問だったらしく、ロボットはしばらく止まっていた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

通信エラー、・・・申し訳ありません、検索途中に事務連絡が入ってしまいました。

この辺りは地下組織が暗躍する地域で、昼間とはかく夜となるとサーチロボットの警戒も甘くなるのです。

その間隙を突き、密売シンジケートなどの取引が行われる事もしば

しばで……』

ロボットの言葉が途切れた。

頭部を破壊されて、喋れなくなったのだ。

驚いて振り向いた先に、黒服に身を包む一団が、いつの間にか姿を現わしていた。

悠然と歩きながらこちらへ向かってくる数人の男たち……一人の手元が光つたと見る間に、タクシーの窓ガラスに蜘蛛の巣状の亀裂が走る。顎をしゃくり、どうやら、出ると命じているらしき事を理解した。

彼等に脅されるままにタクシーから外へ出る。

「……人間？ ……へーえ、珍しいなあ。

ロボット刑事の囿でもなけりゃ、こんな場所に人間が来るはずないって思ってたよ。」

「バカ野郎、ロボット壊しちまうなんて、大マヌケ！

ここに入入り口があるって、教えてやったようなモンじゃねえか、ボケ！」

口々に、彼等は色々な事を喚いていた。

さっさと取引を済ませようだの、出直した方がいいだの、連絡してからがいいだの……最後に誰かが、コイツはどうする、と聞き、

一団の全員が俺を見た。

……まずい……。

どくどくと心臓が高鳴っていたが、俺は足が竦んで動けないでいた。一人が持つレーザーガンが、俺に向いている。

「……そうだなあ……。とりあえず、見目は悪くない……。連れて行ったら、儲かるな。」

なんなんだ、こいつ等は……？

問答無用でロボットを破壊した……。まさか、犯罪シンジケート？
こんな農作地帯の……。それも、田んぼの真ん中に？

信じられない・・・

気付かれない程度にはゆっくりと、意識して、連中を見回す。一人の手には、最新のレーザーガン。

・・・動け、頼む、俺の両足。

次の瞬間、俺は脱兎の勢いで駆け出していた。

「逃げたぞ!!」

男達が追ってくる。

稲穂を掻き分け、無我夢中で駆けた。

男達の騒ぎが印になって、俺はどうか彼等の場所を知る事が出来る。

彼等はそれに気付いていないらしく、大声で居場所を俺に教えてくれている。

「そつちだ!」

「逃がすな!」

「殺しても構わん!!」

・・・物騒な言葉が聞こえた時、ふいに、上空からサーチライトが降ってきた。

攻守が逆転した。

蜘蛛の子を散らすように逃げ出した男達を、サーチライトが容赦なく照らし、機関射撃を加えて追い立てる。

一部に集めるようにライトが動き、いつ投下されたのか、ロボット兵が幾十と姿を見せた。

完全武装で、男達の持つ武器など歯が立たないだろう事が解かる。

・・・その上、彼等の数倍の動員数だ。

音もなく飛来したのが最新鋭の無重力戦闘機で、三機も居たなんて俺でさえ驚いた。

この騒ぎ、というより、最新の熱源センサーで、田んぼを走り回る不審者に気づいたんだろう。

こんな最新兵器に、実際にお目に掛かれるなんて・・・。

地下シンジケート撲滅について、政府は「戦争」と銘打っている。

・・・本気なんだ、と感じた。

第二章 第三話

あぜ道の一部をレーザーが通り抜けると、偽装されていた扉は呆気なく破壊された。

ロボットの兵士達が高举してその中へと押し寄せていった……。
一斉摘発の現場に居合わせたという事だろうか？

「タクシーから送られた最後の通信シグナルを追って、保護に駆け付けました。」

間に合つてなにより……観光旅行中でしょう、災難でしたな。
……もう大丈夫ですから。」

人間の刑事が混じっていたのか……ここにはロボットの兵士とロボ刑事しか居ないのかと思つたけど。

「あの……刑事さん、この後、どうなるんでしょうか？」
俺は何をしてればいいんだろう。手持ち無沙汰にオロオロしているだけなんだけれど……。

「もう暫く、ここでお待ち下さい。……身の安全は保障します。
現在、この地下の熱源を追って、シンジケートのアジトの一つを急襲したところです。」

人間の刑事は地上でリーダーの点滅を目で追いながら、何かと部下らしきロボット刑事に指示を与えていた。地下へは彼等ロボットの刑事がせわしく出入りを繰り返している。

服装は人間の刑事と同じスーツにコート、帽子を被っているが、頭部はマネキンのように作り物そのものだ。のっぺりとしたメタリックスキンで、余計な装飾は何一つない。

目鼻立ちはかろうじて付けられているものの、一目瞭然でロボットとわかる代物だった。

『……こちらへ。この辺りは、じきに危険となります。』

被疑者の一部が逃走しています。……こちらへ出てくる可能性があります。』

腕を引かれて振り返ると、ロボットの刑事だった。マネキンの顔は表情がなく、センサーで俺の顔を確認しているのか、赤い光が俺の顔を縦に流れていった。

人間の刑事が不審そうな顔をした。・・・俺は見逃さなかったが、ロボットの刑事は何も言わない。

ロボットの刑事に俺は質問をぶつけた。

「どうして移動するんです？」

あきらかに、向こうの刑事は不審げな顔をした。人間の刑事は、俺をここから遠ざける意味を測り兼ねたんだ。

このロボット刑事が、独断でそれを成そうとしたなら、問題があるような気がする・・・。

人間の意思を差し置いて、ロボットが先に先導するなんて・・・有り得るんだろうか？

『この方を、安全圏へ送り届けます、刑事。』

「あ？ ああ、そうだな。そうしてくれ。」

変だ、なにがと聞かれても答えようがないけれど、何かがおかしい気がする。

この取り物を、俺に見せたくないと言うのか？ それとも、もっと別の何か？

「ち、ちよつと待って・・・！」

ウムを言わさぬ強さで俺は襟を掴まれ、まるで被疑者のような扱いで、パトカーの後部座席に押し込まれた。

『このまま、トーキョー・ターミナルへ。』

・・・ちくしょう、強制送還か。

地底では何が起きているのか、その時、ズズン、と低い唸りのような音が響いた。

俺は結局、ネオ・トーキョーのターミナルへと戻されてしまった。

御丁寧に帰りの特急券まで貰って。

このまま、大人しく帰れと言われていたような気がして、ひどく不快だ。

何もかもが、単なる思い過ごしなんだろうか・・・？

「樹」も見つからぬまま、俺はネオ・トーキョーを後にするしか手がなかった・・・。

仕方がない・・・そんな風に、袖を引かれる思いで俺は家路に着いた。

また元のように列車に乗り、明日には見慣れた駅に着くだろう・・・。

ああ。妹・・・と、言っても偽者だけど・・・、一応、連絡くらいは入れておいてやろう・・・。

「もしもし・・・、俺だ。」

今、列車に乗ったところだから、明日には帰る。」

定期連絡くらいに思っている俺に対して、妹の偽者は、やけに食って掛かってきた。

『なに言ってるのよ！勝手に居なくなつていて！ どんだけ心配したと・・・思っ・・・っ・・・！』

しゃくりあげる声で、泣いているのだと解かると、ぎくりとした。

そんなに心配した？ いや、まさか、ただの演技だ。

そうは思ってみても、自然に頬が緩み、同時に胸が痛んだ。

・・・悪いことしたかな・・・、黙って出て来たから、随分、心配したんだろう・・・。

翌日、予定通りに列車は俺の街へと到着した。

なんの進展もないまま、また一日が過ぎたわけだ・・・。

時間は5時。

早朝に着くのは、この街が有名観光都市からは中途な場所にあるからだ。

妹はきつとまだ、眠っている時刻。

ひっそりと寝静まる家の鍵を開けて、中へと入った。

出来る限り静かに入ったつもりだったのに、妹の偽者には気付かれてしまったようだ。

バタバタと階段を駆け下りる音がして、妹がパジャマのまま姿を見せた。

「あー・・・兄貴！ おかえり！」

玄関先へ出てきたと思う間に、駆け寄って来て、抱き付いた。

こうしてみると、偽者と知っていても、やはり可愛く感じてしまう・・・現金だと思いつつも。

「すごい、心配してたんだよ？ いったい、なんで急に出てったりしたのよ！」

「ああ・・・ちよつとな・・・。」

適当に誤魔化してしまおうとは思っていたが、偽者の方から話題を変えてくれた。

「あ、そうそう。」

昨日ね、なんか電話が掛かってたよ？ 兄貴居る？ って聞くから、居ないって言うつといた。」

「誰だ？」

俺が尋ねると、「知らない、」と冷たく答えて、あくびをしながら二階へと上がっていく。

・・・完全に麻里子と同じ対応だが・・・こんな時くらいは違いを見せて、キチンと応対しておいてくれればいいのに、などと見当違いな不満を感じてしまっていた。

まあいいさ。大事な用件なら、また掛かってくるだろう。

色々あって、今回は本当に疲れた。・・・もう眠りたい。

第二章 第四話

麻里子が言っていた電話の相手は、桑名さんだった。

改めて連絡が来たのは昼を少し過ぎた頃。

慎重に捜査を進める必要があった、とかで、妹の行方は依然として
知れないそうだ。

ただ・・・樹の所在だけは掴めた。

彼はやはり、ネオ・トーキョー・ステイティブルに居住している特権
階級者だった・・・。

「表向きの肩書きは精密機械技師、ステイティブルの管理会社に勤め
ているようですが、人付き合いも良い方ではなく、親しい知人も存
在しません。・・・言い替えれば、正体が知れない人物、です。

専任プログラマー一級技師、・・・彼の技術なら、高性能ロボットの
操作もお手のものでしょう。」

「それって・・・つまり？」

なんだか気分が落ち着かない・・・胸がざわめいた。

「偽者のプログラム編成に関わった可能性ががあります。」

やはり・・・。

「生みの親の一人、つてわけですよね？」

俺の再度の確認に、桑名さんは黙って頷いた。

「桑名さん、あんなロボット・・・誰が作ったんですか？」

「そうですね・・・。あれほどに精巧なロボットが開発されたなら、
必ずニュースになりそうなものですね・・・。

よほどに名の知れた科学者が関わらなければ、通常のルートでの開
発は不可能・・・世界でも屈指の頭脳が関わったはず。ならば、
中央政府がその事実を知らないはずはない・・・。

不可解な事が多い事件です。」

そうだ・・・。ロボット開発には優秀な科学者の頭脳が不可欠。け
れど、全ての科学者は政府の登録と警護を受けているんだから、そ

の中から犯罪に関わるような者が出れば、すぐにニュースになるはずだ。

・・・そんなニュースはここ最近、聞かないし、高名な科学者が誘拐された、なんていう事件もない。

嫌な考えが浮かんでは、無理に振り払っていた。・・・まさか、な・・・。まさか、政府の陰謀だなんて・・・一昔前のドラマじゃない・・・。

非合法の世界、地下組織の間にも格差はあって、保有する技術は千差万別。それらの可能性ももちろん依然として存在する、と桑名さんは言う。

「地下組織の持つテクノロジー分野のレベルは、未だに未知数です。政府もそれゆえに手をこまねいていると言っていていいでしょう。」
はは・・・不安材料ばかりだな。

桑名さんと別れ、勤務時間にはまだ少しばかり早いんだが、そのまま店へと向かった。

そつえば、去年、古い服を何着か処分したから今年は着替えが回転しないかも知れないな。ちょうどいいし、今のうちに買っておくか。

勤め先から数区画隔てたところに、行きつけの洋装店がある。

そこで何点かの洋服を買い求めた。黒い大きな紙袋の中央で店の口ゴが虹色に光る。

店を出て、そのまま横の細い通路へ入る。・・・ここからまっすぐ突っ切れば、5分ほどで勤めているバーの裏口に着くんだ。腕時計を確認すると、もうあまり時間がない事が知れる。

急いでこれをロッカーへ放り込んで、準備に掛からないと・・・。暗い通路を歩き出した俺は、その後、何者かに後ろから捕らえられ、口を塞がれて、さらに細い路地へと引きずり込まれた・・・。ちら、と見えた横顔に見覚えはない。

今朝も見たニュースが頭をよぎった。サイドパークゲート事件の続

報。

・・・まさか、シンジケートの職員？

ネオ・トーキョーから遠く離れたこんな場所に？

「騒ぐなよ、死にたくなかったら大人しく、ついて来い、」

低い声が耳元に響き、背中に何か、固いものが当たった。・・・たぶん、銃口。

そのまま通路をいききって、奥まった場所で俺はようやく解放された。

思った通り、相手の右手にはレーザーガン。・・・放してもらえたと云っても、自由になれたわけじゃない。

息を殺して、俺はそれでも相手を観察した。

全身黒ずくめと言っていていいほどの服装に、目元を隠すグラスンとマスク。・・・髪は茶髪で短く、背もかなりある。

俺と同じか、少し高いかも知れない・・・。

後で事情聴衆を受けた時のために、細心の注意を払って、男の特徴を覚えようとした。

・・・高価そうだが、趣味の悪い指輪をつけている。

「おい、その紙袋の中身はなんだ？」

銃を突きつけたまま、男は尋ねる。

これは・・・さっき買った洋服だ、と思う間に男に奪われた。

「へえ、いいモン持つてるじゃねーか。・・・これでなんとかかなりそうだな、俺はツイてるぜ。」

まずい・・・男がツイてると言うなら、俺はきつとツイてない。この服を奪った後は、お決まりのコースで、俺を始末するんじゃないだろうか？

心臓が嫌な感じに軋んだ音を奏でた。

「おいおい、何を怯えた面してるんだよ、・・・別に口封じなんて考えてねえよ。」

それよりお前、ニュースは見たか？ サイドパークゲートの事件、何か言っただけじゃなかったか？」

「え……？」

瞬時に頭を回転させるんだ、ここで答えを間違つと、きつととんで
もない事になる……。

第二章 第五話

「・・・いいや、別に何も・・・ニュースは見なかったし・・・、俺は口から出任せを言い、男を欺こうとした。」

男は露骨に不機嫌な表情を作り、俺を睨む。

「・・・ふうん・・・。」

まあ、いいさ。こっちもアンタに深く関わるつもりはない。銃口を俺に向け、男は言い放った。

まずい・・・、選択を誤まった・・・？

引き金が引かれる寸前、俺は右へ飛び退った。

レーザーがアスファルトを抉る。

「ちっ！」

男はもう一度、俺にレーザーを向ける。・・・何が口封じは考えてない、だ！

充分に殺す気満々じゃないか！！

壁に追い詰められ、俺は絶体絶命の危機を迎えた。

「・・・その携帯と、アンタの命、物々交換といかないか？

俺は逃走用の資金と、見た目を誤魔化す服装さえ手に入ればいいんだ。

ここで強盗殺人を犯して、あんたの腕ごと切り落としたっていいんだぜ？」

・・・つまり、逃走の片棒を担げ、って事か。

どうするかな・・・。

このまま聞き入れてやるのも癪に障るし・・・かと言って、下手に絡むとマジで殺されるだろう。

考えている間に、頭の横あたりの壁を、再び熱源が抉る。

「俺は気が短いんだ、」

サングラスの奥の目が殺気立っている事は、男の口調で解かった。

けれど、考え方を変えれば、別の事も言える。・・・問答無用に俺

を殺さなかったという事は、この男自身は、さほど凶悪な人物じゃない、とは言えないか？

物々交換だと言うのなら・・・彼から、何か情報を得られないだろうか・・・？

あの偽者について、なにか・・・裏の世界に通じている男なら、知っているかも知れない・・・。

俺は男に質問を投げた。

「・・・協力する代わりに、少し教えてほしい事がある。」

男の殺気が薄らいだ。

先を促すように顎をしゃくる。

「人身売買について・・・何でもいい、知ってたら教えてくれ。」

俺が突然、一般人とは馴染のない話を持ち出したから、男は奇妙そうに眉を顰めた。

おかしい事を聞く、とても思ったんだろうか。

「なんでそんな事を聞きたがるんだ？」男は不審げに、続いて「はは、ん、・・・何か、ワケ在りのようだな・・・。」嫌な笑みを浮かべて、俺を見た。いや、マスクの下の口はたぶん、笑っている。

雰囲気でそう感じる。

「・・・妹が、何者かに誘拐されたんだ。まさかとは思うけど・・・」

「売られたかも？」

俺が言いあぐねた言葉を引きとって、男が軽い口調で付け足した。ムツとしたが、その通りだから、俺は頷いた。

「裏の組織が関係してるんなら、まあ、誰かに売られたんだろうな。・・・人間を欲しがる連中はけっこう居る。」

バーチャルにせよ、ドール・・・ロボットの娼婦にせよ、本物には適わない。

客は大抵、どこかの、暇を持って余す金持ちだ。・・・けっこう大変なんだぜ？ 人間を買うのも大変だが、管理はさらに大変だ。なん

せ、政府の目を盗んで飼育するんだからな……。」

見つければ極刑……それと知りつつ、成功を収めた者達がハマる落とし穴だ、と、男は言った。

「誘拐の他にも色んなルートで、生きた人間が闇組織に集められてくる。……集められた人間は、まずは競売に掛けられて、ルートの洗浄を行う。……一つの組織で全部済ませてしまうと、何かの拍子に足がついた時には全滅だからな。」

「どういうルートで、誰が関わって、仲買に誰を通して……そういった情報を消してしまってから、小売の者の手に渡す。小売の者は、たいがい非法法の店のオーナーだ。」

「……店？」

口を挟んでいいものか躊躇していたが、つい、言葉を反芻した。

「ああ。売春窟とか、見世物小屋とか、奴隷の世話を引き受けるような業者だ。最悪なのは珍味専門店か。」

「政府が取引を禁じる動物……国際保護動物とかと一緒に、人間も料理して客に食わせちゃうからな。」

「殺して、食べるのか!？」

思わず声を荒げた俺に、男は人差し指で「静かに、」というゼスチュアを返し、続けた。

「……あまり一般には知られていないな。かなりの数の店が今までも摘発されたが、どういうワケか、政府は発表しないのさ。裁判が行われた記録さえない。闇から闇へ、だ。」

「……けど、密かに言われてるんだぜ? 食ってしまうと極秘で処刑される、とな。裁判は必要ないんだろ。」

公にはしないが、その分、その手の店が摘発を受けた時は凄惨だ、とも。

「摘発の現場を見たことがあるから言えるんだ、……あれはマトモじゃない。……いきなり、焼夷弾をブチ込みやがったからな。客が居ようが店員がどうなるうが、知った事じゃないようだった。見せしめの意味合いも強いんだろうが……売買だけで我慢してお

けばいいものを、なんてロボットが言っただけ。ロボット刑事の野郎がな。」

憎々しげに吐き出す言葉は、それが事実なのだという説得力を嫌でも増してくる。

苦い唾液を飲み下した。

それは・・・あまりにも・・・本当に、警察・・・国家の仕打ちなのか・・・？

「・・・お蔭で珍味関係は勤めるだけで命懸けさ。政府が目の仇にしてるのは確かだからな。

しかも、摘発捜査に動員される連中には、人間が含まれていないんだ・・・どんな捕り物でも一人は必ず入っているつてのに、ロボット刑事だけ・・・おかしな話だと思わないか？」

最後は、俺に向けての疑問符で締め括られる・・・そんな風に聞かれても、俺には答えようがない・・・。国民に漏れる心配があるとかいう以前に、とても信じられない話だった。

俺が黙ったままでいると、男はまた喋り始めた。

「・・・そういう欲求を持つ人間は、DNAで、ある程度は把握出来るそうだけ。

政府は全ての人間のパーソナル・データを所有しているから、そういう可能性のあるヤツは、きっちりマークしている・・・だから、珍味なんぞに手を出すのは、裏社会でもよほど切羽詰ったヤツだけだよ。

普通は、手入れがあっても危険の少ない他の業種が人気なのさ。命あつてのモノダネだからな。

そういうコトだから、よほど運が悪くなけりゃ、食われたりはしない・・・普通はな。」

第二章 第六話

「誘拐の手口なんかも知っているのか？」

突然何を言い出すのやら、とでも思ったのだろう、男は大仰に息を吐いた。

「・・・俺は専門外だ、詳しくは知らないぜ？」

男が聞き返すのを、黙って頷いて先を促す。男は躊躇の後に話し始めた。

「一番手っ取り早いのが、家出人の保護を装ってそのまま売り飛ばす方法だな。世の中、そこら中に監視モニターがあるから、それを誤魔化す事が肝心なのさ。・・・本来、売買で一番多いのは、行方不明と偽って、親が子供を売るケースだがな。・・・あとは、友達のフリして近付いて、一服盛って攫う手もある。」

「・・・知人にハメられて売られるケースは、大概、ネオ・トーキョー近郊の胡散臭い場所と相場が決まってるよ。」

ネオ・トーキョー・ステイツビルの周りには過密地帯があつて、その下には古い時代の地下街があるだろう？

あそこへ連れ込まれたら、最後だな。」

「・・・やはり、都心の地下迷宮か・・・。」

ロボットによる身代わり工作・・・あるんだろうか？ 聞いてみたい。

男は俺が誘うまでもなく、べらべらと喋り続ける。口が軽い男のようだ。

「誘拐を専門に手掛ける組織とか、売買専門の組織、隠蔽工作専門・・・だいたいは専売特許で活動していて、それらがオークションで一堂に会する。地下オークションでは、盗品と一緒に人間も競りに掛けられるのさ。」

「・・・買つのは小売りの店だが、最終は個人が所有することになるな。・・・金持ちの道楽さ。」

「金持ち？」

俺が聞き返すと、男は頷いて続けた。

「そつだ。・・・世の中には、金と暇にかまけてロクな考えを持たない連中も、けっこう居るんだ。」

娯楽をやりつくして、行き着く所へ行き着いたって感じたな。・・・名の知れた金持ちじゃない、小金持ち、って連中さ。一般市民よりは金も暇もあつて、ステイタスに拘るんだろう。

上には上が居る・・・栄誉はソイツ等に適わないから、こういう屈折した愉悦に走るんだと思うぜ？」

誰に対してなのか、男は皮肉げな笑いを響かせた。

「・・・売る側は深くタッチしない。なぜか解かるか？」

政府の摘発を恐れるからだ。・・・人権侵害での摘発、つまり奴隷を困らせていて逮捕される者の逮捕率だがな、なんと96%なんだぜ。売りつ放し、攫いつ放しが、裏社会の主流なんだ。

逮捕されるのは、情報に疎い馬鹿な金持ち連中だけ、って事なのさ。

「

利用する者は、どんな相手も徹底的に利用する・・・顧客を大事にする、なんて論理は、裏社会には、ない・・・。

男は饒舌に、話し続ける。

「人間つてのは、底無しに欲深い生き物だからさ、多くの連中は、どんどん欲望がエスカレートして、結局は破滅まで行ってしまっただよなあ・・・。人間、満足つてのを知らないといけないと思うぜ？・・・自身が万能になった、とても錯覚するのかな。そして、一瞬で何もかもを失って、後悔するのさ。」

皮肉を込めて、男は言い、再び顎をしゃくった。・・・次は何を聞きたいかと言っただろう。

「そつだ、そんなに裏事情が知りたいなら、俺に付いてくるか？」
突然の申し入れた。

その時、人の足音が近付いてきた。

人の足音が近付いて、慌てた男に腕を捕らえられて銃を背中に押し付けられた。・・・拉致された。

「しっ、・・・騒いでくれるなよ、一応この銃は殺傷能力がある。出来れば殺人なんて犯したくないんだ、じつとしてくれ。」

小声で男は耳元に囁き、銃口を押し、俺に歩くように命じた。

足音は裏路地へゴミ出しにやってきた何所かの従業員らしかった。

一見は人間に見えるがどうだろう・・・暗くてよく解からない。人影はこちらに一瞥を投げると、興味もなさそうにゴミ袋の結び目を括り直している。それでも、何気に聞き耳を立てている事は解かる。こんな裏路地で男二人が寄り添って立っっていれば、いやでも興味を引くだろうから。

促されるままに、俺は路地を進み、その場を離れた。

「・・・携帯を出して、これから言う場所へ連絡を入れてくれ。」

男の次の指示だ。

言われるまま携帯を出し、ダイヤルをプッシュした。

・・・なんだか、拙い事をしているような気がする・・・このまま、何処かへ拉致されて、監禁されるのは間違いなさそうだ・・・人身売買の手口を尋ねた時に聞いた言葉がぐるぐると脳裏を廻った。男は俺を銃で脅しながら、もう一方の手で携帯を持ち、なにやら日常的な会話を仲間と交わす。・・・たぶん、暗号になっているキーワードがあり、表面とはまったく別のやり取りをしているのだろう。「さて、厄介な事になった・・・。」

お前さんは俺を信用してない、そうだろう？」

男は、俺の背中から銃と身体を離して、突然そう言った。

「仲間に連絡はついたが、このままじゃ、俺は逃げられない。」

お前さんを始末してからか、お前さんに協力してもらうかしなけりや、俺には窮地を脱する手がないんだ。」

さらに男は銃を懐に仕舞い込み、俺に肩を竦めてみせた。・・・敵意はない、という徴に・・・。

「ああ、俺の名前を言っただけでなかったな、・・・宮路だ。」

お前は？と聞かれ、俺も答える。

「須崎。・・・なあ、絶対に誰にも話さないから、このまま帰らせてくれないか？」

無駄だとは思ってしまっただけ。

「別にいいぜ。」

それに対する男・・・宮路の返答は予想外だった。

「いいが、それじゃあアタの知りたいたい事は何も解からず仕舞いだろっな。・・・誰か、知り合いが誘拐されて、行方を捜してるんだろっ？俺に付いて来れば、手掛かりくらいなら見つかるぜ？」

・・・そうだ・・・麻里子の手掛かりを見付けるには、多少の危ない橋でも渡る覚悟が必要だ。

この男に付いて行って、シンジケートの内部を探れば、きっと情報が得られる・・・。

俺は意を決して、男に向き合った。

「・・・そう来なくちゃな。」

男はにやりと笑って、また、顎をしゃくった。・・・携帯で連絡を付ける、と言うのだから。

うるたえて、どこへ？と返したら、空間タクシーを呼べ、と呆れ顔で続けた。

第二章 第七話

空間タクシーに二人で乗り込み、もう一度、男・宮路を見た。

前からの知り合いのような顔をして俺の隣で平然としているが、マスクを取ったその顔は、以外にもまだ若かった。・・・たぶん、俺と同年代くらいだ。

「・・・宮路さん・・・？ あんた、幾つなんだ？」

こういう事をここで聞くと、拙いのかも知れないが、沈黙が重苦しくてつい口走った。

宮路は微かに眉を顰め、注意を促すような視線を俺に送りながら、それでも返事をしてくれる。

「・・・そうだな・・・確か、二十二だったと思うぜ？ あんたは？」

「俺は今年でちょうど二十歳だ。・・・二つしか違わないなんて思わなかったな・・・。」

そんな若造だなんて思わなかった。俺より随分年上に思っていたのに、この落ち着きやらふてぶてしさは何なんだろう。

「・・・ま、嫌でも歳食つちまうよ。あんたと違って、のほほんとはしてられないんです。」

言い草にムツとしながらも、事実だから言い返せない。

本当に、ここ数週間、色々とありすぎて、ワケが解からない感がある・・・。

今までが平和すぎたのだとしても、それがそのまま続いてくれた方が有り難かった・・・。
しんみりしていると、宮路に頭をこずかれた。

「なにを暗い力オしてるんだよ、・・・それより、腹減ってないか？ 俺は昨日から何も食べてないんだからさ、向こうへ着いたら、まずは食事に付き合ってもらうぜ？」

宮路の言葉に苦笑を返してYESの代わりとし、俺は亜空間を映す

窓ガラスを眺めた。虹色に染まった景色が、歪められ、引き伸ばされて、窓を過ぎる。じっと眺めていると、頭がおかしくなりそう目で目を反らした。

ほんの一時間で首都圏へ突入。

亜空間から抜け出し、高度を保って低速飛行に移った。

この辺は首都のシンボルであるステイツビルが、何の障害物もなく眺められる絶好のロケーションだ。

一面の田んぼには、すでに稲穂が重い頭を垂れている。

夕暮れの中で、その黄金色は鈍い闇に飲まれようとしていた。

そびえ立つ神話世界の大樹・・・ネオ・トーキョー・ステイツビル。

「・・・あと2〜30分ほどだな、」

宮路が独り言のように呟いた。

ネオ・トーキョー・ステイツビルのタクシー乗降口・・・そこに着くと、タクシーは静かに停車した。

ガルウイングの扉が油圧で音もなく開いて、俺は宮路に突付かれて先に下りる。

さすがに首都、沢山の空間タクシーがひしめいているのが見えて、俺は呆然としていた。もう日も沈んだ頃だろうに、この昼間のような明るさはなんなんだ。

それにこの敷地の広さはなんだ、尋常じゃない。

「おのぼりさん、早く来いよ。」

馬鹿にした口調で宮路が促す。

ここから、今度は地下街へ移動するつもりだろうか・・・？

けれど予想に反して、彼はモールの内部へと進んでゆく。広いタクシー乗り場の敷地を抜けると、そのまま駅のコンコースとモール街のエントランスがあつて、宮路はモール街へと進んだのだ。

全体でどのくらいの規模のビルなのか、もう見当も付かない。

「さてと、飯にしますか・・・何が食いたい？」

俺がお勧めするのは、『カーニバル』のBセットと、『ポテトハウ

ス」のスパゲティ類だな。

ポテトハウスは普通の店だが、カーニバルはショークラブで、ダンサーのストリップが見られる。

・・・特に今日は月に一度のSMショーだけ。で、どっちにする？」

少しだけ、・・・ほんの少しだけ躊躇した。

今は妹の件でそれどころではない、と思っているのに、好奇心には勝てず、ついつい表情に出してしまったのが悪かった。宮路は人の悪い笑みを浮かべ、俺の下心を看破して小指を立てた。

ショーだけでなく、その手の娯楽もオプションで付いてくる、という事のようにだったが、さすがに俺もそこまで厚顔じゃない、慌てて首を振った。

・・・いくらなんでも、不謹慎だろう・・・。

さすがに時刻が時刻で、レストラン街は人込みでこった返している。俺は宮路を見失わないよう、必死に後を追い掛け、なんとか目的の店に辿り着いた。

なんだか・・・、胡散臭いというか、妙にいかがわしい外装の店で、俺は立ち入る事に躊躇した。

地下街ならいざ知らず、こんな店が表の・・・日本を代表するようなビル内にあつていいのか？

宮路はそんな俺の腕を引き、強引に中へと引き込んでしまう。

・・・店内は、やはりと言いか予想通りの場所で、薄暗いホールにテーブルが散開していて、中央のステージだけが嫌らしい光のライトに浮かび上がって見える。

宮路は恥もへつたくれもなく、ステージがよく見える特等席に当然のように座る。

・・・俺は、逃げたい気持ち半分に、宮路の隣へ座った。

「普通はストリップだけで・・・けど、ダンサーは本物だから、中々の見応えだぜ。」

今日はSMショーだから、予定変更でもなけりゃ、ダンサーが来る事はないな。・・・過激なダンスステップもいいんだけどさ、SMショーは生本番があるって噂だからな。」

宮路は、別にどちらでも構わないかのような口調でそう言う。

俺としては、ストリップなら俺の街にだってあったから、さして興味は沸かない。都心のステージなだし、それは素晴らしく洗練されているのだろうが、それでもストリップはストリップだろう、と俺は思っていた。

けれど、俺の住んでいるような小さな街には、さすがにSMのショーなどを見せてくれる店はない。

だから、そちらの方が俺には興味深かった。

SMショーなんて・・・いったい、どんなステージを見せてくれるんだろうか？

痛々しいばかりのモノは勘弁願いたいが、やはり、食事中に見せるというのだし、それなりに期待しているのだろうと思っている。

「・・・SMショーって・・・どんな事するのか？」

興味本意に宮路に聞いたら、彼は意味深な笑みを浮かべて俺を見つめる。

「ふうん？・・・そういう事にも興味ある？」

「い、いや・・・俺の住んでる街には、ないからさ・・・。」

なんだか苦しい言い訳じみて聞こえるな。仕方なく、俺は口を閉ざし、前を向いた。

宮路は構わずに言葉を続けた。

「・・・マゾの女は人間だが、相手をするのはロボットなのさ。

人間同士でやってて事故が起きて以来、SMの世界でも色々と制約が厳しくなったらしいぜ？」

「ふうん・・・。」

気のない返事をしながら、内心では興味深々だった。

「人間同士のプレイは御法度。・・・ヤリたきゃ、バーチャル世界

でヤルか、相手をロボットに限定するか、どっちかにしろってさ。人間同士によるSMの禁止つつって、人権保護法案で定められちゃったのが、およそ60年前だな。・・・別に本人同士が好きでやってんだからよ、放つときゃいいのにな。・・・。」

確かに政府は色々規制や条例などで、社会に干渉し過ぎると思ふ。・・・。けれど、実際に危険と思われる事を野放しにしておくよりはいいのだと、俺は学校で習った。

それにしても、ちょっと遅いんじゃないだろうか？ ショーが始まる時間はとうに過ぎている。

『お客様各位に申し上げます、・・・本日予定のショーが、急遽、延期となつてしまい、申し訳なく、平に御容赦下さいませよう・・・』

突然出てきた黒服のロボット店員が、棒読みの挨拶をして、場内のブライングに狼狽えた。

『え・・・、出演予定のロボットの不調が原因で御座います・・・え、本日の特別料金につきましては、規約の通り、一部を返金致しますので・・・』

もう、収まりがつかない。

そうこう思っている間に、またしても突然に激しいテンポの音楽が鳴り響いた。

グラマラスな美女が、ゴージャスな白いフェイクファーをドレスに巻き付けて登場すると、場はしんと静まり返る。・・・なんとモ現金だ。・・・。

彼女はロボットの黒服を長い脚で蹴飛ばして、ステージを独占してしまう。

呆気にとられるうちにショーは始まり、彼女の見事なステップと美しく引き締まったボディに、俺は圧倒されてしまった。・・・。

脱ぐことよりも、ダンスが中心としか思えない舞台だ。それでも彼女はハツラツとした中にエロスを含んだ仕草で、時折、客席に感嘆

の声を上げさせた。ストリップだなんて、失礼な形容だと思う。素
晴らしいショータイム。

何を食べたか、なんて覚えてもない。

世の中、こんなモノもあるんだ、と、ひどく興奮して溜息ばかり吐
いていた。

第二章 第八話

食事が済むと、宮路に促されるまま、俺は店を出てステイツビルを後にする。

ビルから出るだけでもかなりの時間を要したから、本当に巨大な建物なのだ。それなのに、宮路はさらに徒歩を敢行し、ステイツビルよりさらに広大な麓の雑居ビル群へと進んでゆく。

ステイツビルはネオ・トーキョーのシンボルの存在だから、白亜に輝いて見えるが、その周辺の古い旧市街地の遺構であるビル群は薄汚れてくすんでいる。

実際、廃ビル状態で打ち捨てられている物も多数存在し、浮浪者も多く居ついている。

浮浪者は、政府が定期的にやってきては更正施設へと強制連行してゆくらしいのだが、それ以外の犯罪者などには都合のいい隠れ家になっていると言う。・・・折角、施設へ入れても戻ってきたり・・・。

表面の古いビル群と、地下に広がる迷宮のような歓楽街の跡地・・・世界でも屈指の、地下犯罪シンジケートの温床で、トーキョー・ターミナル地下のラビリス。

何階層あるかも知れない地下街の跡は、今では危険に満ちた異界と同義語になっている。

どんどん進んでゆく宮路の背中を追って、俺は歩調を少し速めた。

古い街並み・・・環境指定地区にもならず、荒れ放題に放置されているのは、色々な事情が複雑に絡み合うからだと言う。区画整理も遅々として進まないらしいが、理由は・・・そう言えば知らされていない気がする。シンジケート側の根強い抵抗のせい、と、勝手に思い込んでいたな。

決して安全とは言えない路上を歩きながら、俺は周囲の廃ビルを眺めた。

・・・ステイツビルに養分を根こそぎやられて立ち枯れている、雑草のようだ・・・。

どのくらい歩いただろう、地下へと通じるアーケードの跡地へ辿り着いた。

さつきから痛いほどの視線を感じるのに、人影は見当たらない・・・不思議だ。

「さあ、ここまでは計画通り。

まず、厄介なその携帯と腕時計をこっちへ遣しな・・・なあに、すぐに返すよ。

コイツは下手すると、警察に居場所を教えちまうGPSの役割を果たす可能性があるんでな。

持ち込みは厳禁なんだよ。」

宮路はそう言つて、俺の前に手を広げて催促した。

・・・携帯をよこせ、と言っただろう。俺は、素直に小さな機械を彼に渡す。続けて、腕時計も。

いつから居たのか、瘦せぎすの小男が宮路の傍にうずくまっつていて、その二つを受け取った。

携帯は仕方ないとして、腕時計の方は・・・困るな。俺の、身分証明書でもあるから。

腕時計の裏には居住地や名前など重要なデータが刻まれ、時計板を跳ね上げた内部にも個人情報や重要なデータが入っている。銀行のアクセスコードだとか・・・。

「心配すんな、コイツがアンタの代わりにGPS持ってウロウロしてくれる手筈なんだよ。電源をOFFにすりゃ、煩い知人からの連絡も無理なくカット出来る。

さ、身軽になったトコで、そろそろ行くでしょうぜ。」

宮路に連れられて、俺は地下街へと足を踏み入れた。

・・・やはり、まだ完全には信用しきれない・・・。

もし、彼が裏切ったら・・・、そんな危険がどうしても拭えないで

いた。

外界と連絡を取れる唯一の機材を、俺は彼に渡してしまっただが・・・良かったんだらうか？

「あんたが捜しているヤツって、家族かなんかか？」

薄暗い通路を進みながら、宮路がのんびりと聞いてくる。

「・・・ああ。俺の妹で、麻里子。・・・今年、17歳になったばかりだ・・・。」

詳しい話をする気にもなれなくて、掻い摘んだ説明だけで終わる。どうせ、本物そっくりの偽者が・・・なんて騒いでみたところで、信じちゃ貰えない。

「いつ頃から居ない？」

「そうだな・・・気付いたのは最近だよ。」

居なくなってから、もう一ヶ月くらいかな・・・。」

「なるほどね・・・それで、誘拐の手口なんぞ聞いたわけか。」

家出とかだと、見つけるのは難しいしな。アンタが見つけるより、警察が保護する方が早いだろうな。」

まるで、教育がなっていないからだ、とでも言いたげな宮路の台詞だ。

小馬鹿にした口調は、聞いていていい気のないものだが、今の俺は藁をも掴みたい状況に居る。

手掛かりが欲しいと思う気持ちが強くて、彼に対する警戒はかなり薄らいでいた。

「違う、麻里子が家を出ていく理由なんかない。それに・・・今、家には偽物が居るんだ。妹にそっくりの、ロボットが・・・。」

本物の妹は連れ去られ、身代わりの精巧なロボットが残された事実を、俺は宮路に話した。

もちろん、彼は信用せず笑い飛ばす。

「妹そっくりのロボット？　ありえねえ、そんなモン、誰に作れるって言うんだ？」

近隣の住民すら誤魔化せるほどに精巧なロボットともなりや、掛か

る費用は幾らになると思う？

人間一人を売った金額なんぞ吹き飛ぶに違いないが、そんな事してなんのメリットがあるんだ？ ええ？」

大損してまで得られるものとは何だ、と宮路が言う。

「漫画の世界じゃない、損得計算考えてから言いな。」

地下街も、ステイツビルに劣らず広大な様子だ。

隈なく見て廻った者は居ないのだろうが、ステイツビルよりさらに広いという噂もある。

・・・身の危険には、まったく気付いていなかった・・・。

ふと、気付くと俺は一人きりだ。

一緒に歩いて来たはずの宮路は姿を消していた。

・・・まさか・・・、嫌な汗が背を伝う。

「ほい、ご苦労さん。・・・こっちを向かず、両手を上に挙げるんだ。」

彼とは違う声が後ろから掛かる。

しまった・・・謀られた、あの野郎。

思わず歯ぎしりを漏らした俺の後頭部に、鈍い痛みが走り、意識を奪い取った・・・。

見知らぬ男など信用するんじゃない・・・。

麻里子・・・。

第二章 第九話

突然、頬に鋭い痛みを受けて、俺は目を覚ました。・・・頬を張られたらしい。

見知らぬ男が俺を見下ろしていた。

俺は床に転がされて、手も足も自由には動かせない。縛られている事はすぐに解かった。

・・・どこなんだ、ここは？

薄汚れた壁と天井。どこかの室内だという事しか解からない。裸電球がゆらゆらと天井で揺れる。

「・・・今夜のオークションで出せそうだな。」

男が笑うと、汚い歯が不揃いの上に、かなりの数が抜けてしまっているのが見えた。

目がおかしい事を合わせても、たぶん、薬物中毒者だろう。

そういう手合いも、政府の保護を嫌って地下街へ逃げ込むのだと、どこかで聞いた。

ここで身体を壊して惨めに死んでゆくだけだろうに、彼等の心理は理解出来ない・・・。

俺が見上げていると、男は急に歩き始めた。部屋の隅に崩れるように座り込み、懐からスチールの小箱を取り出す。・・・見る間に、注射器が現われ、男は自身の腕にそれを突き刺した。

・・・嫌な空気でこの室内は澱んでいる・・・。

「ああ、もう話はない。じきに迎えが来るんだ・・・」

誰に話しているのか、宙を見ながら男がぼそぼそと話をしていた。

男の許へ俺を引き取りにきた連中は、全員がマスクを被って顔を隠していた。

のっぺりとした白いマスクは顔全部を隠し、目鼻立ちも解からない。・・・まるで、何かの呪術でも行うように、全員が揃いのマスクと揃

いの黒いスーツを着ていた。

身元を隠したいのだろう。

薬物中毒者に金を握らせ、転がされていた俺の身体を引き摺り上げて立たせた。

彼等のうちの大きな男が俺を担ぎ上げ、彼等は団体で移動を始めた。汚くて薄暗い路地を抜け、いくらかは明るく広い通路へ出ると、そこにカートのような小型の車が待っていて、後ろの荷台は頑丈な檻になっている。・・・先客が数人、そこへ閉じ込められていた。

マスク男に担がれた俺を見て、中の一人が情けない顔をする。そのまま中へ押し込まれた俺に、その男は近寄ってきた。

縛られた手足を解いてくれる。・・・有り難いが、勝手に解いていいんだろうか？

「・・・あんたも災難だったねえ。」

わたしや借金まみれだから、どっち道だけど。あんたはまた、どうして売られたんだい？」

しよぼくれたオヤジだ、やつれた頬が生活苦を物語り、彼の言葉に真実味を持たせた。

「騙されたんです、巧いこと言いくるめられて・・・信用したのが悪かった。」

俺の返事に男は曖昧に頷いて、聞いてはいない風で外を見る。

「・・・なにせよ、こんな場所に関わるのはそういう原因を持っているからに他ならないですよ。」

財政的に破綻した者や、モラル面で破綻した者、・・・ここは悪人が悪人を食う場所だからね。」

自身の未来を諦めているようだけど、なんだか意味深な台詞だ・・・。

「そんなオッサンは放っておきなよ。・・・ところでアンタ、身なりからして此処とは妙に不釣り合いだけど、名前とか居住区とか教えてもらえない？」

今度は別な男が、興味津々で俺に近寄って来た。

くたびれたオジサンよりは若く、ぎよろりと目を剥いた、変な力オをしてる青年。

「僕はルポライターなんだ。・・・潜入ルポってヤツでさ、無事、生きて帰還出来れば、大金持ちさ。」

無鉄砲な若者らしいと言えば聞こえはいいけれど、結局のところ、甘い考えが今の事態を招いてしまったんだろ。・・・甘いと言えば、俺も大差ないけど。

少し考えてから、俺は正直に答えた。

「・・・俺は須崎遼平。住んでいるのは・・・、」
住所を答えたとたん、彼等が感嘆の声を上げた。

「すごい！・・・そんな重文地区、観光でしか行った事がないよ！いいなあ、歴史ある街並みと貴重なお宝に囲まれる生活かぁ・・・。」

青年がうつとりと溜息を零す横で、くたびれたオヤジは興味ありげに目を輝かせた。

「おいおい、そんな場所に住んでいるなら、簡単に話が付くじゃないか。」

交渉次第では奴隷にされずに済むかも知れない、話してみた方がいいよ。」

「え？・・・うちは、家は確かに古いけど、別にそれだけですよ？」

オヤジは首を振り、俺の知らない裏事情を教えてくれた。

「重文地区の住人は、コロニーの住人とは区別されているんだ。建築物の所有だとか色々と問題が多いし、庇護は行き過ぎるほどだよ。コロニーで強盗が起きたのと重文地区で起きたのでは、警察や消防の対応まで違うらしい。何より火事が出る事を怖れるんだろ。が・・・パトロールもコロニー地区の2〜3倍は当たり前だよ。それに住民の顔も全員、役所でチェックされているから、欠けたら大変な騒ぎになる。」

隣の青年があんぐりと口を開いて驚いているが、俺はもつと驚いた。役所でチエック？・・・そんな事、いつ、何所で、行われているというんだ？

「そんな様子も行事もないですよ、・・・コロナーでの生活はした事がないから知らないけど、同じでしょう？」

「いいや、コロナーとは違うよ。それに、住民には知らせていないらしいよ？・・・付近を巡回する警官ロボットが、全員の確認を一定期間毎に行うと聞いた事がある。」

「案外、家庭内に必ずある家政ロボットが監視モニターの役を務めているかもね。」

青年が、現実には有り得ないような事を言い出す。

苦笑を浮かべる他の二人に気付き、彼は黙った。・・・いくら政府がとことんやると噂されても、そこまでプライバシーを蔑ろにはしないさ。そんな事をすれば大問題だし、政権の崩壊にも繋がるだろうから。

それをするとしたら、政府ではなくシンジケートだろう。今度はオヤジが口を開いた。

「なんにせよ、そこに住んでいる事が知れば、連中の対応も変わる。・・・売り飛ばす事が、とても大きなリスクを伴うと解かれれば別の事を考えるだろう。」

金で片付けようとするよ、きつと。・・・それも、君に用意出来るだけの、安い金額だね。」

「重文地区って、特別なんですか？」

なんだか思いもしない言葉を聞かされて、つい聞き返してしまった。重文地区の人間がとても特別で、厄介な問題を含んでいるかのようない方じゃないか。・・・そういうのは、ステイビルの特許住人だけの話だと思っていたのに。

「・・・特別と言えば特別さ。普通に生活している分に対しては、我々、コロナー住民と変わらないけど・・・そう、権利やら利便性な

んかは同じだね。それより問題にされるのは、相続面での事だよ。」
相続と言われても、俺にはピンと来ない。

「・・・確かに、遺産相続の際に揉める事はあるだろうが、重文建築が解体される事はないし、持ち主が変わるだけじゃないんだろっか？」

俺の表情で気付いたらしく、彼はくたびれた笑顔を少しだけ歪める。
「・・・少し困った顔が出来上がった。

「いや・・・建物は問題ないんだよ・・・。それより、気が付かなかった？」

コロニーでは、大型廃棄物に対しては届け出も許可も必要ないのに、重文地区だけは必要だった事。」

あ、言われて俺も気付いた。・・・今更、だけど。

生活面でてくるゴミの管理は、重文地区だととても厳しい。生ゴミやプラスチック容器はそうでもない、だけど粗大ゴミや不用品は、届け出をした上で許可を得ないと捨てる事が出来ないんだ。

面倒な手続きの上に許可が出るのに時間が掛かるから、結局捨てずに片付けている家が結構ある。捨てるだけでなく、勝手に人に譲渡したり売ったりしてもいけないらしい・・・。

え？ それってひょっとして・・・？ そんな顔をしていたら、彼は頷いた。

「政府としては、古い家屋に残る古い家具も、生活臭をそのままにして、残しておきたいんだよ。

何せ、貴重な資料ばかりだからね・・・。それに、これは噂だけど、比較実験も行っているんじゃないか、とかも囁かれているんだよ。」

「そうそう！ 僕もその問題についてレポートした事があるよ！」

政府は、重文地区の住民とコロニー住民との接触を、わざと妨害している節があるってね！」

自身のフィールドに話移ったとたん、それまで大人しくしていた青年が口を挟んだ。

「両者の交流は少ないし、コロニーから越してくる事もほとんどな

いだろうか？ 結婚するとしても、ひどく煩雑な手続きを取らされるし・・・重文地区は他人を受け入れない、ってコロナーでは密かに言われているんだ。

そのくらい、政府は重文地区の人間を隔離したがつているんだよ。

・・・これは僕の推理だけど、政府はコロナーに措ける生体への影響を調べるために、長期計画で重文地区との比較実験を行っているんだと思うんだ。」

「それを言い出したのは、確か20年ほど前の、アメリカ発行の科学雑誌じゃなかった？」

おじさんがすかさず突っ込みを入れると、青年は舌を出した。

「あちゃ。・・・知ってましたか。」

けど、コロナー内部の重力は地球の3分の2程度になっているし、色々と違う面もあるじゃないですか。

やはり、ちゃんとしたデータは取りたいってトコじゃないですかね？・・・現に、アメリカ政府はその雑誌の指摘を受けてから、まるでその記事を認めるみたいな形で、比較実験を大々的に開始しているんだし。」

・・・なんだか、俺にはチンプンカンプンな話題で、二人は盛り上がる。

けれど、腑に落ちない。

別にコロナーがどうか重文地区が隔離だとかではなく、彼等があまりに呑気に構えている事が、不思議でならないんだ。・・・曲りなりにも、これからどこかで売られるかも知れないというのに、なんでこんなに余裕綽々としているんだ？・・・売られるかも、知れないってのに。

第二章 第十話

「……あの……、どうして二人とも、そんなに落ち着いてるんですか？」

俺達、これから裏社会の誰かに、売られてしまいかも知れないんでしよう？ どうして？」

堪りかねた俺の質問に、二人はキョトン、とした顔で振り返った。

「……なんか、俺の言った言葉がおかしかったみたいな表情だ……。」

「……ああ！ そうか、君は知らないのか。」

ポン、と手を打って、おじさんが頷いた。

「僕等も別に、平気なわけじゃないんだよ……？」

けど、僕はこういう目に遭うのは二度目だし、こっちのオジサンも……でしょ？」

青年に視線でそう聞かれて、おじさんはもう一度頷いた。

「……わたしは三度目だよ……おはずかしながらね。」

ギャンブルに目がないもんで、借金が消えないもんだから……何度も違う組織から売られてるんだ。

もう治らない病気のようなモノと思って諦めてるよ。」

「僕は以前、腎臓1個に試験薬を注射されて、オシヤカにした……。」

・腎臓病のクスリの検査で、人工的に病気にして、臨床試験を行うつていう契約さ。

今度はなにかな……、けど、まだ命を取られるほどの危険は回避出来るよ、うん。」

二人の話では、裏社会には被害者と組織との間で、暗黙の決まりのようなモノが確立しているらしい……命の保障はないにしても、確率が数%なんていう危険極まりない実験に、いきなり売られる事はないそうだ。

「……そういう実験は、本当に切羽詰ったような連中が引き受け

るんだよ。まあ、わたしもいずれ・・・だろうが、今回はまだ大丈夫さ。いざとなれば、地下で行われる賭け試合に出場する手もあるしね。

君も悲観するコトなんかないよ、君だったら・・・そうだな、変態相手に尻を貸して、それでも早いうちに警察が保護してくれるだろうさ。それより、重文地区だと言えば、すぐ解放してもらえさ。うまく逃げられたら、次からは気をつける事だよ。」

なんにせよ、こんな場所に近寄るべきではない、と二人から言われた。

「裏社会では、一般からはみ出した者達が、互いを食い合っているだけなんだ。・・・君みたいに、たまに巻き込まれてしまう者も居るが、ほんの一握りさ。・・・みんな、こういう世界に関わるべくして関わった者ばかりなんだよ。そっちの彼にしても、わたしにしても・・・ね。・・・我々と君じゃ、住む世界が違うんだ。」

疲れたおじさんは、そう言って、また疲れた笑みを浮かべて肩を竦めた。

「オークションの流れを覚えておいてあげよ、参考までに・・・ね。人間が一人消えるんだ、そりゃオオゴトになる。だから、大抵は契約の形を取るんだよ。サインをしなければ、地下街のダストシュートに放り込まれるからね、誰だってサインするさ。」

契約という形にして、被害者の口を封じるんだよ。だから、命までは取られないで済む。」

くたびれた男は、そう言うてくたびれた笑みを浮かべた。

「契約書は労働契約の形を取るが、内容はほとんどデタラメだ。けど、年季が過ぎて解放されても、それがあから感謝料請求なんかは出来ないんだ。・・・せめて警察に駆け込んで、連中を一網打尽にと考えるくらいさ。」

一部の奴隷契約や未成年が絡む場合を除いて、ほとんどは泣き寝入りだね・・・。

組織を通じて行われる契約だ、知らぬ存ぜぬで通せば、善意の第三者で終わってしまう。

大手の製薬会社なんかが、よく新薬の実験の為にこういう契約書を欲しがる。その場限り、一回ずつ、健康な人間限定で、別人のデータが沢山欲しいんだ、長期で縛るんじゃなく、命懸けの短期的な契約を欲しがるんだよ。新薬開発の初期データだね。・・・一人、一回、使い捨てさ。それでも大金になるらしい。

なにせ、ロボットでは代替の利かない仕事は、こういう場所の専売さ。

これは正当なものだよ、・・・判を押す時は違法でもね。皆、死にたくはないから、捕まっている間は秘密を守る。・・・わたしなんかは、たぶん、そっちへ廻されるよ。」

また、青年が口を出した。

「ぼ、僕もたぶん、その口だね。・・・女はもつと別の契約があつて、それと、君みたいに見目のいい男も、一部の変態が欲しがるそうだよ。ペット契約と言って、地下街の愛人館なんかで密かに飼うんだってさ。」

ペット・・・生きた人間を、ペット？・・・変態だ。

肩を竦める青年の言葉を引きとつて、オヤジさんが答えた。

「ペットというか・・・愛人契約の一種と考えた方がいいよ。」

これも一生縛られるわけじゃない、すぐに飽きて、別のペットを欲しがるから安心していい。

そして、こういう客はコダワリが異常に強いから、誰かの『お古』は嫌う。オークションをタライ回しにされて、段々と待遇が悪くなって、最後は新薬の実験データ・・・けど、大概はその前に、警察の摘発で救い出されているよ。週に一度は警察が地下街に踏み込んで、売春窟を潰すんだけど、その時に百人単位で保護される。・・・

運悪くその日に来た客は、逃げようもなく逮捕されるそうだし・・・警察は熱源リーダーで確実な包囲を敷くからね。・・・もつとも、掴まるのは組織の人間ではなく、セレブな客たちばかりだそうだけ

ど。」

オヤジは肩を竦めて締め括り、青年はちらりと前の一団に視線を送った。

彼等は俺たちの会話にも気付いているだろうに、知らん顔で何かを待っている様子だった。

SMだけでも規制が厳しいのだから、奴隷なんでもつての他だ、
・表では、例えどんな金持ちであっても、我を通す事は許されないから、リアルな奴隷が欲しけりゃ、地下で隠れて楽しむしか手がないのだ。

「連中は、決して顔を晒さないだろう？　・・・保護された犠牲者たちがモニタージュで関わった客達の力才を警察に知らせてしまうから、用心しているんだよ。その一方で、客は契約書があるからって理由で安心しているよ。捕まったとしても、罰金を支払い、多少、自身の経歴に傷が付く程度だからね。」

誘拐の事実は知りません、契約書を交わし、同意の上で買いました。
・って事に落ち着く。

・・・買春の罪は軽いものさ。
よくニュースで聞く、禁固刑やら去勢法なんかを受けるような奴は、ほんの一握り・・・裏社会でも嫌われる、そうとうの変態だけだよ。」

どうしても口を挟みたいのか、また青年が話の途中で押し退けて喋り出した。

「そう！　買春の刑罰が低いせいで、ほとんどの者は懲りない、だから、悪循環をも産み出しているんだ。」

逮捕されてもこの程度、とか思うと、凶に乗るだろう？　・・・そして、どんどんエスカレートする。

最初は成人を買春するだけだったのが、未成年になり、アブノーマルなプレイになり・・・どんどん、過激で危険な趣味へと走るようになるだろう？　・・・人肉を食いたがる奴だって、最初からそんな

欲求があつたワケじゃないんだからね。政府もワザとそうしている節がある・・・危険因子はさつさとドロップアウトしろ、って話かもよ？」

まあ、確かにその通りかな・・・。

政府の対応を見てみると、どうも人間をフルイに掛けているような気がしてならないよな・・・。

これだけ人口が爆発してしまうと、もう、劣悪遺伝子はいらない、とか思つても不思議じゃない。犯罪者を根元から断とうとか思つているのかも知れないな・・・。

性犯罪を冒す犯人ほど、凶悪犯罪を冒す可能性も高いと言つからな。「組織はちゃっかりと足元を見ているのさ。犠牲者と加害者のどちらからもふんだくれるように。」

そして、自分は泥を被らないように。

ほとんどは自己責任・・・危険と承知で買う方が悪い、捕まる方が悪い、って理屈らしいよ。

契約の形を取るから、現行犯以外はほぼ、野放しさ。

なんにせよ、僕が調べたところによつても、地下街に捕らえられていた最長記録は10年だね。」

・・・10年・・・、10年間もの間、奴隷のように縛られるのか？ ひどい話だ。

でも、噂に聞いたような、一生逃げられない場所、というわけでもないらしい・・・。

第二章 第十一話

「組織に捕まったら、死ぬまで解放されないのかと思っていました。・・・」

俺が素直に恐怖を口にすると、おじさんは安心させるように肩を叩いた。

「大丈夫、そこまでやれば政府が本気になる。・・・彼等だって馬鹿じゃない、適当に客を売って、当局を避わすから、警察に保護される方が圧倒的に多いんだ。・・・死ぬのはよほど運が悪いヤツだけだよ。」

「・・・無事に帰れたらニュースをよく聞いてみるといい、地下街で捕まるのは客ばかりで警察の突入で組織が壊滅したというニュースはほとんどないよ。」

よく解からないシステムだ・・・、それでは組織の信用に関わるのではないのか？

俺がそんな風に考えている事を察知したのか、青年の方が説明してくれる。

「・・・客を売るなんて、信じられない？」

けど、実際にはそうなんだ。客は一番立場が弱いからね、・・・自身の欲望はここでしか叶わない、危険を承知で来るわけだろ？・・・

・足元を見られてる。

組織としては、売春窟は定期的に潰れる方が都合がいい。回転が早い方が商売にはいいし、値崩れる心配がない方が有り難いんだよ。安心して商売出来るとなると、同業が増える。・・・インフレを起こすし、過当競争が起こるからね。組織の数は増えて欲しくないんだ。影では熾烈な縄張り争いと謀略の渦さ。反面で組織同士の馴れ合いというか、強固な繋がりもあるんだ。

奴隷契約にしても何にしても、全額前払いが当然だろ？

そうしたら、金さえ貰えば後はさっさと奴隷に逃げられた方が儲か

るんだよ。・・・飼う間の資金が含まれてる。

組織壊滅の話は大抵、暗黙のルールを破った所が、他から吊るし拳げられた結果なんだよ。他の組織を敵にするより、馴れ合って、客を裏切る方がはるかに安全だからね。

何所も同じだと思わせれば、客はそれを信じ続けるよ。より安全な場所を、なんて言う客ほど売られる。

・・・人身御供を警察に差し出しておけば、取締りが本格化されることもない・・・駆け引きなのさ。」

「そうだよ・・・、ここでは、悪いヤツが悪いヤツを食うんだ・・・。」

そうか・・・被害者よりも、ヘタをすれば客になるヤツのほうが、酷い目に会う・・・。

「お喋りはそろそろ止めろ、」

覆面の男の一人が、振り返って低く恫喝した。

「・・・そこのお前、俺達は売りに来たただけだ。交渉なら終わった後にしろよ？ でなければ、それと承知の輩に売らねばならないからな。」

男達の誰かが喋ったのは、この時を入れても数回だけだ。

俺が怪訝そうな顔をしていると、男の代わりに青年が慌てて説明してくれる。

「ああ、そうだ、余計な事は喋っちゃダメだ。

君が重文地区の住民だという事は、タイミングを計って話さなくちゃ！ ヘタを言えば、最悪の相手に売られるかも知れない。変態つてのは、上には上が居るものだからね・・・！」

ワケが解からない・・・、俺がそんな表情をしていると、彼はさらに付け足す。

「珍珠の店だよ！ 人肉を売るヤツ等に狙われる可能性があるんだ！」

その一言に、俺は生唾を呑む。・・・人肉・・・。

「それでなければ、ブランド嗜好の強いキチガイおやじとか・・・。

組織としては儲かるけど、リスクが高過ぎて普通は敬遠されるような取引に廻されるのさ。迂闊な事は言っちゃ駄目だ。」

彼の言葉を聞いて、俺は背筋に冷たい汗を感じ、身震いをした。リスクが高いとなれば、買い控えが起きる・・・安い値で取引されるのは、最低ラインの場所のみだろう・・・。

安価で仕入れた品を、高いリスクの代価を上乗せで、アブナイ客に売り付ける・・・。

青年に代わっておじさんが口を開いた。

「会場に着いたら、たぶん我々はバラバラだ。だから教えておいてあげよう、まず、彼等が君を会場の支配人に売った後に、直接支配人と話をするんだ。」

君が重文地区の者と知れば、リスクを恐れて、直接君との交渉に乗っってくれるだろう。

彼等は何より警察の手入れを恐れる・・・。

・・・彼等の言うままに、君は財産を処分して身の安全を買うとい

い。
「警察なんて・・・話を聞いた後だと、あまりアテに出来るとも思えない・・・。」

不安げな顔でもしていたら、俺に笑いかけながら、おじさんは一言付け足した。

「・・・君はまだ、政府や警察の本当の恐ろしさを知らないんだ、彼等はシンジケートなど足元にも及ばないほどに残酷だよ・・・。」
裏社会との繋がりが長いこの人の言葉だ、嘘はないに違いない。

けれど・・・その言葉を鵠のみにするには、あまりにも重い・・・。

そして、俺達はオークションの会場だという場所へ連れてこられた。表なのか裏口なのかは解からないけれど、ここも他で見たのと同じ、薄汚れた、何の変哲もない普通の構えの店舗だ。組織の覆面男が特徴あるノックを響かせると静かに扉が開き、別の覆面が顔を出した。
・・・今度は被り物の、ヌイグルミのクマ頭。

俺達は彼等に突付かれて車を降り、扉をくぐる。

中は薄暗い廊下が長く続いて、両側にはいくつかのドアが付いている。俺たちは後ろ手に手錠を掛けられ、足首にも同じような物を付けられて、被り物集団に引き渡された。

覆面達には、交換で黒いアタッシュケースが渡る。・・・取引終了、というところだろうか。

無言のままケースを受け取り、男達は帰ってしまった。

又イグルミ頭に背を押され、俺達は順番に廊下を進み、それぞれが別の部屋へ押し込まれる。

・・・俺が押し込まれた部屋には、もう一人先客が居て、彼女はすれっからした表情で煙草を吹かしていた。

彼女の指先が短いチェーンと、そこに付いているタグをくるくると廻している。

彼女はとても美人だった。

「あら、新入り？　・・・運が悪かったわね、この部屋へ入れられるなんて。

ここは犬小屋よ、SM専用奴隷を入れておく部屋。・・・最近は需要が増えていらいから、まあ、仕方ないわね。諦めた方がいいわ。」

彼女の言葉に、警戒も忘れて思わず聞き返した。

「え？　いきなりアブナイ場所へは売られないはずじゃあ・・・？」

「時と場合によりけり、でしょ？　品数が足りてないのよ、けど、この部屋はまだマシ。・・・豚小屋だったら、SMショーとか、不特定多数の相手をする羽目に陥るんだもの。」

ここは個人が買う奴隷の部屋よ。文字通り、ペット小屋ね。せいぜい、いい御主人様が付く事を祈るわ。」

彼女はやけに余裕でそう返し、煙草の煙を吐き出した。

俺の不審顔に気付いたのか、彼女が艶やかな笑顔を向ける。

「・・・あたしはいいの。自分で望んで来たのよ、パパが買い戻してくれるのを待ってるワケ。」

俺に向かつて、明瞭な答えをくれた。

驚いた、世の中、色んな人が居るとは思うけど、こんな人も居るんだ……。

けど、信じられないな……、彼女はもしかしてマゾとか言う人種なんだろうか？

「そういう目で見られると、ゾクゾクしちゃうわ。……地下街を一人で歩くのと同じくらいに刺激的。」

彼女がうつとりとした目でそう答えた時、突然、扉が開いて又イグルミ頭が顔を出した。

さっきのクマとは違う、今度のヤツはウサギの頭を被っている。

「ねえ！ 捜して来てくれたんでしょ？ パパはどこ？」

嬉しそうに目を輝かせる彼女に、又イグルミ頭は黙って一枚の紙を差し出し、気付いた彼女がそれに手早くサインを記した。売買契約書とか言うやつだろうか。

「あんたのパパは競り勝ったよ、よかったな。」

「あら、他のヤツが横槍入れて来たのね、……最低。」

彼女は長い黒髪を手で梳き流して、口を尖らせる。……そんな仕事一つが、とてもチャーミングで、大金を積んでも手にしたいという、彼女のパパの気持ち少しは判る気がした。

「……じゃあね、ボウヤ。」

警察の手入れなんかのお蔭で離れ離れにされたけど、どうにか戻る事が出来たわ。

あたしとパパは理由があつて、表の社会じゃ結ばれない……そんな二人にとっては、この地底は文字通りの楽園なのよ。他人に迷惑を掛けているわけでもない……ただ、都合があつて、傍に居られないだけの関係だつてあるでしょ？ それなのに、犯罪者達とあたし達は一括りよ。

奴隷とか言つて毛嫌いする前に、一度、経験してごらんさい？
……

……見えないものが見えるようになるわ。
バーチャルやお見合いなんかとは、比べ物にならない魅力があるわ

よ。」

彼女は部屋を出る前に、俺にウインクを遣して、そう言った。

「あ、パパの名誉のためにも言っておくけれど、・・・このシユミを教えたのはワタシなの。」

悪戯な笑みを浮かべる彼女は、まさに小悪魔と形容すべき女性だ。

・ ・ ・ 魅力的だと思った。

第二章 第十二話

彼女が何所かへ送られて、しばらくが経った。

部屋には、もう追加の人間は来ないような空気だ。

どうしようか・・・、カートで知り合った二人には、交渉にはタイミングが必要だと言われたけど・・・正直、いつ切り出せばいいのか、測れない。

ドアの外を、見張り役か誰かがゆっくりと通り過ぎてゆく。

ドアを叩いて、声を張り上げれば、聞こえないことはないかな・・・？

「おおーい！ ちょっと！ 用があるんだ、聞いてくれ！」

出来る限りに声を張り上げて、俺は外を歩いている人間に向かって怒鳴った。

ドアを乱暴に叩き、注意を促したが、聞こえただろうか？

足音が止まり、少し戻ってきて俺の居る部屋の前でもう一度止まった。

ドアノブがゆっくりと廻る様を、俺はじっと見つめてしまう。

胸が痛いくらいに打ち付けている・・・。

「・・・なんの用だ？」

茶色い虎縞ねこの頭を被った男が、顔を覗かせた。

「あ、あの・・・支配人と話がしたい。」

俺は特別地区に住んでいる、・・・そう言えと、アドバイスを貰ったんだけど・・・？」

男はしばらく考えてから、「・・・住所は？」と聞き返した。・・・やった・・・！

俺はネコ男に住所を教え、それから、問い合わせてくる、という彼の帰りを待つ事にした。

どのくらいの金額を吹っ掛けられるかは解からないけど・・・奴隷よりはマシだ。

待つこと半時間くらい・・・不安が頭をもたげ始めた頃に、ドアノブがまた回転した。

支配人？

部屋へ入って来たのは、さっきのネコ頭ともう一人・・・福助の頭を被る人物だった。

「・・・君が住んでいる街に照会してみた。確かに、住民登録があるね。

で？ 私とどんな話があるんだね？」

「俺を解放してください。・・・タダでは言いません、俺に用意出来るだけの金額は、必ず用意します。」

これでいいんだろうか？ こんな交渉なんて初めてで、よく解からない。

「ああ、いや、お金は結構。」

「・・・先祖代々で伝わるというお宝が数点、あるでしょうか？ 掛け軸の一本で結構ですよ。」

え？・・・けど、あれは門外不出・・・と、いつか、蔵には小学校以来、入ったことはないんだけど・・・。

それより、どうしてそんな事まで解かるんだ？ 蔵にはさすがにセキュリティシステムを入れて、自動管理モードにしてあるし、ロボットが管理してくれるから、業者にも見せた事はないのに・・・。

「あの・・・？」

俺の疑問を、支配人は別の意味に取ったらしく、聞きたい事とは違う話を始めた。

「大丈夫、あなたには偽造品をお渡しします。・・・ロボットの目では識別出来ないから、管理会社や政府に知られる事はありません。本物とそれをすり替えて、本物の方を、渡してくださいさえあればいいですよ。」

あなたには、組織のロボットを一体、付けておきますから、それに渡してください。」

そう言った後で、彼は後ろに控えるネコ頭に顔を向けた。

ネコ頭は頷いて、部屋を出て・・・しばらくして、戻った。彼の後ろには黒い犬が連れられている。

「・・・この犬を、カムフラージュに使います。ロボット・ペットです。」

赤い首輪と、タグにはBR1-F1043の数字です、覚えておいてください。・・・これがあなたの家の近くをうるついたら、取引開始です、いいですね？」

野良のロボット・ペットは、コロニーでは社会問題になっている。俺が住んでいるような地球上の住宅地では、まださほどではないけど、ロボット保護法案やら何やらで、処分が出来ないんだ。

内臓されたバッテリーが消耗して、停止するまで放っておくしかない・・・それか、誰かが拾うまで。

支配人は続けた。

「・・・野良に構うフリをして、家へ入れてください。飼うつもりだとも言って・・・ドアの鍵を開けておいてやれば、品物を回収した後は勝手に居なくなります。」

動物のロボットは人間のロボットと違い、比較的高度なモノが作られている。

このロボット犬も、俺を見上げてぱたぱたと尻尾を振っていた。それでもロボットだと一目で解かる。両目がある位置にはサーチアイが、まるでサングラスでも掛けているかのように埋め込まれている。毛皮を纏っている分、ヌイグルミか剥製の類似品だ。

「・・・いちおう、名前があるのでですよ、ブラフ、と言います。・・・ま、余談ですが。」

福助の支配人がロボット犬の頭を撫でると、この犬はさらに激しく尻尾を振って喜んでいた。

「ブラフの体内には小型の核原子炉が組み込まれています。・・・前期モデルの古いロボットなのでね。」

お分かりですね？・・・契約反故の際には、街ごと、フツ飛ぶ事にもなりかねませんから。」

背筋が凍った。・・・いや、まさか……。だって、前期モデルは街でもよく見掛けるけど、みんな、原子炉は停止させて、内部の補助バッテリーを駆動元に行っているはずだ。そう、政府からの指示があった。

「通常は内部バッテリー使用です、御心配なく。原子炉も停止中ですよ、他のペット同様にね。」

ただし・・・いつでも駆動可能なようにと、プルトニウムの充填はしてありますし、制御装置は生きていますよ。一見では解かりませんがね・・・。」

・・・俺に、そんな爆弾を背負わせる気なのか・・・。

「品物の全リストはさすがに入手出来ませんでね、適当に、高そうだと思うもので勘弁して差し上げますよ。」

コイツの腹には、まあ、掛け軸一本がせいぜいですからねえ・・・。

「
福助はやれやれ、とでも言いたげに、肩を竦めると部屋を出て行った。」

彼の姿が廊下の外へ消えてしまうまで、傍で控えていたネコ男は頭を下げ続けている。

残ったのは、ロボット犬とネコ男だけだ。

「・・・じゃ、送って行こう。」

何の警戒も必要なさそうな声だった。彼の後ろを歩けばそれでOKみたいな、呑気な響きがあったのに。

一歩、踏み込んだネコ男に、鳩尾への強烈な一撃を食らった。

うう、と呻いて、俺はその場へ倒れ込んだ。

第二章 第十三話

気付いた時には、白い病室のベッドの上だ。

地下街ではない事は、隅々まで清潔に保たれた室内を見て、すぐに解かった。

あの世界には、こんなに綺麗な場所は、きっとないだろう……。人が言うには、俺はターミナル付近のゴミ集積場にうち捨ててあった、という話だった。

俺の意識が戻ったことで、刑事が二人室内に入って根掘り葉掘りと色々聞いてきたが、もちろん適当に誤魔化してしまった。……。例の犬が放たれている以上、迂闊な事は言えない。

最初に俺を攫った覆面の数人に居住地を教えたら、放り出されたという事にしてしまった。

一緒に居たライター志望の青年とくたびれたオジサンを思い出して、少し胸が痛んだ……。

垣間見た裏社会の、ほんの一部だろうが……。あんな場所にもし麻里子が囚われているとしたら……。

背筋が一気に冷たくなる。考えたくもない。

俺はそのまま自宅区域の総合病院へ搬送され、今回もまた、ネオ・トーキョーからは強制で追いたてられることになった。……。まるで、俺を寄せ付けたくないかのように、思えてくる……。

疑問も浮かぶ。

……。あれほどの精巧な偽者が作れるのに、どうして本物に用があるんだ？

SEXの相手だというなら、なにも本物でなくてもいいような気がする……。あんな、本物そっくりの偽者を用意出来るんだったら……

・彼等でもいいはずだ。

なんだか釈然としない……。

俺は全身麻痺を起こす類のレーザーを照射され、丸一日が経った末に、歩く事も出来ないでいた。

「災難だったね、兄貴。」

見舞いに来た偽者が、そう言って気の毒そうな顔をする。

コイツは麻里子そっくりに化ける方のヤツだな。一瞬ホンモノかと思ひ、落胆した。

無性にやりきれなく、不連続きの人生を呪った。

「あ、そうそう、兄貴。」

お医者さんがさ、ちょうどいいから、このまま検査入院してください、って。」

そうそう、と来たか。

あっさりと言って退けやがって・・・、そんな言葉、俺は初耳だぞ。

ドアをノックする音が響き、一目でロボットと解かる看護婦が登場した。

『入院の為の手続き等は、こちらで済ませております。』

心置きなく、ごゆっくりと、検査期間の間、おくつろぎください。』

古い型の看護ロボットだ、言葉の使用例が微妙におかしくて、首を捻ってしまふ。

笑顔以外の表情がないマネキンの首が、とりあえず、で俺に向いている。

微笑を浮かべ、閉じられた赤い唇・・・喉の辺りのスピーカーから機械音の音が発せられた。

『それでは、血液検査の為の採血を行います。腕を出してください。』

そして俺は、様子見のための入院・・・の、はずだったものが、どういうわけだか検査入院を申し渡されたのだ。

一日で出られると思ったのに、検査が終わるのを待っていたのでは、一週間は掛かる。

どういう事かと、その後巡回に来たロボット医師に詰め寄った。

医師は最新鋭のスチール製ボディで、無重力バランスミッションが

組まれたホバーを足にした形で、空中に浮遊していた。頭部と両手と胴体だけ、というシンプルな形だ。・・・通路が混雑していたら、壁やら天井やらを、このホバーで進んでゆくのだろう。

『・・・貴方ねえ・・・。高校卒業から先、一度の精密検査もしていないんですよ？』

政府登録の健康保健加入要項にも、きちんと記されているでしょう、義務違反ですよ、義務違反。』

確かに、市民は特殊な事例でもない限り、年に一度の精密検査を義務付けられてはいる・・・が、それを律儀に守っている者は少ないはずだ。

『・・・ま、皆さん、率先して来て下さる優良な方ばかりじゃありませんから。

こちらとしても、出来る機会を大いに利用させて頂いているわけですね。・・・お分かり？』

病院に行ったが運の尽き、つて事か・・・。捻挫で入院させられたという噂話の内訳を聞いた気分だ。

こういう高度技術を用いるロボットは、思考プログラミングデータの原型という物があって・・・それは通常、生きた人間をモデルとされている、と聞いた。

だから、人間のように思考し、人間のように行動する。

・・・あの妹の偽者も・・・きつと、本物の麻里子の思考をコピーされているに違いない・・・。

そして、コピーとはいえ生きた人間の思考を持つという点が問題視され、例の・・・廃棄法案は座礁に乗り上げている。

『・・・須崎さん、はい、これが検査結果です。

こちらがあなたの分、こちらが妹さんの分。・・・先に言っておきますが、何の異常もありませんよ。』

検査を強いられたのは、俺だけじゃなかった。

当たり前だが、妹の麻里子も長いこと検査入院はしていないんだ。学校で受ける簡易検査のみ。

ロボット医師は、二人分のカルテを俺の額に貼り付けるように突き出して、確認を促す。

やはり、桑名さんの調べた通り、ロボットの目ですら見抜けないほどに精巧なのか……。

カルテには難しい欧文の羅列。

『最近、疲れていませんか？ 脳波がずいぶん乱れている様子でした。』

体の方は問題ありません、が……あなたには精神科の問診をお勧めします。

一度見てもらった方がいいですよ。

被害妄想か、切迫障害か……およそ、何かの精神障害の兆候が見えます。

悩みを抱えているようでしたら、早いうちの対処を考えて下さい。』

釈然としない思いで一杯だ……けど、仕方がない……。

仕方がない、と諦めてしまった……。

樹のこと、妹のこと、組織に囚われてしまったあの二人……気になり始めると、胸が痛い。

俺は、無力だ……。

退院し、家へ帰った途端、偽者の妹が笑顔で出迎えてくれた。

偽者……だと、思っている……いや、もう、本当にはどっちだか解からない……。

偽物だと、思っているだけかも知れない……。

翌日には、約束通りにロボット犬がうろついでいて、俺はそいつを拾った。

人懐こい犬で、俺を見付けて喜んで尻尾を振る。

ロボットでも何でも、懐いてくる相手は可愛いものだよね……よく来たな、ブラフ。

お使いご苦労さん、なんて思いながら、この物騒なロボットを庭に入れた。

シロが唸っていたが、気にしないでブラフは尻尾を振る。・・・大
人しい犬だ、躡が出来てる。

妙なことに感心しつつ、俺はすでに用意してあった掛け軸の小汚い
木の箱をブラフにこっそりと渡した。

この掛け軸の値段だとか価値なんてものは、俺には解からないから
別に惜しくもなかった。

ブラフはそれをごくんと丸のみにして平然としている。

二、三日は、庭でシロとじゃれていたのに・・・気付くとブラフは
居なくなっていた・・・。

交換成立。

これでまた、ふりだし、だ。

第三章 第一話

妹についての疑念が、このところで薄れ始めていた。

桑名さんも言っていたが、諦観というものだ。

あまりにも精巧な偽物と接し続けているうちに、その家族は代替で満足する事を選んでしまおう、と。

振り払うように首を振った。

諦めようとしているのか……。あれが、麻里子なんだと、自身に嘘を吐きはじめていたら終りだな。

自棄の一步手前というところかも知れない。

億劫で……。なんでもいいから、今だけでいいから、逃げ出したいくなった。

大丈夫、少し疲れただけだよ、麻里子。

必ず見つけ出してみせるから……。

派手な看板に引き寄せられるように、俺は目新しい店舗へと足を踏み入れた。

勤務先の近くに最近進出してきた大手のバーチャルショップだ。ネ

オ・トーキョーが拠点らしいが。

ネオ・トーキョーが絡むというだけで、ひどく疑ぐり深くなっている。

自動ドアが開くと、まず大画面が目飛び込む。黒い柱に六角になるよう液晶ディスプレイが取り付けられていた。今はそのうちの三つが接客で塞がっている。

受付に人は居ないらしい。俺が行きつけにしていたショップでは、人間の店員がいたけどな。労働基準法とかで、企業は必ず一定数の人間を雇用しなければならぬ決まりがあるはずだ。

ここは大手だから、たぶん、巡回などに人手を割いているんだろうが。

空いているモニターの前へ移動した。・・・ちよつと勝手は違うけど、案内板なのだろうと思う。

『いらつしやいませ!』

画面の中から、可愛い顔をした女性キャラがにこやかに挨拶を遣す。パネルを操作して、部屋を選択、それから個人ブースを予約して・

・この個人ブースは完全独立制らしい。
・・・けっこういいな。いつも行くシヨップは一部屋に8つのブースがあり、それはほぼ剥き出しの椅子状態だから、眠っている間は他人に見られ放題で、少し気になっていたんだ。

小窓のカーテンを閉じてしまえば、完全に密室か・・・気に入った。リクライニングを調節して、ヘルメットになった接続機器を頭に繋げれば、準備はOKだ。

背を預けると、視界を遮るようにゴーグルが自動で下りる。

両手を、台座の指定の位置へ・・・手の型があり、そこへ両の手を乗せるとカバーがスライドして上部をも固定する。これで、電脳世界で自在に動けるようになる。

科学技術の最先端といえるものらしい、この手の機器は。

直接電極を頭皮に接触させる形でしかバーチャル世界にアクセス出来なかった時代からすれば、とてつもない進化だ。少しでも接触を良好にするため、廃人と呼ばれるような人間はみなスキンヘッドだった、などという話が今でもサイト記事などに載せられているが、現在では笑い話だ。

新技術の応用で、根本からシステムの見直しが為されたのはおよそ60年前。

60年前、革新技術が登場し、あらゆる分野が飛躍的に発達したということだ。

今のシステムでは、人間が出している微弱な生体電波などを捉え、解析して、電脳世界に送信しているという。昔のように頭髪を剃る必要はなくなった。

もっとも多くの電波を発信している部位である頭部と両手からほと

んどの情報を収集する。

生体電波だけでなく、筋肉の僅かな緊張なども情報となり、従って足にも機器が取り付けられる。

室内の明かりが消える。催眠シグナルが鼓膜を一定リズムで叩き・急速に睡魔が襲って、俺はバーチャル空間へと運ばれた……。

……気付けば、広い通りに出ている。

ここがスタート地点。初めて降り立つ大地ということだ。目の前に広がるのは中世ヨーロッパの世界。

フィールドは店ごとに用意されており、その意匠が人気を左右する。バックボーンは全世界共通の統一規格だから、ネットワークはどこへでも繋がった。

ここから、馴染みの店で展開されるフィールドへの移動も可能だが、マージンを取られる。

この店は全国チェーンの大手だから、他店からの流入による利益もかなりなものだろう。

コロニーにも、地上の各地域にも、この手のショップは沢山あり、居住区も人種もばらばらな人間たちが雑多に集まっているわけだ。

言語まで自動翻訳で統一されているから、他民族を区別するのは生活習慣の違いくらいのものか。

巨大な、電脳世界の社交場。

人間だけじゃない、こういう世界でもアブレるような連中というのは必ず居るもので、そういう者に対する受け皿としての存在、プログラム・キャラクターも多く見かける。

プログラムと言っても、一見では人間と区別がつかないほどよく出てきているから、さほど問題もない。

……俺は店内表示のパネル操作の時に、通常のコミュニケート・シテイを選んでいるから、いきなり殺されるような事はない。……これが、サイバー・コアなどを選んだ場合は、それこそ、いきなりのサバイバル・ゲームだ。

キャラクターは、いつも使っている店でのデータをそのまま流用した。・・・電脳世界は基盤が規格統一されているから、こういう時は便利だ。

「はぁい、遊ばない？」

いきなりナンパを仕掛けられる事も珍しくはない。

適当に手を振って、通り過ぎた。・・・挨拶がわりか、電脳プログラムだろう。

俺はバイセクシャルだから、相手は男女のどちらでもいい・・・。電脳世界では性別を逆転している場合も多いから、そういうコダワリはほとんど意味がなく、リアルでは拘るような事柄でも電脳空間では別、という信条の者も多い。つまり、俺も御他聞に漏れず、ということだ。

もちろん、外見は女性のほうがいいよ。・・・もちろん、ね。

コミュニケーション・シティでは、わりと普通に相手を探して、会話をして、デートに誘って・・・あわよくば、ホテルにまで連れ込める。無理強いは厳禁で、何かあるとすぐに、電脳プログラムのポリスが飛んで来る。

へたを打つと、強制退去。

別に、そこここで集まって話し込んでいる集団に混ざり込んで、暇潰しに会話を楽しむだけでもいい。

店に入れば、バーチャルながら酒も呑めるし、誘いを待っている者に声を掛ける事も出来る。・・・シヨップ側の用意したサクラである可能性も高いのだけれど・・・。

適当なお喋りで時間を費やすのも、それはそれで楽しいのだけれど・

・・・今日は店内へ入ってみる事にした。

時には、店の中で討論会に発展している場合もあるんだ。

激論を戦わせていたりして、聞いている分にはテレビ番組より面白い。

・・・この店内はわりと人影もまばらで、ムードミュージックが

流れていて、静かな空気だった。

何組かのカップルと、誘いを待つ者達と、にこやかなメイド達。メイドを口説いている男が居て、人目も気にせずキスを交わすカップルが居て、そして・・・壁の花になって、一人で飲んでいる青年を見つけた。

なかなか見た目もいいのに、誰も声をかける様子がない・・・電腦キャラか。

アブレた者用に居るようなキャラだから、なかなか通常では声を掛けられる事もない存在だが・・・なんだか、気になった。もう少し近付いて、それとなく観察してみる事にした。

ブロonzの肌・・・赤い瞳に鉄色の髪。黒いノースリーブシャツと迷彩のパンツ姿で、スツールに浅く腰掛けている姿はモデルのようだ。たぶん、上級者の作ったプログラムだろう。

こういうキャラはセクサロイドといって、専門に手がける業者がいて、一つの産業だ。

原本となる雛形があり、多くは一人の人間がすべての思考プログラムを構築する事で個体差を付けると話に聞いたことがある。また、ツールを使い、パラメータを弄ることで作り出された簡易版も居る。ネット創作ジャンルと同じに、ユーザーが粹を買い自分で好きにプログラムしたキャラを街に闊歩させている。

素人の製作だろうか？　なかなかキャラ・メイクは凝っているな。どうせプログラムだ、そう思って、俺は声を掛けてみる事にした。

「やあ、一人？」

「・・・誰だ、あんた？」

訂正。上級者が作ったのだと思ったけれど、これは結構、お粗末な出来のプログラムだ。

表情さえ変えることなく、彼は俺を見てそう言った。

第三章 第二話（前書き）

注意：少々B Lくさい描写あり。

第三章 第二話

いや、もしかしたら、本当に人間なのかも知れないな・・・ひどく無愛想だけれど。

有り得ないと片隅に思いながら、そんな懸念をわざと浮かべてみたりもした。

「誰も声を掛けないなら、狙ってみようかと思って。」

周りの人間達が、興味有りげに耳をそばだてている。電腦キャラに声を掛けるなんて、よほどモテない奴だけだから・・・どうせ冷やかして入った店だ、変な噂を立てられようが構いはしない。

その気もないのにこういう事を言えば、相手が人間なら後で面倒な事になるかも知れないが。

「狙う？・・・何を狙う？」

「君を。」

指差して、彼に教えたが、予想した反応は返ってこない。

彼はぼんやりと、俺の言った言葉の意味を探している様子で、ただ黙っていた。

返答のパターンが組まれていない会話には、無言でいるようにプログラムされているんだろう。

・・・つまらない相手だな。

会話が続かない・・・何か気の利いた事でも言ってくれば楽しめるのに、彼はひどく愛想がない。

ほとんどダンマリになってしまった時点で、俺は席を立った。

「君、あまり人と話したこと、ないんだろ？」

最後にそう聞くと、彼は素直に頷いて、俺を見上げる。

・・・妙に、リアルだと思ったのはその一瞬だけだ。とても出来の悪いプログラムだと思ったのに、妙に、人間臭いような気がした・・・なんだろう、この違和感・・・。

思い直し、もう一度椅子に腰掛けた俺を、やはり彼は無表情に見て

いた。

プログラマーの意図を探り出す事が楽しくて、俺は時々、わざとプログラムに話し掛けたりする。

俺がよく行くシヨップの常連達がやっている遊びで、俺も例に漏れず、そういう悪戯にハマっているんだ。ここのような大手の流通店では嘲笑ものの行為だが、小さなシヨップに行けば流行りだったりするから面白い。

・・・今度シヨップの居酒屋に行った時に、話のタネにしてやろう、なんて考えていた。

こんな奇妙な電腦キャラには初めてお目にかかったものだから。容姿は星五つあげていい、会話は残念ながら星一つ、仕草や表情もお粗末な出来で、これは裏に何かあるタイプのプログラムではないか、と踏んだ。およそプレイヤーの好みなど無視したような作り。

お粗末な会話と、時折見せるリアルな人間臭。あれやこれや・・・けれど、彼の態度は変わり映えなく、熱心さも伝わらない。

通常のセクサロイドじゃないのは十分に分かったから。そろそろ種明かしを願いたいところだ。

作者は、何を考えて、コイツを創り上げたんだ？

いい加減、話すことが面倒になり、ヤケぎみにストレートを投げ付けた。

「・・・でさ、そろそろ場所を変えないか？」

「場所？」

「そう、ホテルに連れて行きたいんだ。解かるだろ？」

ここまではつきり言えば起動するだろう、いくらなんでも。ハプニングイベント、発動させてくれ。

誘うだけ誘って逃げ出す口実まで考えていたものを、すべてかなぐり捨てて、目の前のキャラの存在目的を問う。いったい何なんだ、

このキャラは。

「どうしてホテルに行く？」

なのに、にべもない彼の答えに、俺はがっくりと項垂れるしかなかった。

「この上まだ、何が足りないっていうんだろっ……これを作ったプログラマーは相当に意地が悪い。

ひょっとして、サクラってのに引っ掛かったのか？」

「ああ……、もういいよ。お邪魔。」

もう面倒になってしまった、ミヨウチクリンなプログラムだった、と結論付けて、俺は引き上げる事にした。

「……別に邪魔じゃない。」

まただ。

彼はわけのわからない、そんな受け答えをして俺を見つめる。

まだまだ話は続けられそうな気配はあるんだが……。

ごめん、退散するよ。……疲れたし。

「……君と話せて楽しかったよ。」

俺は、社交辞令のつもりで、そう言った。

「……俺は初めて人間と話した。」

彼が、ぽつりとそう言った。

テスト中か何かだったのだろうか……どつりで、会話のパターンが少ないと思った。

今度はぜひ、完成した彼と出会いたいものだな。

俺は席を立ち、彼を残して店を出た。

キヤッチ・シヨップでの暇潰しも、けっこう気分転換になった……。

……あんな風に、一発で見抜けるほどの粗悪さなら良かったのに……。

妹に成りすましている偽者の正体が、ロボットであるという確証さえない。

偽者である事だけが確かで、他は一切が不明だなんて……。
ロボットはその性能が極端に現われるから、例えば、この画面の中の案内嬢のように、どこか他からリモートで映像を転写しているんじゃないか、とさえ思うほどに、人間に近付いている人工生命もある。

「ありがとうございます、またのお越しをお待ちしております。」
少しの会話でも、多様なバリエーションで即対応してのけ、本物の受け付け嬢が居るかのような錯覚さえ起こさせる……。その電子頭脳は、電腦世界で出会ったあのプログラムの比ではないだろう。まさしく、ピンからキリまで……。

それでも、やつぱり、あんな精巧なロボットが居るなんて事は考えられない……。ロボット一体を作る費用と手間と、何より天才的頭脳が複数集まってこそ、初めて製造されるものだからだ。一人では不可能。

つまり、犯罪目的のロボットを製造する事は、難しい……。
ヒューマノイドは製造禁止……。それを敢えて冒す科学者なんて……
・居るわけがない。

店を出て、通り慣れた道……。勤めているショットバーへ向かった。

第三章 第三話

深夜・・・仕事が終わって、俺は帰途に着こうとしていた。

店の戸締りをしたら、キーを店長に渡す。・・・店長はこの店のオーナーでもあり、けっこうなメカ嫌いでもある。

俺が浮かない顔をしている事に気付いて、ずっと心配してくれていた。

「・・・遼平くん、何かあったんじゃないのか？ 最近、どうも様子がおかしいから、気になってたんだが・・・。」

今日は特にぼーっとしていて、仕事に身が入っていなかったのは、自分でも認めるところだ。それを指して言うんだろう・・・。言ったところで信じてもらえるはずもなく、俺は一連の疑惑を、店長には話していない。

「ああ・・・、すみません。明日からは気をつけます、」
素直に謝って、この場を収めようと思ったんだが、店長もそう何度も見逃してはくれないらしい。

「いや、そういう問題じゃない。・・・何かあったんだらう？
人に話したくない気持ちは判るが、仕事に支障をきたす様では聞かざるを得ないよ。」
それはもちろんその通りだ・・・どうするべきか、俺は考えあぐねた。

その間も店長はじっと俺の顔を見つめていたが、諦めたようにため息を吐く。

「・・・わかった、ならば、少し考える時間をあげよう。
今夜中に連絡を入れてくれ、・・・ここに掛けてくれればすぐに繋がる。」

携帯のナンバーを記した名刺をもらった・・・。
少し整理して考えて・・・それから、キッチンと話をしなさい、という事だらう。

「ありがとうございます、・・・迷惑を掛けてしまい、すみません、」
深く頭を下げると、彼は苦笑を浮かべ、手を上げて去って行った。

ここまで来たら、隠し通せるわけもない、信じてもらえるかは解からないが、話すしかないだろうな・・・。
とにかく、事件を整理して考えなくては・・・。

歩き出した俺は、後ろから尾行てくる足音に気付かないままだった。この時間ともなれば、通りは人影もない。出る時はバスを利用するが、帰る時刻には一本も残っていないから、俺はいつも空間タクシーを呼び出して帰るんだ。

この日も、俺はいつも通りにタクシーを呼ぼうと携帯を取り出した。開閉式の携帯端末・・・ぱちん、と開いた時に、横合いから男が飛び出してきて、俺の口を塞いで路地へと引きずり込んだ。携帯を持つ腕を擦じ上げられ、俺は身動きも出来ない。

「いったい、何者なんだ・・・？ まさか、偽者のどいつかが・・・！？
「騒ぐな・・・！」

この声・・・！
掴まれた手首が、なにかぬるぬるして気持ちが悪く思えば、月明かりに照らされた拍子に真っ赤に染まる袖口が見えた。心臓が縮み上がった。

「・・・くっ、意識が朦朧としてきやがった・・・、
ちくしょう・・・、ここまでか・・・、」

急に、手首を掴む力が抜け、男はその場に崩れ落ちる。
間違えるはずない、宮路だ。

・・・なんなんだ・・・？ いったい。

わけが解からないが、コイツが油断ならない男だという事だけは確かだ。

身分証を確認しようと腕を取ったが、腕時計にはなんの仕掛けもなかった・・・。純粹に時計だけの時計なんて、初めて見た。きつとプ

レミアで、高価な品だ。

どうしよう・・・、警察に通報するか・・・？

いや、それより。

「おい、救急車を呼んでやろうか？」

呼び掛けると、男は少しだけ身を起こし、俺の胸倉を力無く掴んだ。

「・・・余計な真似すんな、どうせ警察に通報されちまう、

ちくしょう、・・・怪我さえしてなきゃ・・・、」

顔を変えたと聞いてたけど、宮路の顔は以前に会った時のままだ。

いや、それより・・・、追われているのか・・・？

今日はぼんやりしていたからな、ニユースをまるで聞いてなかった。

また何かやらかしたんだろうか・・・。

放っておけば寢覚めの悪い事になりそうだし・・・かと言って、警察に通報するのも、なぜか躊躇される。

結局、この男が持つ情報は何一つ教えて貰えなかったんだ、心情としては既に警察も彼等同様に胡散臭くて、信用なんて出来なくなってる。

交換条件で・・・何か、情報が得られないだろうか？

偽者の妹達のこと、樹のこと、誘拐犯のこと、・・・俺には知りた
い事だらけなんだ。

とりあえず・・・どこか。ここはマズイ、人目に付かない場所を・・・。

「俺の家へ来るか？ とりあえず手当して・・・、」

危険は承知だが、聞いてみる。これだけの怪我なら、襲い掛かって
くることもないだろう。

楽観的かな・・・？

男は俺の襟を掴んだまま、弱々しい声で喋った。

「・・・ロボットが居るだろう、・・・ロボットの居ない場所へ連
れてってくれ、頼む・・・！」

ロボット・・・？

前方を見ると、ちょうどロボット警官が深夜の巡回を行っていて、向かいの通りをゆっくりと通り過ぎてゆく姿が目に入った。距離が遠く、こちらには気付いていないだろう。

店長との会話を思い出した。

「・・・ロボット嫌いの知人が居る。・・・相談してみるから、ちよつと待つてる。」

男の傷がどの程度かは解からないが、とにかく病院も警察も、付近一帯がロボットだらけだ。

携帯を操作して、俺は店長に連絡を取った。

「・・・あ、店長？ あの・・・実はちよつと相談が・・・」

『ああ、話す気になったの？ じゃあ、家の前で待つてるから、これから来るといいよ。』

住所のメモリーが転送された。送られてきた地図を携帯に反映し、場所を確認して男に頷いてやる。

「知人は大のメカ嫌いだから、ロボットはおるか、デジカメの一台すら自宅に置かないんだ。」

彼の家なら、ここからも近い。・・・そこなら安心だろう？」

教えてやると、宮路は安堵したように長い息を吐き出した。

・・・店長にも迷惑を掛けるかも知れないな・・・。けど、この様子じゃ大した抵抗も出来ないだろうから、とにかく連れて行ってから、店長に相談しよう。

もし、警察に通報されてしまったら・・・それはそれで仕方ない。

第三章 第四話

「よう、いらつしゃい・・・って、どうしたんだ!? そいつ!？」
やっぱり店長は驚いて、俺と男を交互に見ていた。

「あ!？」

そして、同時に二人が声を上げる。店長と、宮路が。

なんだ、この反応・・・なんだか、良く知った知人に会ったかのような・・・。

「おまえ! 宮路じゃないか!? ...なにやってたんだ、このヤロウ!」

店長はいきなり俺の肩から男を引きずり剥がして、胸倉を掴み上げる。

「いてて! 怪我人なんだ、乱暴すんな!」

なんだ? 知り合いなのか?

啞然としている俺に気付いて、店長はバツが悪そうにニヤケた笑いを浮かべた。

「ああ・・・、昔の連れでさ。・・・音信不通になってた親友ってヤツなんだ。」

「そうそう、」

調子のいい不審者にまた店長が怒鳴り返そうとした時点で、俺達三人は近付いてくる足音に気付いて、慌てて家の中へと避難した・・・。

ここら辺も、夜間の巡回はひっきりなしだ。

「・・・また何かやらかしたんだろう。で、また顔を変えて誤魔化す気なんだろうが、いい加減にしとけよ。」

居間のソファに乱暴に突き倒しておいて、店長はさらに乱暴な手付きで宮路の上着を肌蹴た。

宮路は・・・そんな乱暴にも、黙って大人しくしている。

彼の肩には引き攣れたような傷口があり、赤黒く変色して、血が、

半ば固まりかけている。

古い階段型の箆笥は数百年前のもので、とんでもない値段がつく、と聞いた事がある。・・・その引き出しを開けて、店長は薬箱を出してきて、ソファの傍へしゃがんだ。

「遼平くん、巻き込んでしまって申し訳ないな。・・・こんな口クデナシだが、俺の友達を助けてくれた事には感謝するよ、ありがとう。」

友達・・・微妙なニュアンスだ、と感じながら、俺は彼の手許をじっと見つめていた。

今までにも相当な苦勞を掛けられました、と暗に語っているようだった。

店長がハンドメイドで作ったというテレビジョン・・・最近はずっと製品でこういう簡単な物なら制作出来るらしいが、テレビ番組を映すだけで、なんの機能も付いていない品だから不便だろうと思う。・・・リモコンさえ付いていないため、ニュースを見るにもいちいち歩いて近付かないといけない。

それどころか、チャンネルは一発選択じゃなく、調整しながら電波を探す方式だ。

万事がそんな調子で不便極まりない生活だろうに、よく続けられるもんだよ。

何度来てみても、店長は物好きだなとしか思えない。

店長の手が、スイッチを捻る。

電波の波長を完全に拾いきるまで、不快な雑音がギューギューと室内に響く。

右へ左へと、リユーズ式のチャンネルを廻して微調節し、ようやくニュース映像が映し出された。

「・・・未明に起きた事件の続報を繰り返します。逃走中の犯人のモニターが公開されました。」

全国に指名手配となり、目撃情報への懸賞金も増額となります。』

キャスターの顔が映像と切り替わり、宮路の写真が大写しになった。
「・・・ちつ、もう手が廻ったのか・・・。顔さえバレてなきゃ、知らん顔でタクシー拾って、ネオ・トーキョーまで戻れたつてのに・・・。」

今はネオ・トーキョーの地下街を根城にしている、と言った宮路は、続いて店長に匿ってくれようと懇願していた。・・・渋い顔をしているが、たぶん、店長は引き受けてしまうんだろう。

店長が席を外した隙に、宮路は俺に探りを入れる。

「・・・なあ、お前、どうして俺を助ける気になった？」

一度、手痛い裏切りに遭いながら、理解が出来ないとその目が語っている気がした。

「タダで助けたつもりはないさ。結局、あんたからは何も情報を得られなかったからな。」

俺の返答を聞いて、宮路は肩を竦めて、襲ってきた激痛に顔を歪める。怪我を忘れてたのか、馬鹿。

「動かすな、馬鹿野郎、」

その上、戻ってきた店長にまで叱責された。

「気になってただけど、どうしてロボットをそんなに警戒するんだ？」

俺は先に、さっきの疑問を彼にぶつけてみた。

「用心のためさ、決まってるだろう。・・・顔が割れちゃったら、もう表を出歩けなくなる。」

少々怒ったような口調で宮路は吐き捨て、その後を店長が引き受けて捕捉した。

「・・・ロボットは、簡単にハック出来てしまうんだ。

俺は以前、それで経理をやられて痛い目に会った。・・・だから、メカは信用しない。」

店長のおだやかな声とは裏腹な、物騒な内容に、俺はぎょっとした。さらに宮路が畳み掛ける。

「ロボットは電腦空間に巨大なメモリーを構築している、・・・共有のライブラリーだな。そこへハッキングを掛けられたら、ヤツ等の見た物聞いた事はすべて筒抜けになるんだ。」

裏社会では普通に行われているが、一般人はあまり頓着ないようだな。ちよつとネットに詳しい奴等なら、こんな事は当たり前前に知られているぜ?」

それって、セキュリティが破られてるって事で・・・大問題じゃないか!

「個人情報とか、銀行のパスとか、抜かれ放題ってことか!？」

俺の疑問には、なぜか二人して失笑を返された。

「そういう情報は、さすがに暗号化された上で隔離保管されてるよ。アクセスすら難しい部分だ。」

店長が言うには、ロボット社会と言われる現代においては、ネットサーバーは幾重にも区切られた『壁』によって、その情報を管理しているらしい。

表層部分は比較的管理が甘く、誰にでも破ることは出来る・・・

でも、個人情報や企業関連、銀行、政府と、機密情報の重要度が上がるにつれ、セキュリティも嚴重になり、ハックを許さなくなる。

「警察なんぞ、公表はしないがハックしまくってやがるんだぜ?」

ロボットの見聞きしたデータを片端から当たれば、そりゃ、目撃証言を募るよりも確実に、犯罪の足取りを追えるわけだからな。

言わば、あちこちに監視カメラがうるつき回っているのと同じ事さ。

・・・用心するのは当たり前だろう?」

小馬鹿にした口調は聞いていい気のしないものだが、だからと言って俺には反論出来るだけの材料がない。彼の言う事は、初めて聞く事ばかりだった。

「表の住民たちは何も知らずに有り難がってロボットを傍に置いているが、俺に言わせりゃ、四六時中、警察に見張られているのと同じだぜ。・・・裏の社会はその監視を逃れるために、ロボットも置かないし、互いの顔も見せないようになったんだよ。」

そうか・・・俺の懸念は、やはり正しかったんだ・・・。

なんとなく、いつでも何所かであの偽者達が俺を見張っているような気がしてならなかった・・・。

はっ、と気付く。

そうだ、携帯。・・・こいつにも、もしかしたら盗聴機能が付いているんじゃないのか？

「あ、店長・・・、携帯・・・、」

俺がそれを差し出すと、彼はにやりと笑った。

「電源を入れて、掛けてごらん。」

どういう事だ？・・・言われるままに、俺は疑りながら知人の家に掛けてみた。

・・・繋がらない？

「電波遮断装置を設置してあるんだ。裏のコネで入手してね。」

・・・だから、外部取り付けのアンテナから、かろうじてニュース番組の単調な電波を、数種類ほど拾えるだけのテレビジョンしか置けないんだよ。・・・こつちが拾うだけ、返信はなし。

色々と当局からは文句を言われているけどね、無視しているから、変人扱いさ。」

「ここは一番安全なのさ。」

追従するような宮路の台詞が畳みかけた。

「ところで、遼平くん。・・・さっき、情報がどうの、とか言っくなかったか？」

店長には聞かれないようにと気を使ったのに、隣の犯罪者が簡単に裏切ってくれた。

「ああ、妹が何者かに誘拐されて、偽者を送り付けられたそうだけ？」

無遠慮な台詞に、俺は宮路を思い切り睨みつけた。

さほど悪びれてもない風に、宮路はにやりと笑う。

「・・・有り得ない話、じゃあない。」

断言する店長を、宮路が胡散臭いという表情で振り返った。

「有り得ないぜ、色んな意味でな。・・・それじゃあ聞くが、その偽者ってのは、そんなに妹と似ているのか？」

・・・考えてみる、生身の人間に似せる事ですら、至難のワザだと言われているんだぜ？」

政府はロボットを使って市民を監視下に置いているんだ、誰にそんな事が可能なんだ？」

断言してやってもいいが、裏社会のロボットには、そんな精巧なのは一体すら、居ないね。」

妙な自信をひけらかして、宮路は吐き捨てるようにそう言った。

「お前も見たことあるだろう、地下街の最高級のセクサロイド・・・

「以前、桑名さんに連れられて、真っ先に目にした情報だ。

俺は無言で頷いたが、それでも誘拐は事実だ、と目で奴に訴えた。

「そうか・・・、だとしたら、連中かも知れないな。出来るとしたら、奴等しかいない。」

宮路が喋っている横で、店長は奴の腕を取り、ぐい、と上を向けさせた。

途端に、宮路は「うつ、」と呻いて前屈みに身体を縮めた。

「ダメだな、こりゃ。」

構うことなく、店長が彼の肩を覗き見て言った。

これは縫うしかないな、と、店長が小声で呟き、宮路が怯えた顔を上げる。冗談だろ、と言う間に店長は彼の腹を片膝だけで押さえ付けて、「裁縫道具をくれ、」と、俺に手を出してみせた。

「よせ・・・！ やめてくれ・・・！」

「医者に行く方がいいなら、連れてってやる。」

二者択一だ、どっちがいい？」

店長は目が据わっている・・・宮路はぼそりと、「・・・縫ってくれ、」と呟いた。

「遼平くん、そういうワケで済まないが、これから修羅場だ。」

君はもう帰った方がいいよ。・・・偽者がどうかは解からんが、妹さんも心配するだろう。」

店長は俺にそう言っつて、青くなつて天を仰ぎ見る怪我人から、ようやく身体を離れた。

「あまり帰りが遅くなると、要らぬ疑いを受ける。・・・後日、連絡する。」

「は、はい。・・・お願いします、」

そうだ、妹達は帰りが遅い俺に疑心を抱いて、今頃はあちこちの口ポットにハックを仕掛けまくっているに違いない・・・。そういうカラクリだったのか・・・だから、あの日、樹と会った日にも、俺の尾行はバレたんだな。

「おい、遼平。・・・必ず、地下街へ来い。」

・・・お前の知らない事を教えてやる。」

強い意思を秘めた視線で、宮路が俺を見て言った。

地下街・・・つて、無事に帰れる保障もないんじゃないのか？
その自信はどこから来るんだ。

第三章 第五話

店長の家を辞して、俺は一人、とぼとぼと家路を辿る。

かなりの距離があるんだが・・・いきなり空間タクシーを拾うのも拙いだろう。

少し離れてから呼び出すつもりで、俺は人気のない通りを歩いていた。

いったい、何者が、麻里子を攫っていったんだ・・・？

いったい、何の用があつて・・・？

ヤツ等の目的が、見当も付かない場所で・・・不安だけが増大する。裏の組織じゃないんなら・・・いったい、誰なんだ？・・・樹。

ぼんやりと歩いていた俺の前に、一匹の野犬が現われた。

・・・どうしてこんな場所に？ いや、野犬なんて、この御時世に居るはずがない・・・。

ペットの管理は人間とは違う、徹底されていて、捨てられる事など有りえない。とても高価なのに。

獰猛に牙を剥く、その瞳が紅く、染まった・・・やはりロボットだ。

まずいな、俺には武器になりそうな物は何もない。

最近はこの辺りにも廃棄されたペットロボットが増えつつあるとは聞いていたが、人を襲うなんて思わなかった。三原則に従って、彼等は無害なはずなのに。

ロボット犬はまっすぐ、俺だけを睨みつけている。・・・やっぱり俺がターゲットか。

鋭い牙を閃かせ、野犬が襲い掛かって来る映像をコマ送りに感じる。俺は咄嗟に目を閉じた、やられる・・・！

ギヤウン！

悲鳴が響き、続いて地面に重い物が激突するような物音。

「兄貴！」

・・・麻里子？

一瞬では本物が偽者かの区別など付かない、現れた妹は懸命に俺を助けようと、ロボットの前に立ち塞がった。両手で金属バットを握り締めて、小刻みに震えているのは、演技ではないのか・・・？偽者や樹が差し向けたんだらう、このロボット犬は。

・・・どうして、お前が助けるんだ？ まさか・・・本物の、麻里子？

混乱ぎみに、俺はそれでも近くの民家の軒下から覗く植木の枝を、両手で掴み、へし折っていた。

「あ、兄貴が遅いから！ あたしっ、」

恐怖に泣き出しそうな目で、麻里子は俺を見る。偽物かどうかは、今、問題じゃない。

「ガアッ！」

ロボット犬が麻里子の振り下ろしたバットに食いつき、その牙がメリメリと音を立てた。

信じられない・・・、金属製だぞ、牙が食い込んでいき、ベキベキと捻じ曲げられていくなんて。

こんなに凶悪な存在だったのか？・・・これが、ロボット？

「兄貴！ 兄貴い！！！」

助けて、と妹が叫ぶ。

くそ、どうすればいいんだ、

無我夢中で手にした枝を狂犬の背に叩き付けた。

腕に痺れが走る、力いっぱい打ち付けた枝はあっさりと折れてしまい、用を為さなくなる。

与えた痛手はいえ、表皮の毛皮を引き裂いただけだ。金属のボディがむき出しになったが、まったく動きを止めることはない。

敵は一匹・・・、たったの一匹だというのに！

手立てを失った俺の行動は無謀としか言いようがないだらう、でも、素手だらうが何だらうが、抵抗を止めたら殺されるっ、

体当たりをした俺の方が逆に吹き飛ばされた。

犬はよろけただけ。

それでも麻里子からは遠ざけた。

「逃げる！」

立ちすくむ妹はその言葉に反応し、首を激しく横に振る。

馬鹿、この先二度とチャンスは作れないかも知れないのに……。

「キューン、」

突然だ、

いきなり現れて俺たちを襲ったロボットが、また突然に動きを停止した。

よろよろと後ずさり……どさり、と倒れた。

かと思えば、また、ひょいと首を上げる。

何事もなかったかのように立ち上がり、鼻を鳴らして、そのまま歩きたした。

俺たちに興味を失くしたのか？

まるで俺たちなど見えていないような……尻尾を振って、側溝を覗き見て、足取りはむしろ軽妙なほどで。そのまま、通りを歩き、見えなくなつた。

「兄貴……！ 怪我、ない？ どころもヤラせてない？」

まるで俺が死んでしまったかのように悲壮な顔をして、麻里子は身体中を触れて廻つた。

そして、無事を知ると、ほう、と安堵の溜息を吐いた。

……残念だ……この妹は偽者だった……。
落胆と共に、奇妙な感情を覚える。……あれほど気味が悪いと思つていた偽者に、俺は気を許そうとしている。

俺を助けようとした行為は、あれはヤラセかも知れない。そう片隅で警戒しつつ、心は傾いていく。

信用などしてはいけない。

そう警鐘を鳴らしているのに・・・俺は優しい目を、この偽者に向けていた。

「兄貴・・・、あたし・・・、心配で・・・。」

だつて、あんまり帰りが遅いから・・・、」

俺の目に気付いて、妹は言い訳のようにそう呟き、そつと・・・機嫌を覗いながら、俺の手を握った。

以前なら、きつとこの手を振り払っていたんだろう・・・。

俺は初めて、偽者と知った上で、妹の手を握り返した。

嬉しそうに笑う偽者の顔は、きつと、生涯忘れられないものになるだろう。

「・・・頼むよ・・・、

妹を、返してくれ。」

そして、愕然とした彼女のこの表情も。

妹の偽者・・・たぶん、俺に懐いてくる二番目のヤツだ。

泣き出しそうな顔。ゆっくりと、手が離れていく。

彼女は俺の手を自分から放して、駆け去った。

俺は追うこともせず、その後ろ姿を見送った。

第三章 第六話

中世風の町並み。

石畳が敷き詰められた広場に、取り囲むように街路樹が植えられ、その向こう側はまた石畳。

そして、店の軒先が連なっている。

俺はなんとなく、群れている人々の輪に加わってしまっていた。

ここは例の、バーチャル世界。コミュニケーション・シティの一角だ。

店には入らず、路上の群に合流している。

・・・いや、幾つかの集団が出来ている中の、ここに決めたのには理由がある。

やけに人目を引く、一人の少女を中心に、男ばかりが集まっているんだ。

ブロンズ色の肌、というより、そのもののメタリックなボディ・・・ホットパンツと極ミニのチューブトップを付けただけの、艶めかしいファッションが目当てだと言ってもいい。胸は申し訳程度で、本当にロリータだ。

こんな洒落の解かるキャラクターをメイクしている事自体に興味があつて、俺は感心して見ていた。

・・・そりゃあ、少しくらいの下心もあるけれど。

会話らしき会話は成り立たない、と、傍に寄って行った時に、隣の男が教えてくれた。

どう会話にならないのか、興味もある。

「彼女、名前は？」

少し離れた場所から、尋ねてみた。

にやにやと笑う観衆の視線が、妙な感じに俺に注がれる。

「ウサちゃんよ！ ほら、ウサ耳、見えるでしょ？」

彼女は屈託無く笑い、両手で耳を作り、ぴょん、と跳ねた。

皆に囲まれているのが楽しくて仕方ない、という顔。けれど、それはどこか作り物じみて、数分のうちには誰かの作った擬似人格・・・
 電腦プログラムだと看破出来る。

「ホテルに行こうよ！」

誰か、物好きが言った。

「嫌！」

彼女が即答する。

拉致っちゃおうか？ と、複数で相談が持ち上がった。

・・・これが普通の場面なら、手を出した時点できつとポリスが駆け付けるだろう。

けれど、今、目の前に居るこの少女の場合は、そうならないような気がした・・・。

電腦キャラの場合、プログラマーの意図する通りの流れでフラグが立てば、ポリスの登場はない。

乱暴するのではなく、あくまでソフトに扱ってやれば、連れ込んでしまえるのではないだろうか？

彼女を作ったプログラマーは、かなり悪趣味な奴ではないか、と期待が高まる。

どういう結果になるのか・・・興味津々で、俺はなりゆきを眺めていた。

「それっ！」

掛け声を合図に、数人の男達が、彼女に殺到した。

・・・途端に。

どこをどうしたのか、男達は勢い良く正面衝突で地面に転がる。

ブロンズの少女が、楽しげに笑う。

呆気に取られる男達を尻目に、彼女は身軽に走りだし、それをまた、数人の男が追いつがって行った。

・・・俺は、一歩出遅れた。

出遅れたのだから、そのままにしておけば良かったのかも知れない。

けれど、俺は釣られて走り出してしまっていた。
数人の馬鹿な連中と同類になって、ブロンズの少女を追い掛け廻している。

人が見れば、さぞかし、馬鹿丸だしに見えることだろう……。
苦笑が浮かんだ。

彼女への追っ手は、一人、二人と脱落してゆき……最後に、俺だけが残った。

街からは離れ、広い森に逃げ込まれる。森というほどでもない、木立が広く点在する草原か。

身軽な少女は、俺の目の前で、大きな木の上へ軽快によじ登ってしまふ。

「おいでよ！」

幼い子供の口調で、彼女は俺を呼んだ。

一瞬、登ろうかと考えて……頭を振って、冷静さを取り戻した。

例の彼と同じ、奇妙な電脳キャラにまたしても捕まったらしい。奇遇だな、同じ『ブロンズの肌』か。

案外、同じプログラマーの手によるのかも知れない。

これは『鬼ごっこ』だ。

「ねえ！ 君のマスターはそうとうな洒落者だね！」

マスターの名前、教えてくれないか！？」

木の下から、見えない彼女に向かって、言葉を投げた。

風に木の葉がざわざわと謳う。

しばらくして、彼女は返事を返してくれた。

「……アース、」

地球、か……本当に洒落のめしたプログラマーだ。

俺はこれ以上、彼女と鬼ごっこを続けるだけの時間のゆとりがない。もうそろそろ出勤時間になるはずだから。

「じゃあね、楽しかったよ。ウサちゃん。」

一言、彼女に投げ返して、公園を後にした……。

電脳世界から脱出する方法は簡単だ、ログ・アウトを念じるだけで

いい。

・・・一瞬で、俺は元の現実へ戻り、機械仕掛けのリクライニング・シートの上で目を醒ました。

時間潰しの為にバーチャル世界をうろつき、そのまま仕事に出ることが多くなった。

偽物は学校に行っているから俺一人だが、とにかく家に居るのはうつつしかつたし、落ち着かないんだ。四六時中、誰かに見張られている気がして気持ちがささくれる。

身体は眠っているから体調を崩すという事はない、けれど、さすがに連日バーチャルとリアルを掛け持ちで過ごすというのでは、精神が参ってしまう。

廃人たちは平気でそれを成し遂げると聞いて、妙な感慨を覚えたものだ。

昨夜の事件を店長に話すと、彼はしばらく唸った後で、俺にメモを渡してくれた。

あれ以来、奇妙なことは起きていない。今のところは。

コースターには、電話番号が走り書きの乱れた文字で記されている。え？ これ・・・。

「あの、店長、」

これは、桑名さんの携帯のナンバーだ。

「ん？ なんだ、知り合いだったか。」

頷いて、俺は彼との経緯を喋りかけて・・・店長に止められた。

つい、要らない事まで話してしまいそうになったけど、確かに拙いよな。慌てて口を噤む。

呼吸を整え、素知らぬ顔で仕事に戻る・・・グラスを棚へと仕舞った。

どこで誰に聞かれているかも解からない、知らぬ顔でいる方がいい。仕事に集中しよう。

店長の勧めに従って、一度こちらから連絡してみるのもいいのかも

知れない。

そう言えば桑名さんも、あまりコンタクトを取るのはいくはない、と言っていたっけな。

店長の家に匿われているはずの、例の小悪党がどうなったか・・・聞いてみたい気もしたが、遠慮しておいた方が良さそうだ・・・彼は逃亡者で、警察の指名手配犯だからな。

「・・・ああ、遼平くん。昨日の猫、うちで飼うことにしたから。」

「え？・・・ええ、そうですね・・・。」
物好きだな、と思ってふと考えた。・・・猫？

「怪我も病院に行くほどじゃなかったみたいだね。野良と喧嘩でもしたんだと思うけど・・・。」

悪かったね、捕獲を手伝わせてしまった。」

「え、ええ・・・大して役に立てませんでしたケド、」

とんだ役者だ、店長。猫にされてしまった宮路を思って、俺は必死に笑いを噛み殺していた・・・。

まだ気が荒れていて危険だから、しばらくは客も呼べないよ、と店長はボヤク。

それはつまり、警察の目があるからしばらくは来てくれるな、という連絡事項だ。

俺は笑いながら承諾する。「大変ですね、」と答えておいた。

第三章 第七話

「そうそう、遼平くん。こんな噂を知ってるかい？ お客さんから聞いたんだけどね、電腦空間にパスワード制の秘密の場所が作られているんだそうだよ。」

なんでも、裏社会と繋がりがあって、そこで組織の人間が密談を交わすらしい。ま、どこまで本当かは判らないけどね。」

ああ、そう言えば、そういう話を聞いたこともあったな。

さすがにメカ嫌いの店長だ、噂を拾うのが半年ほど遅れてるよ。

苦笑を浮かべて、俺はふと、思い出した。

・・・そうだ・・・、噂では、部屋の番人というのが居て、鍵を持っている電腦キャラが二人・・・確か、ブロンズの肌の、二人・・・まてよ？ あの時、会った、あのキャラって・・・。

俺はチャット・シヨップで声を掛けた、出来損ないの電腦キャラを思い出していた。

「組織のレリーフは『翼持つ蛇』、あるいは、『赤と黒の斑蜘蛛』。

・・・両方、実在の裏ブローカーだってね。」

案外、真実味がある分、胡散臭さ倍増の感もあるよね、と店長が笑った。

・・・何か、引つ掛かる・・・。

電腦空間に長けている裏の組織が居るのなら・・・。

彼等が、何らかの方法で、身代わり用のロボットを製造している可能性も出てくるよな。政府の管理の目を盗んで・・・違法なロボット製造や、人身売買に関わっているのかも知れない。

あのキャラクター・・・明日、もう一度、捜してみよう・・・。

確かにおかしな点が多かった気がする。

偽者の妹は、律儀に毎日、学校へ出掛ける。学校自体も、楽しくて仕方ないのか、本当に嬉しそうだ。

ああいう態度を見る限りでは、彼等自身には罪はないように思えるんだけど・・・けれど、本物の麻里子が何所に居て、何をしているのかを知っている事は明らかなんだ。

そして、それを俺に喋らないという時点で、やっぱり俺はヤツ等に気を許す事が出来ない。

いつものように偽者を送り出した後、俺は一旦、玄関のドアを閉じた。

いつもなら、そのまま部屋へユーターンして、一時の惰眠を貪るところだが・・・偽者が居ない事で、俺はようやく眠れるんだが。今日は、そのまま身支度をして、街へ出た。

例のキャッチ・シヨップ、あの場所に、あの奇妙なキャラはまだ居るだろうか？

昨日と変わらず、派手な外装のその店はそれなりに客も入っているらしく、俺の前に一人、俺の後ろに続けて二人が入店した。

後から入った二人が、俺にポイント・リザーブを持ちかけてきたが、丁重にお断りする。

ポイント・リザーブと言うのは、通常はランダムに選ばれた降臨地点へ飛ばされるものを、自ら場所を選んで降ろしてもらおう事を言い、現実での友達や恋人と待ち合わせるために利用されたり、今のうちに、ナンパで使われる手だったりする。女の子は相手が一人であっても、友人と一緒に声を掛けるものらしい。丁重にお断りして、笑顔で別れた。

俺も今回はこのシステムを利用して、以前、立ち寄ったあの店の前に降ろしてもらおうつもりだ。

出来たばかりの真新しい店舗、リクライニングに背を預け、俺はもう一度、電腦空間に降り立つ。

目を閉じて、眠りが誘うそのままに、足を踏み入れる・・・。

まずは昨日のあの店・・・店内に一步、踏み込んでみたが、今日は彼等の姿はない・・・。

店で飲んでいた客たちにそれとなく話を聞いてみたが、常連の者達も、そんな電腦キャラは見ない、と言っていた。たまたま飲んでいただけだったのか・・・何所かには居るんだろぅが。

「そんなキャラを捜して、どうするんだい？」

中年くらいの、ダンディーなカウボーイが俺にそう尋ねた。往年の映画俳優に、こんなタイプが居たな。

電腦世界ではどんな人間になるのも自由だ、本来はチビ・ハゲ・デブの三拍子が揃ったオヤジであっても、若くハンサムな肉体をチョイス出来る。

データの世界だから、違和感なども皆無。それが本来の自分であったかの如し、だ。

俺は愛想良く笑ってやり、・・・職業柄だから苦ではない、彼から情報を得ようと近付いた。

「ああ・・・、噂を聞いて・・・本当かどうか確めて、懸賞サイトにでも応募しようかと思って。」

巷の噂話を検証し、それについての記事を送って掲載されれば、懸賞金がもらえるというインターネットのサイトが人気なんだ。こういう電腦世界とは別に、もっと気軽にディスプレイだけで楽しむような系統の遊びで。

個人が発信元になって、好きなように情報を交換し合う・・・趣味の展覧会みたいに。

俺はカウボーイに事情を説明した。例のキャラが、その秘密部屋のキーではないかと思っている、と。

「幾らかは検証されてるみたいだぜ？・・・例の、『蛇と蜘蛛』ってサイトは覗いたかい？」

まあ、こっちにも電腦ファイトの初心者向けみたいなのがある、って話だけだな・・・本場はやっぱ、サイバーコアだろ。

電腦ファイトは無害だが、本場の地下ファイトは、エントリーも観戦も命懸けだっけ話だぜ？」

だから、キーがあるならそっちだ、と、彼は言う。

「ふうん・・・、観るだけでも危険なのか・・・？」

電脳ファイト・・・そうか、聞いた事があると思つたら、それか。

「ああ・・・地下じゃ、平気で機関銃乱射しやがるそうさ。観客も敵もいつしよくたにぶつ飛ばすらしいぜ？」

金網ファイトで、その昔、高圧電流流したドン・キホーテが居たつてよ。観客、ファイター全員、くたばつたそうさ。本人含めて、な。

・・・未だに、マッド・ファイトの輝かしいナンバー1さ。」

「まあ、一度は観ておいて損はないだろうな。・・・俺は遠慮するけどな。」

ああいう血生臭いのは、勘弁だ。」

平和主義のカウボーイは、そう言つて手にしたグラスを掲げた。

・・・平和なコミュニケート・シティに乾杯。

第三章 第八話

目覚めを感知した接続機器のゴーグルが、自動でせり上がる。手足を繋いでいた機材も同時に俺の身体から外れた。

薄暗いボックス席のライトを点灯して、簡素なリクライニングシートから身を起こす。

席を離れ、受け付けへ向かう。店から出る事無く、Uターンだ。

・・・そう、サイバーコアへ向かう事にした。

俺ははつきり言って初心者だから、どのくらいの時間ログ・イン出来るか・・・自信はないけど。

サイバーコアは、今まで居たコミュニケーション・シティのような生ぬるい場所ではなく、入ったと同時にサバイバルゲームに突入する事さえあるらしいから、正直、目的の人物を捜せるかどうかは怪しい・・・。

手順は同じ。

俺はいきなり何処かのビルの裏手へと転送された。薄汚れ、崩れかけた外壁は、どこかターミナル付近の雑居ビルを思わせる。ゴーストタウンのようなフィールド。

・・・辺りに人の気配はない・・・。

明るい方へと進んで行くと、大きな通りへと出られた。

静かだな・・・。サイバーコアという場所は、問答無用の過激な空間だと聞いたけど、それでもないのかな。

退廃したオフィス・ビル群といった風景が広がるこの場所の、どこを目指せば目的の情報を得られるんだろう・・・。見ただけなら、ほとんど廃墟と言ってしまうのに・・・。

誰か、居ないのか・・・？

無防備に歩いていた俺は、本当にこのルールを解かっているかっただ。

いきなり、背中から腹に、一閃のレーザーが貫いて通った。・・・
続けて、焼けるような痛み。

「ぐっ・・・！」
続けて、四方八方から立て続けに集中砲火を浴びる。まさに蜂の巣、
という状況。

電腦空間とは言え、感覚は現実とほぼ同じ・・・あまりの激痛に、
俺はほとんど無意識でログ・アウトを念じていたらしい。・・・リ
クライニング・シートで飛び起きた。

がちりと固定されているから、起き上がるなんて無理だけれど。
手首を少々傷めた。

荒い息を吐いて、しばらくは呼吸を整えなければならなかった。心
臓が痛いほどに跳ねている。

改めて機器を外し、自身の身体をまさぐる。

腹にも背中にも異常はない・・・当たり前だけど。

まさか、いきなり狙撃されるなんて・・・信じられない。
まだ痛むような気のする腹をさすり、何度も確認する。動揺する俺
のこめかみから、汗が流れ落ちる。

ここまでとは思わなかった。・・・まさしく、『瞬殺』。
なんの手立てもなくあの空間へ行くのは、やはり無謀だったんだ・・・

仕方ない、一旦出直して、サイトの情報を先に当たろう。

あの世界の攻略は、その後だ・・・。

電腦空間からの帰還・・・これが当たり前に思っているけれど、も
し、誰かがプログラムに細工をしたら、中に入った者達は永遠にバ
ーチャルの世界をさ迷う・・・？

嫌な想像に、背筋が寒くなった。

・・・信じきっていて、いいのか・・・？

俺は少しばかり、気弱くなっているのかも知れないな。

動けなくなる前に、なんとか対策を考えないと。今はとにかく、電

脳世界にしか手掛かりがない。

嫌も応もなく、あの場所へ行くしかないんだ。

こうなったら、当たれる情報には片っ端から当たってやる。

リクライニングを調節し、前面のディスプレイを操作する。

画面に目的のサイトを映し出した。

・・・ああ、そうだ、後でネットの復歴を消しておかないと・・・
連中に勘付かれてしまうな・・・。

『蛇と蜘蛛』・・・あつた。ここだ。

画面には「電腦ファイト」と「地下ファイト」の二つのリンク先が表示される。

そもそも電腦ファイトとは、過激な地下ファイトの亜流、もしくは練習ステージとして発生したもので、60年以上前から行われていた地下ファイトに比べ、まだ歴史は浅い・・・か。

電腦ファイトや地下ファイトがどういうモノかは、俺だつて少しくらいは知っているさ。

電腦空間や地下街で行われる、ストリート・ファイト。素手だけとか、武器使用可とか、その試合によってルールはさまざまだ。基本的に1対1の真剣勝負で、トーナメント制。

あるいは、本戦出場を賭けての生き残り戦。

電腦空間ではもちろん死ぬことは有り得ないが・・・地下街では、死を賭けたデス・ゲームだと言う。

そして、賞金の額もケタが違うとか。

殺人趣向のある者が、始めは電腦空間でのサバイバルやカー・チェイスなどで欲望を満たしていたものを、いつしか、それでは満足出来なくなつて本当の殺し合いにエスカレートしていった結果だとも言われる。

集まるのは、狂った殺人鬼たちだ。

真っ黒い壁紙に、どこか禍々しい文体。

俺は食い入るように、画面に目を凝らした。

『翼持つ蛇』・・・サーペント・ヴァンズ、地下街の殺人請負組織から発展・・・現在は、巨大市場と言われる地下賭博を牛耳っているシンジケート。ここで年一回開催される賭博対象のデス・ゲームが、本来の地下ファイトと呼ばれていたもの、か。

『赤と黒の斑蜘蛛』・・・レッド&ブラック・オニキス。盗品専門の卸商から、近年、地下ファイトへ参入。へえ・・・、けっこう新しい組織だったんだな。

賞金額がもつとも高額で、その規模もS・ヴァンズに迫る勢い、か。勢力争いとか、あるのかな？

R&Bは月一回、S・ヴァンズは年に一回・・・え？ これって、もうじき開催されるんじゃないか。

ファイト形態も、近年はマン・ファイト以外にロボットを代わりに戦わせる、ロイド・タイトルが人気を博している、か。

じゃあ・・・、もしかしたら。

出来損ないだと思ったあのキャラは、ロイド・タイトルに向けての調整で紛れ込ませていたのか？

だから、今日は居なかった・・・？

第三章 第九話

ロイド・タイトル・・・あった、ここに詳しい記事が書かれている。ロボットを戦わせる地下ファイト特有の形態。出場するロボットは、だいたい改造・チューンナップを施されたモノばかりだが、デモンストラーションでは普通のセクサロイドを破壊する場合もある。普通のセクサロイド。

眩暈がした・・・。

刺激に倦んだ気狂いの、金だけは持っている連中のする事だから察しは付いていたけど。

ひどい。

急激に不安が襲ってくる、あの時に見たあのキャラは大丈夫なんだろうか。

電脳空間での会議場を開くためのキーマンだというなら、ファイト自体には関係ないだろう。

けど、もし、そんな場所がただの噂で、はなから存在していなかったら？

本当は人間だとしたら？ あの時の、妙な人間臭さが心を離れない。記憶を操作されて、人間性を失っている場合は考えられないか？

もしかしたら、ロボットどころか・・・もっと非合法な手段で、戦士を作っているとしたら？

例えば・・・人間を、改造したり。

そういう人間を、身代わりを使って集めているとしたら？

偽者の妹。奇妙な電脳キャラ。共通するのは、時折見せる恐るべき精巧さか。

もう一度、電脳世界を覗いて来よう。何か、もっと情報を集めるんだ。

そうだ、友達に当たってみよう。今でもサイバーコアに出入りしているかな・・・。

店舗を出て、そのまま真っすぐに近くの喫茶店へ入った。それから改めて携帯を操作した。

「あ、・・・俺だけだ。ああ、その遼平だよ。・・・今、話せるか？」

俺からの電話は珍しい、と、散々言った後で、相手は気軽に相談を受けてくれた。

『サイバーコアへ？ あんな場所、トロいお前じゃ絶対ムリだよ！ 秒殺だよ、秒殺！』

で、ラッキーな野郎にポイント稼がせてやるのがオチさ！ やめとけ！』

うう・・・、ヒドイ言い草だな。実際、そうだったけど。

「・・・頼むよ、なんとかしたいんだ。

迷惑は掛けない、色々アドバイスをくれるだけでいい、あの場所の情報くれ！」

『情報と言ってもなあ・・・、俺もプランクがあるし、知ってる事はもう古いぜ？』

何も知らない友人は、無責任な事も言えないと電話の向こうで言い渋る。

「いいよ、俺は電腦ファイトの事を調べたいだけなんだから・・・。」

嘘を吐いて、彼からなんとか情報を引き出そうと試みた。

俺が調べたいのは、電腦ファイトそのものより・・・さらに奥の事だからだ。

最終的には、危険極まりないという『地下ファイト』の開催地にまで出向くつもりだった。

『あんな場所の、何が知りたいって言うんだ？』

電腦ファイトだったら、別に出向かなくても深夜枠のテレビジョンに毎週放映されるぜ？』

え？・・・そうだったのか？

『それに、サイバーコアではクレジット会社の支払いの他にポイント制度つてのがあってさ。』

シティでの施設利用と同じように現実のクレジットを支払う方法の他に、向こうで稼いでそのポイントを金として使用する事も出来るんだけどさ。賞金だけじゃなく、他人をログ・アウトさせただけでも幾許かのポイントになるからな・・・お前なんか、若葉狩りでのいいターゲットにしかないよ。』

「なんなんだ・・・そりゃ・・・、新人イジメかよ・・・。」

『だから、何でもアリがサイバーコアだつての！』

豪快に笑いながら、友達は断言した。日常で人狩りが行われ、ランチャーミサイルに追撃される世界だ、と。そして続ける。

『ああ、じゃあ、最初にシヨップに入った時点でな、ポイント・リザーブで「旅の駅」を指定しな。』

そこで用心棒を雇えばいい。金は掛かるが、初心者なら仕方がないさ。

俺が行ってやるにも、ブランクがなあ・・・。すまんね。』

「いや、いいよ・・・ありがとう。」

忠告に従って、そうさせてもらう。報酬はクレジットだよな・・・高いのか、仕方ないな・・・。」

俺が独り言のように呟いた言葉に反応して、彼は慌てて訂正を入れた。

『あ、いや！ クレジットで片付くとは限らないぜ？』

中には関係を強要してくるヤツも居るから、気をつけて選べよ。ほいほい頷いておいて、気が変わるなんてフツーに罷り通るからな。・・・そういうのは、いつそ、地下の方が礼儀正しいくらいだぜ？』

聞けば聞くほど、ヒドイ世界だな。事情がなけりゃ、願い下げの場所だ。

『けど、なんだってサイバーコアへ行く気になったんだ？』

以前、俺が誘った時は、ビビりまくって逃げたくせによお……。」
……つ、言葉が詰まった。

いつそ話してしまおうか、と、心が揺れる。

妹に繋がる手掛かりが、なんでもいいから欲しいんだ、と……言
つてしまえば、楽だろつか？

いや、友達を巻き込む怖れがあるんだ、それは言えない。

「……気になる電腦キャラが居たんだ。ハッキング・データで……」

「ハッキング？」

なんだ？ 急に声の調子が変わったような？

「ああ。たぶん、ハッキングだと思っけど？」

「バカな事言うな、恥かしい！」

そりゃ、そういう噂があるのは知ってるがな、現実には有り得ない
よ。

今までも数多くのハッカーが挑んで……それでも攻略不能と言
われているんだぜ？

いや、そうでなきゃ安心して遊べないくらい、誰だつて知ってるよ
！」

ああ……失念してた。

そう言えば、そうだ。電腦世界は、そのまま政府の中枢にも食い込
むメモリーで……いや、ロボットの制御にも関わる巨大な集合
サーバーだ。

そこに外部からのアクセスでキャラクターを構築するって事は、こ
れはデータを覗き見る事とは根本から違う。

そんな場所にハッキングで……それも、データの改変が行えるな
んで、大変な事だったんだ。

この世界の根本が、揺らいでしまう。

「あ……、ごめん！ ハッキング・データかと思っくらい、出来
の悪い電腦キャラが居てさあ……！」

俺の誤魔化しは、果たして通用するか？

『なんだ、それ？』

『電腦キヤラに参ったから、会いたいとか？・・・バカじゃねえ？』

『ば、バカとは何だよ！俺は本気で口説いてみたいと思って・・・』

！

電話口から、大きな溜息を吐き出す音が聞こえ、そのまま通話が途切れる。・・・切られた。

まあ、仕方がないか。本当の事は言えそうにないしな。

第三章 第十話

俺はもう一度だけ、この街を捜してみる事にした。ロイド・タイトル開催まで、まだ幾許かの日数がある。

それまでに、出来るだけの事をしてみよう。

あれが、タイトル出場の為に作られた者なら、製作者の意図が読めない。どうして、わざわざ平和なコミュニケート・シティへ入れたんだ？ 戦わせるだけが目的なら、それは必要ない。

そして、『鍵』であるなら・・・あんなに無防備に存在する事自体が、おかしい。

最初から、間違っているかも知れない、いや、間違いであって欲しい。

悪趣味な人間は多いけれど・・・そんな連中ばかりじゃないと、俺に示してくれ。

例の店をまず、覗いた。やはり、そこに目的のキャラは居ない。

めくら滅法に、適当に歩いている。辿り付いたのは、古い教会だ。

よく、将来を誓い合って、カップルが擬似的に結婚式を上げている・・・二人きりで。

今日は誰も居ないのか、辺りに人影はない。

両開きの重いドアを押し開くと、軋んだ音を響かせた。

中に、神父が居たと思うんだけど。誰も居ない。

あ。

見事なステンドグラス・・・色とりどりの色彩が降り注ぐ中に、捜していた青年を見つけた。

礼拝堂のテーブルの上に無造作に腰掛け、のんびりと正面の絵画を眺めて。

なんていうか、この光景そのものが一枚のよく出来た絵画のよう。

電脳キャラには、とうてい見えない。

本当は、生きた人間なんじゃないだろうか……。本当は……。
色んな可能性が浮かび上がっては消えた。

現実の世界では、妹そっくりのロボットが居て。
電脳の世界には、ロボットにしか見えない人間が？
なんだか、世の中が狂っている。

「……………」

彼は、近付いて来る俺に気付いて振り向いた。
けど、それだけだ。何も喋らないし、表情も変えない。

「また会ったね……………」

何から問い掛けよう。彼と、今度こそはじっくりと話をしなくちゃ
いけない気がした。

彼はきつと、この『世界』の、鍵だ。

「君は何者なんだ…………？ 名前くらいは、教えてもらえる？」

「…………呼びたいように呼べばいい。俺の名前など、ほとんど意味
はない。

便宜上、付けられた名称に拘るつもりもない…………それから？

俺の正体？…………説明は難しい。セキュリティ・コードに引っ掛
かる。強制的に排除されるだろう。

それでも聞きたいなら…………そうだな、」

風景に歪みが走ってゆく。

え…………？ こんな現象は初めて観るぞ？

うるたえる俺を無視して、彼は言葉を繋いだ。

「この『世界』を、管理する者。」

近寄るな、という警告なのか…………彼の映像に激しいノイズが走り、
そして、ダウン…………消え失せた。

どこからか、俺の耳に機械的な高い声音が届く。

『予期しないタイプのエラーです…………このエラーの詳細を、シ
ステム・サーバーへ報告しますか？』

声を、俺は無視した。

その後も、教会の内外で彼の姿を探したが、どこにも居なかった。

さ迷うように、俺は電脳世界を走り廻った。

何所へ行けば、会えるんだ？

時間だけが刻一刻と過ぎて、俺は出勤時間さえ忘れ果てていた。

やはり、会えないのか。

この世界には居ないのか。

やはり、存在そのものが、ない？ ついに俺は、禁じ手を使った。

システム編集局へ直談判を念じたんだ。ログ・アウトと同じに、顧客に対してガイダンスを流す。

ユーザーからの質問や様々な要望に対応してくれる、形としてはテレパスのようなものだ。

あのキャラの搜索を願う。

『システム編集局をお呼び出しになられましたか？』

機械的な高い声音が直接、俺の耳を叩く。

「捜してくれ、何所にいるんだ？ ……会いたい。」
『……………』

しばらくの沈黙が、胸騒ぎを引き出してくる。

『申し訳御座いません。該当するキャラクターは、存在しておりません。』

やっぱり……ハッキング・データ。

これではつきりした。外部から電脳世界にアクセスして、違法に構築されたキャラクターだ。

と、いう事は……もつと別な場所で、試験運転が成されているのか？

でも彼は、自身を『管理人』と言った。

妹がすり替えられていたり、電脳世界にハッキングが掛けられたり……どうなってるんだ。

何か、とんでもない事が起きている予感がする。

第三章 第十一話

あの時に出会った、あの電腦キャラ・・・いや、やはり生身の人間だった可能性もある。

いや・・・。

考えれば考えるだけ、バラバラにほどけてゆく感覚で・・・何が本当なのかも解からない。

友達からの情報を整理しよう。まさか、電腦ファイトの様子が放映されているとは思わなかった。

深夜枠のテレビジョンだったな。毎週つて事は、それだけ頻繁にゲームは行われているって事か。

以前と同じように、電腦世界から戻ってすぐにネットへ繋ぎ直す。

ガイドンスを呼び出し、インターネットから情報を取り出す。テレビジョンとネットは同じディスプレイで閲覧可能だから、目的の番組が今夜放送されるかを調べてみた。

やっているのは電腦ファイトの試合での、一部を放映するというもので・・・要は、ハイライト部分だけしか見られない。それじゃあ、意味がない。

それよりも、同じサイトに、本場の地下街で行われる地下ファイトの開催日が告知されていた。

こんな情報、ネットで公共のサイトが流してていいのか？

ネットに流れるサイト情報は、よほど犯罪色の強いもの意外は、政府も黙認しているとは聞くが。

深夜1：00より、地下ファイト「ロイド・タイトル？」が、開催もう一つ、これも公式から・・・？ 電腦ファイト観戦ツアー・・・こんなものまであるんだ。

深夜1：00から、サイバーコアを安全に移動出来るカートを用意して、会場まで送迎、か。

日時は、ちょうど電腦ファイトの翌日がロイド・タイトル。

連チャンか、少しキツいかな。

首を捻りつつ、それでも手はマウスを動かし、カーソルを参加申し込みへと移動させていた。

サイトからアクセスして、ツアーの予約を取り、そのまま勤務先へ連絡。

無理をするな、と店長に窘められたが、とりあえず休みは取れた。偽物たちにはOFF会と偽るつもりだ。

人気があるのだろう、俺は残り数個の枠にギリギリで収まる事が出来た。もう少し遅ければ、売り切れていたところだ。わずか数分後にはソウルド・アウトの黄色いメッセージに変わっていた。

翌日の夜、俺は仕事帰りにキャッチ・ショップへ立ち寄り、そのまま、ツアーに参加した。

電脳空間のポイントへ降ろされた俺が、まず目にした光景は、賑やかなアーケードの中だ。まるでテーマパークにでも迷い込んだような穏やかな空気は、とても凶悪なサイバーコアの内部とは見えない。ガイダンスの軽やかな女性の声が、「ようこそ、サイバーコア内部唯一の中立地帯『旅の駅』へ・・・」とアナウンスを流した。そうか、ここが、『旅の駅』だったのか。

「銀行はステーション向かって右手の建物、レストラン街は左手の通りを奥、となっております・・・」
続けて流れた案内の後で、また別の声が俺の耳に届いた。

「・・・電脳ファイト観戦ツアーに参加のお客様、こちらのツアーバス前にお集まり下さい、」

バスガイドの姿をした電脳キャラが、青い旗を振りながら微笑んでいる。本当に、ここがあの、危険極まりないサイバーコアなのか？多くの客・・・ほとんどは俺と同じ若い連中で、男女のカップルだとか、かましい女の団体だとか、同じ意味合いで参加したのだから単独の若い男も多い。

全員を乗せたバスが、出発した。

サイバーコア内部の危険な廃墟を揉め事もなく通過して、三台に分乗した客たちは会場へと運ばれる。

「・・・本来ならば、どのような形であれ、このようにツアーバスを繰り出す事は難しいのですが、今回、電腦ファイトの観戦という事から、主催事務局の後ろ盾を得ました事により、無事に皆様を会場までお運び出来る事となりました・・・」

ガイドの説明によれば、電腦ファイトの主催者側の強い圧力により、ツアー客を狙ったいかなる攻撃も禁止される事になった、というのだ。電腦ファイトの主催がそれだけ強い組織力と影響力を持っている、という事だ。

会場の中でツアー客は降ろされ、目印となる腕章をそれぞれが付けさせられた。これで、会場から迷い出ても、攻撃される事はないのだと言う。

電腦ファイトは大きな廃ビルの中に幾つもの試合場が開かれ、それぞれで個々に試合が行われるらしい。観客は好きな階、好きな部屋へ行き、試合場で行われる試合を観戦する事が許される。

「・・・観戦の際に、試合出場者からの攻撃を受けるなど、やむなくログ・アウトされる場合が御座います。その際には、規約に載っております不測の事態となり、再INにつきましては、当社は責任を負いかねますので御了承ください・・・」

ガイドの念押し説明の後に、一団は解散する。
ログ・アウトの後に再びインする時は、ポイント・リザーブ使用時の料金が別途必要だと、繰り返しで告げている。それだけ、ログ・アウトの機会が多いということなんだろう。

後はバラバラに、それぞれで勝手に試合を見に、ビル内部へと散らばっていった。

第三章 第十二話

俺は少しだけ試合出場選手の顔を確認しては、その場を離れて他へ移るといふ行為を繰り返していた。

とにかく沢山の試合が行われていて・・・何所に行くべきかも定まらない。

試合に出ているような気がして来てみたけど、こんなにあるんじゃない、捜しようがない。

ビル同士は回廊のようなもので、幾つかの建築物が繋がっていた。あちらこちらと歩き回るうちに、試合会場とは違うビルに迷い込んでしまったらしかった。

静まり返る廃墟ビル。

・・・まさか、大丈夫だよな・・・？

ツアー客は、例え会場から離れてしまっても襲われなはずだ。・・・きつと。

以前の、初めてこの地に降り立った日に受けた洗礼が、脳裏に浮かんだ。

自然と、緊張で壁に張り付くような姿勢になる。いつ、何所から狙われるか、解かったものじゃないから。

ガラスの砕けた窓に寄ると、隣のビル辺りからの歓声が微かに響いてくる・・・あっちが会場か。

パキ、

床に撒き散らされたガラスの破片だろう、突然、高い音を奏でた。

誰か居る。

「・・・あ、見つけ。」

「今夜の獲物は上物だぜ、」

いきなり現われた複数の男達が、にやけた笑みと共に、そんな事を言った。

獲物・・・？ まさか？

どうもこの姿でログ・インする事自体が間違이었다よ、俺が出会った者達はみな、そんな目でしか俺を見ない。どいつもこいつも……、クソ野郎共。

またしても複数が一人を取り囲む構図。ここでは常套手段だという事らしいな。

僅かなポイントを得るためだけに、こんな事をしているのか。こういう嫌がらせが元々好きなのか。どの道、ログ・アウトで簡単に逃げられてしまうというのに、本当に悪趣味だ。

弱い者をいたぶるのが好きなのだろうが、いい迷惑だ。

初心者が居着かないと、ゲーム自体の発展もないだろうに、管理者はどういうつもりなんだ。

まあ、今回はツアー参加。狂犬みたいな連中であっても、そう簡単に手出しはしてこないだろう。

単なる嫌がらせか、俺がビビッてログ・アウトするのを狙っているんだろう。

「ツアー参加者にはいかなる攻撃も出来ないはずだろ、脅しも攻撃のうちじゃないのか？」

俺の問いかけにも無言のまま、連中はただニヤニヤと笑っている。

「……へへへ……」

嫌らしい笑みと、舌なめずり。なんだ？ こいつ等のこの余裕は？

「なんせ、こっちでヤツちまえるのは、電腦キャラだけだからな。

つまんねえんだよ。

ホンモンの人間は、すぐ、ログ・アウトで逃げちまうんだからよ。

やっぱ、人間が、ヤリてえんだよなあ。」

最低のヤツ等だな。付き合いきれない。

脇を抜けて行こうとすると、道を塞ぐ。

「どけよ、」

「逃げてみればどうだ？ ツアー客だとか、俺たちじゃ関係ないんだぜ？」

うっとおしいな。こんな馬鹿ども相手にしてられるか。出直した。

・・・!!

どうしたんだ!? ログ・アウトを念じているのに、戻れない!?

「言っただろ、ログ・アウトで逃げようだったって無駄だったな。」

「へへへ・・・、どうだい? 知り合いが作った念波遮断キーは。」

「電腦世界のセキュリティ・ホールを突いたプログラム・バグってわけさ。管理側がパッチを貼るまで、しばらく掛かる。それまではやりたい放題ってワケだよ。電腦キャラじゃない、本物の人間を強姦出来るなんて、最高だよな。」

冗談、じゃない・・・!

一人分の空間が開いていて、それは突破口に見えた。

俺は迷わずそこから包囲網を逃れ、暗い廊下を走り出した。

「へへへ・・・、わざと逃がしてやったんだぜ? わかる? わざ・と。」

彼等の嘲笑する声が追いつがる。

第三章 第十三話

彼等は今までにも、何度もこういう事をしているような口振りだった。

ニユースには、こんな事件は流れなかった。

彼等のしている事がまだ知られていない？

そんなはずはない、電腦世界は政府管理・・・情報は、すべて筒抜けのはず。

こんな無法が許されているとでも？

まさか・・・。

「捕まえた！」

「うわ！！」

突然、開いたドアから男が飛び出して、タツクルを掛けた。もんどりうつて俺は倒され、そいつは仲間を呼び寄せる。

「ゲーム・エンド。」

次々と仲間の連中がやって来て、俺を見下ろしてそう言った。ちくしょう・・・！

何度、念じてもログ・アウトは叶わない。

「無駄だって、言ってるじゃん、」

一人が、俺の頭を踏み付けて、嗤う。

「兄貴！ 伏せて！！」

なに！？

思う間に、いきなり弾丸が行き交った。

「ぐあ！」

「ぎゃ！」

男達の悲鳴が上がる。そして、誰もログ・アウト出来ずに倒れ込む。通常なら堪らずログ・アウトするだろう酷い怪我を負って、連中は血塗れで転げまわる。

口々に汚い罵りの言葉を俺たちに浴びせ、けれど一人もログ・アウ

トを念じるつもりはないようだった。

目を向けた先に、妹の姿を見つけ、眉を顰めた。

「兄貴……！ 大丈夫！？」

呻く男達を無視して俺も立ち上がり、マシンガンを手にした妹の傍へ近寄った。

一体、お前等は、なんなんだ？

ロボットが電腦世界に入れるわけではない。クローンでも、そうだ。

妹の識別コードを持っているとしても、サイバーコアへは入れない。

「どうやって、ここへ来た……？」

「え……、だって、兄貴が心配で！」

どうして俺が危機に瀕していると知った？

電腦世界で起きている事を、どうして知る事が出来る？

なにより、この空間は、違法コードで外界から遮断されているはずだ。

「未成年者は、サイバーコアへは入れないんだぞ、」

言い逃れの出来ない状況に、偽の妹は言葉を無くした。

偽者の、妹……その手から、武器が消失した。突然に。

妹自身も予期しなかったのだろう、びくり、と震えた。

「……よくもやってくれやがったな……、」

よろめきながら、男達が立ち上がっていく……瀕死の怪我が、嘘のように消えている。

違法の機器で、プログラムを操作してやがる、

「ちっ！ 麻里子、走れ！」

腕を掴み、とにかく逃げた。

偽者だろうが、疑惑があるのが、あんな場所に置いておくわけにはいかない。

逃げられるか……！？

何所をどう走れば、出口が見つかる……！？

「ひやはは！ 出口なんかねーぜ！ せいぜい、逃げな！」

ちくしょう！ さっきからシステムを呼び出しているのに、応答が
えない……！

目前に迫る扉を押し開く、開けた空間に出る、

……！

無限ループ……、そこは、さっきの連中が集まる空間だ。

第三章 第十四話

「へへへ……もう諦めたのかあ？ ごくろーサン。」

く……、どうにか、麻里子だけでも逃がさなくては。

「麻里子……、同じルートで、逃げる。お前だけなら、逃げられるんだろ？」

「やだよ、兄貴……！」

俺が妹に気を取られていた時に、『彼』は現われたようだった……。

男達のうちの一人が先に気付き、俺の背後を見て怪訝そうに目を凝らす。

「？ ……なんだ、また一人、増えやがったぜ？」

え？ 声に気付いて振り返った。

あの時の……彼だ。

手には、黒い奇妙な形をした武器を携えている。男の一人が眉を顰める。

「おい、アイツの武器、なんで消えねえ？」

「え？ さあ？」

うろたえる間に、戦闘は開始されていた。

間合いは僅かだった、黒い槍が一人の眉間を打つ。吹き飛ぶ仲間を咄嗟に見やった隣の男は、視線を戻す間に懐への侵入を許した。

右手には鉄の爪、瞬発で腹にめり込み、男に血ヘッドを吐かせた。返り血が頬に散る。

電光石火、という単語を思い浮かべる間に、4人が打ち倒されている。

「な、なんだ！？ こいつ……！」

「無駄だ、そのプログラムはもう無効にした。」

なにを言っているのか解からない、いや、場のほとんどはそうだったろう。

彼と、妹だけはその意味を知っている。

プログラムは無効にされた、それでもなお、全員がログ・アウトを許されない。

今度は彼によつて。

残りの男達も次の瞬間には、圧倒的な強さの前に叩き伏せられる。

そして、彼等の傷は、今度は癒されなかった。

「2019003-K6、お前も戻れ、・・・管轄外だ。」

なにを？ 妹を見ると、泣きそうな顔で俺を見上げる。

そして、ログ・アウト・・・俺の前から、姿を消す。

改めて、彼を見た。

右腕にはよくある通常の鉤爪、アイアン・クロー。左手の、あの黒い武器は槍・・・？

見たこともない形状で、身の丈ほどもある、漆黒の美しいフォルムだ。

彼は、よくある電腦キャラとは一線を画する。何か、特別な存在だ。やはり、噂に聞いていた、『鍵』なのか？

急激に眠気が襲ってくる。電腦世界に飛ばされる時と同じ。

「プログラムを開発した者を処分するのに手間取った。お前も含め、こここの処理を行う。」

眠っている間に、すべてが夢になる。ここは、記憶の世界・・・記憶は、絶対ではない。他者に触れられぬ領域ではない。・・・お前の抱える疑いも、問題も、すべてが・・・。

目覚めた時には、いつもと変わらぬ朝だ。」

「君は・・・？」薄れゆく意識の中、必死に尋ねた。

きつと、目覚めた時には覚えていないのだからうけれど。

君の正体は・・・なに・・・？

「・・・人間は、厄介だ。」

意識が、途切れた・・・。

・・・ん、眩しい・・・。

ああ、しまった、また明かりを消さずに電腦空間に入ったのか。目がチカチカするから、気を付けようと思っていたのに。

この店のリクライニングは新しいし、ブースも個々で別だからいいんだが、やっぱり大手は客同士の繋がりが薄いよな。いつも行く店なら、大概は、誰か知り合いに出会えるものなんだけど。

行きずりの関係というのも、そろそろ飽きてきたし。やっぱり俺は、いつもの小さいショップが性に合う。

ふと、時計を見やって驚いた。朝・・・!?

そんな長居したつもりはなかったんだけどな。と、言うか、なんだか記憶が曖昧だな？

まあ、電腦空間ではありがちな事だ、楽しい時間はあっという間に過ぎるものだよな。

「・・・ふう、お喋りだけでこんな時間になったのか・・・。」

誰が居るわけでもないのに、一人言い訳してみた台詞を吐いて苦笑い。そもそも、なんだってあんな真夜中からショップへ入る気になったんだっけ？

何か、忘れているような・・・。

まあ、いいか。

そろそろ帰らないと、麻里子が起きたらびっくりするな。

さて、と。

ああ、首が痛い・・・さすがに徹夜は堪えるな。

第四章 第一話

シヨップを出る。

ふと、目前にあるビルの二階に視線が向かった。

扶桑興信所・・・なんだろう、何か思い出したような気がしたのに、記憶の底に沈んだ。

気持ちが悪いよな、こういう感覚。

なんか見覚えがある看板で、行ったような気がするのに思い出せない。

「兄貴ー！」

呼びかける声に気付いたのはその時だ。

珍しい、麻里子が俺に手を振ってるよ。いつもなら、俺が気付いて声をかけても知らん顔を決め込むくせに。

年頃の女の子はデリケートだからね、とか言っつて勝手に怒っていたくせに。

あ、また。

何か思い出しかけては、記憶の底に沈んでいく。まるで鎖に繋がれて浮き上がる事を阻止されているみたいな・・・イライラするな。

思い出したい、すつきりさせたい。何を、忘れているんだ？

くそ、ここまで出てきてるのに。

「どうしたの？ 兄貴？」

「え？ いや・・・、なんでもないよ。」

なんでもなくはないんだが。言っつたところで仕方ないしな。

「えへへ、買い物に来ただけで、兄貴が見えたもんだからさ。」

「
そう言っつて麻里子は俺の腕に自分の腕を絡めた。

こんな事も珍しい、というか、初めての事で驚いた。

小学生時分には、そりゃあしょっちゅう手を繋いできたりしてかなり鬱陶しかった記憶もあるけど。」

近年はこんな風にベタベタしたがる事もなくなって、兄としては少し寂しかったりしたものだ。
いや・・・これは・・・。

記憶が急激に呼び覚まされ、同時に見えない鎖が意識の底へと引き摺り戻す。

思い出せない。けど、思い出した。
この感覚。

じつと、目の前の妹を見つめる。

「どうしたの？ 兄貴・・・」

おどおどと、俺の機嫌を窺う視線。

これは、妹じゃ、ない。

馬鹿な！ いきなり何を考えるんだ、脈絡がないにもほどがあるだろ、俺。

でも、なんだろう、雲が晴れるように記憶が鮮明さを増した。もやもやが少しだけ消えた。

なんだ、これ？ まだ、大部分の霧は晴れていないと、そういう確信だけはある。

大量の鎖が俺の頭の中でもつれ、絡まって、真っ暗な深海と繋がっている。

そんなイメージ。

何か、大事な事柄が俺の頭の中から消えさってる・・・。

気付けば俺は妹の腕を振り払っていた。

無意識のことだ、俺自身が驚いた。

「あ・・・ごめ、」

麻里子の顔はひどいものだった。ものすごく傷ついた、と目が訴えている。

無理やりの笑顔を形作っていく。

「あ、あたしっ、・・・ごめ・・・、また、やっちゃった・・・、」

誤魔化しの笑顔は失敗し、だんだんと小さくなる妹の声。そして同時に浮き上がり、零れ落ちる涙。

なんで、泣くんだ、

「ごめん、先に帰るね、兄貴、」

俺の視線から逃れるように、麻里子は顔を背け、急ぎ足で遠ざかった。

わけが解からない。らしくない妹に。あれを偽物だと断言する自身自身に。

日を追うごとに、妹に関する疑惑は増えてゆく。

どうと説明は出来ない。でも、違うという事だけは解かる。

ふとした仕種、表情、僅かな言葉の違い。たった二人きりの兄妹だ、俺はずっと妹を見てきたから、だから解かることがある。

誰にも理解されないとしても。

検査入院の結果を何度見つめ返しても同じ。それくらい解かっているのに、何度も封筒を開ける。

どうして疑いが晴れないんだろう。あれは・・・あの子は、麻里子じゃないんだ・・・。

心が否定する。あれは、妹じゃない。

第四章 第二話

「遼平くん、」

突然かけられた言葉、強い口調に意識を引き戻された。

「え、あ、はい。店長。」

「どうしたんだい？ 今日はいつも以上に上の空だね。」

ああ・・・、近頃はずっと心に留めている事柄があつて・・・て。何だっけ？ 忘れてしまつてる。

「いえ・・・、すみません、ちよつと最近物忘れが酷いみたいで。冗談にして誤魔化そうとしたけど、店長はさらに訝しげな顔をしただけだった。

しくじつたな、空気が重い。

「遼平くん、ちよつと今度、ウチに来れるかな？」

「え？ 別に構いませんけど・・・、」
「なんだろう？」

店長は機械嫌いで有名で、おまけにあまり他人を入れたがらないって聞いたけど。

あれ？ でも、何だか店長の家上がりこんだような気がするな。いつだったかな？

思い出せない・・・。

なんだか、ここ数週間の記憶が曖昧で、何をしてたのかが解からない。気持ち悪いもんだよなあ。

「最近つて、どのくらいの期間なの？ ざつと・・・半年近く？」

「半年前なんて、普通に覚えてませんよ、店長。」

俺は冗談を言われたものだと思つて、そう答えた。でも、店長の返した笑みは、なんだかそういう感じじゃない。

「あの、店長・・・？」

「いいよ。今は仕事してください。」

はい、て、俺はそう返事をするしかなかった。

仕事を終え、家に帰りつく頃にはいつも真夜中だ。さすがに危険を考慮して、必ず空間タクシーを使う。

彼等ロボットは時間も気にせず二十四時間、三百六十五日、ずっと働き続けている。

ロボットなんだし、当たり前、か。

ほんの数分で家に到着。支払いはクレジット、俺は何をする必要もなくタクシーを降りる。

『有難うゴザイマシタ、またのご利用をお待ちシテオリマス。』

型通りの挨拶。タクシー運転手は長距離の時には客相手のお喋りにも興じる為に、ある程度のAIを搭載しているものだけど、わりとこんな風にサンプルみたいな会話も多い。

長距離・・・なんだろう、タクシーを呼んで長距離指定をした記憶はすぐに蘇ってきたのに、目的地が何処だったかが思い出せない。本当に気持ちが悪いな、頭を振ってみるけど、そんな程度で解決するわけもない。

もう止めよう、疲れてるんだろう。

家の明かりは玄関脇の灯が点るだけだ。

古い家屋だから、実際には赤外線網が幾重と掛けられているし、横切る俺の体型データを照合し終わるまで、中には入れられないようになってる。

強行突破すれば、警報が鳴り響く。

重文建築の保護という名目で、この辺りの古い民家はすべて厳重な警備を敷かれている。

うん、まただ。

何か、思い出しかけては・・・イライラするな。

裏口から入った事があったな、そう言えば。なんの為にだったかは、思い出せないけど。

いや、妹の部屋を覗き見して・・・あ、いや、やましい理由じゃない、
・・・違っただけだ。
たぶん。

あれ？ やっぱり忘れてる。なんだった？
妹の部屋を、なんで覗こうなんて思ったんだ、俺は。

思い出せ、何かが引っかかって・・・そして、俺は妹の・・・麻里子
の部屋を覗き見る必要が出来たんだ。
麻里子が。

ロボット。

ああ、思い出したぞ。

麻里子がロボットとすり替えられたんだ。
今、家の中に居るのは、ロボットで・・・

はは。

馬鹿な話だ。

ロボット？ あんな精巧なロボットなんて、作れるわけがない。規
制法に見事に引っかかる。
でも、ロボットだ。

なんだよ、俺。矛盾してるじゃないか、なんだよ、この確信めいた気持ち。

ワケが解からない。

でも、妹はロボットに換えられた。

・・・ノイローゼかな、俺。

第四章 第三話

翌日、俺は出勤時刻までの余暇を使い、ある場所を訪れていた。扶桑興信所。探偵事務所のはず。

以前にも、来たことがあるはずだ。・・・たぶん。

「失礼ですが、わたしは貴方との面識はありませんね。」
柔らかな物腰で、ここの責任者だと答えた男性は俺の質問を否定した。

「じゃあ、俺の思い過ごしなのか・・・。
この人と会ったような記憶があるんだけどな。」

差し出された名刺にこの事務所の所長であることが書かれている。名前は桑名さん。

会ったことがあると、思ったんだけど。完全否定されると、落ち込むな。やっぱり俺がおかしいらしい。

以前にも経験したような感じに、指示されるままに腕時計を外して目の前の探偵に渡す。それを調べてから、また俺の手に戻してくる。以前もあつた、経験した。・・・ような、気がするだけで確信じゃない。

なんだか奇妙な慨視感のある中で、俺は成り行きを説明する。

妹が何者かとすり替えられている事を、細かい違いを切々と彼に話した。

「ふーん・・・、だいたいの話は把握いたしました。」

はつきりとした確証はないものの、妹さんが偽物としか思えない、と。

「そうですね、あれは・・・ロボットなんです。」

俺が断言した時、彼は困ったような笑みを浮かべた。

あ、信用されていないな、これは。

言った本人が半信半疑なんだから、信じろと言うほうが土台無理だ

とは思っけど。

「・・・いいですか、須崎さん。まずは、貴方に現状認識を改めて頂く必要があります。」

わたしの話を聞いて、それでも疑念が晴れないという場合には、わたしも全面的に協力いたします。」

念を押すようにそう言われて、俺は不承不承でも頷かざるを得なくなつた。

あれ、なんだか妙だな。

こんな感じの人だっただけ？

いや、今日初めて会う人に、イメージが云々つてもヘンな話なんだけど。

「まず、ロボットと一口に言っても、製作するには技術が必要です。それ相応の。」

電子工学、バイオテクノロジー、生物学、DNA解析・・・ありとあらゆる技術を駆使して、現在のハイテク・ロボットは製造されているんです。・・・それらを支えるのは、天才クラスの科学者達。

ご存知でしょうが、こういう技術者ほど、国が厳重に警護をします。言い方を変えれば、管理している。そういう方々が、非合法の犯罪に加担することは在りえません。

・・・結論を述べますと、不可能です。」
断言されてしまった。

「たった一人の科学者が居れば作れるという代物ではありません、それぞれの専門分野が独立して創り出したパーツを組み合わせ、最先端のロボットは組み上げられてゆくわけで・・・」

目なら目を、ボイスはボイスを、頭脳は頭脳を・・・
それぞれが科学の最先端技術・・・確かに、裏社会だけで生産出来るはずはない、か・・・。

けど、そういう高度なメカを盗んで、人工皮膚を張り付けてあるだとか、他にも考えようはあると思う。

聞いたところでまた否定されてしまっただろうけど……。

「ご理解頂けましたか？ ……会話をするだけの能力を与えるだけで精一杯なのですよ、現状の科学力であっても。それが現実です。人間のように反射的に答えを返したり、ましてやジョークで笑えというのは土台から無理です。」

「……それをやらせようと思えば、国家クラスの巨大なコンピュータが必要になります。表の社会では総合ネットワークにライブラリが展開されており、それを利用するという方法が取られているようですが、裏社会となると、これを利用する事は不可能ですからね。今の科学でも、人間の脳を機械的に、完全な形で創り出す技術はまだないんです。」

「……それでも……、思い過ぎなんかじゃない、妹はすり替えられたんだ。」

無理をして絞り出さねばならないほど、俺の声は掠れてしまっていた……。

探偵……桑名さんは、呆れたように肩を竦める。

「世の中におかしな事が起きていると疑うなら、その前に、貴方自身の頭の中でも、おかしな事が起きているかも知れないと疑ってみませんか？」

探偵はにべもなく、そう締め括った。病院へ行け、ということか。そうだろう、普通は誰だってそう思うよな。

俺がオカシイんだろうか？

……それとも、世の中が狂っている？

妹の偽者……それは、俺の妄想だと？

解からない……。

第四章 第四話

病院に行くべきかどうかで真剣に悩み、結局、俺はどうにも決断出来ないまま約束の場所へ向かっていた。今日は、店長から指名された訪問の日だ。

到着した時には、店長は先に着いていたらしく俺を待っていた。

機械嫌いの店長は、なんともレトロな自転車という乗り物を引っ張り出してきたらしい。

道行く人々の誰もが珍しい品物に振り返っては視線を投げかけていく。

「さ、後ろ乗って。」

「え、大丈夫ですか？ 壊れるんじゃない？？」

こんな細いスチールで出来てるんじゃない、成人男子二人の体重を支えきれないんじゃないのかな。

「大丈夫だよ、ほんの数百年前までは皆普通に乗ってたんだから。」
「だけど、それってつまり数百年経ってるってことでしょう？」と、抗議しようとしたけど、無理やり手を引かれて後ろのスチール台を跨がされた。

ちよつと、まじで怖い、これ本当に大丈夫だろうか？

「じゃ、しっかり掴まってな。」

チリン、と高い鈴の音が響いて、店長は脚でペダルを漕いだ。俺は慌てて店長の背中にしがみ付く。

人力とか、本当に動くんだ、これ。信じられないものを見た気がする。

近隣の移動手段なら、だいたいはホバージェットだとか、モーター、手頃なものならボードなんか主流で、日常で自転車のような骨董品になどお目にかかる事もない。健康のためにランニングしている人くらいだ、自力で移動するなんてのは。もっと手近ならばいっそ

徒歩になるんだし。

どんな物にもモーターが付いていて、人力で動かすような移動手段はない。

まったく、店長には驚かされるのを通り越して呆れてしまうよ。

この一台が、どれほどのお宝だか、予測も出来やしない。

ほどなく店長の家に到着した俺は、その家の中で、見覚えのある人物を紹介された。

「よお、来たな。」

・・・誰だっけ？ 見覚えはあるものの、どこの誰かとかいう記憶はさっぱりだ。

「なるほどね、俺のことも綺麗さっぱり消されちゃったか。」
「なんの事だ？」

「じゃ、遼平くん。とりあえず、そこに座って楽にしててよ。」

「まー、任せろ。こういう事は慣れてる。」

店長と、見知らぬ男の二人が、なんだか得体の知れない機械を前にして、俺に椅子を勧めた。

なんだ、これ見よがしに配置されたこのキッチンエア。

居間のソファセットと比べて、明らかに場違いな・・・ちくはぐな家具だろ。

嫌な予感がする、けど、見知らぬ男ががちりと肩を掴んでいて、逃げるのは難しい状況になってしまっていた。店長に助けを求める視線を投げたけど、うんうん頷くばかりでまったくこちらの意図を察してくれない。

おい、ちよっと・・・、本当に大丈夫なのか？ 何をするつもりなんだ？

「いいから、座れ。らち明かないから。」

い、嫌だ、ちよっと・・・無理やり座らされた俺に、問答無用と奇妙なヘルメットが装着される。

「遼平くん。君は小細工されたんだけど、たぶん説明しても解からないだろうから、実力行使で行くからね。」
店長が物騒な言葉を投げた。楽にして、とか言われて、はいそうですか、なんて納得出来るか！
暴れた俺を、もう一人の見知らぬ男が静かにさせる。
鳩尾に強烈な一撃をもらって、俺は呻いてそのまま気絶した。

「う……、」

自分の声で、朧だった意識をはつきりと取り戻す。

ここは……え？ 店長の家か？

「お、気がついたか。どうだ、気分は？」

宮路が居る。怪我、治ったらしいな。

「……サイアク、だよ。なんか頭がガンガンするし。」

「そりゃそうだな、けっこうな電流流したからな。」

なんだって？ また無茶なことされたのか、俺。なんか、記憶がごちゃごちゃになってるけど。

後で落ち着いたら、記憶を整理しないとイケないな。

本当に……よってたかって無茶苦茶にしゃがって……。

俺はあの時の、あの青年を思い出していた。電脳空間で、俺と偽物の妹を救ってくれた、彼を。

でも、その後がいただけない。

俺の記憶を封印しやがったんだ、確かに聞いたからな。記憶を操作すると言ってた。

つまり、麻里子の誘拐に、アイツも関わっているってコトなんだ。

「あ！」

忘れてた、

「どした？」

のんびりと宮路が。

「今日、何日だ!？」

俺の問いかけに、怪訝そうな顔をして、そしてカレンダーを指差した。

・・・ロイド・タイトルは、終了していた。

第四章 第五話

「まあ、なんにせよ、おかえり。遼平くん。」

店長に、冗談と共に苦笑で迎えられて、俺は複雑な気分だった。

記憶を操作されるなんて・・・一体、俺の敵は何者なんだよ。

いや、現代社会に対する恐怖が、いまさらにふつつと湧き上がってくる。

俺のようなケースは稀なことなんかじゃないのかも知れない。あの時、彼は言ってたんだ、違法プログラムを作った人間を処分した、と。

そんな事が本当に可能だったなんて・・・彼は、一体、何者なんだ。

「あんな、遼平。」

俺の不安を聞いて、宮路が呆れたような顔をして俺を見た。

「今さら、何を驚いたり怖がったりしてんだよ？」

そのくらいの見当はずでに付けて動いてるもんだとばかり思ってたぜ。」

当たり前だ、つてのか・・・？

「まず、記憶の消去は無理だ。別の記憶を植えつけて、すり替える事は出来るらしいがな。」

お前の記憶も、上から蓋をされて封印されてたって言うほうが正しいな。

特殊な犯罪者とか、未成年の非行とか、大物犯罪者などの処置で、こういう手段はよく使われているんだぜ？

まあ、あまり一般に知られていない部分の情報だからな、お前が知らなくても無理はないかな。

で、裏社会でもやられっぱなしでは拙いんでな、対抗手段というものも、もちろんあるのさ。」

それが、さっきのヤツか。

テーブルに置きっ放しにされたヘルメットに視線を向ける。なんだ

か色んなコードが沢山付いていて、いかにも何かありそうな形をしている。なんだか焦げ臭いけど、シヨートしてるのかも知れないな。視線に気付いて、宮路がヘルメットを取る。

「封印された記憶をサルベージすんのさ。そういう専門の業者が、地下には居るんでな。」

地下街という世界もまた、何でもアリだな。

「お前も、記憶に蓋をされてたからな、さっき業者を呼んで処理してもらったのさ。覚えてないだろうけどな。」

それは記憶にない。詳しい話を聞くと、一部の記憶はどうしても狭間に落ち込んでしまい、思い出せないままだとか、解かったような解からないような説明をされた。

要は、もう帰ってしまったけど、もう一人ここに居たってことなんだろう？

ぜんぜん覚えていない。むかつく。

俺はついでに、店長に桑名さんがおかしかった事を話した。

どうやら二人は知り合いのようだったから、何か解かるかと思ってそうしたら、驚いたことに、宮路も含めて三人は学生時代からの友人だと聞かされた。

なんだか、コメディみたいな組み合わせだな。探偵と変人と犯罪者。宮路がしつこいから、どんな会話をしたかも詳しく聞かせてやった。

「そうか。・・・ヤツもやられたらしいな。まあ、しばらくは置いておくさ。面倒になる。」

こんな風に頼りがいのありそうな男だったかな、この宮路というヤツ。

「なんだよ、俺の顔になんか付いてるか？」

俺の気持ちを推測したのか、にやにやした顔で切り返された。

そっぴいば、腕。

酷い状態だったと思ったけど、大丈夫だったのかな？

「腕は？ どうなったんだ？」

誤魔化す意味も込めて、問いかけてみる。

「ん？ こうなった。」

ベキ、

ヘルメットが、ひしゃげた。

宮路の腕はロボットになっていた。服の下になってると解からないものなんだな。

だから皮の手袋を片方だけ付けてるのか。

その機械の腕を握ったり開いたりしながら、ヤツが事情を教えしてくれる。

「コイツは心配要らない、裏のルートのヤツだからな。表のどんなコントロールも受け付けないんだ。

内部だけで駆動・制御されているんでな。で、表面は外部の電波を全て遮断するようになってる。」

そうでなきゃ、裏の人間は安心して暮らせないからな、と宮路は笑う。凶悪な笑みで。

「遼平、さっき俺は記憶をすり替える事は出来ると言ったよな？」

「え、ああ。」

なんだ、蓋をすることすり替えるのでは、何か違うとも言うのか？

「たぶん、桑名のヤロウはそれを食らってるはずだ。ヤツの得た情報、核心に近かったはずだからな。

だから、人間そっくりのロボットを製造することなど不可能だ、なんて事を言いやがったんだらう。」

え、それって……。

でも、それじゃ、最初の頃に宮路が俺に言った言葉も嘘だったことにならないか？

不可能だ、って、お前だって言ったじゃないか。

「俺はラビリンスの住人だぜ？ 嘘つきに決まってるだらう。」

せせら笑いながら、宮路が返す。
解かってたけど、本当にム力つく野郎だな。

第四章 第六話

地下街で、俺は普段接している偽者に比べれば、随分とお粗末な出来のロボットにも会っている。

あれが限界だと桑名さんは言った。

その一方で、偽物達が偽物である証拠も・・・オーラを分析する機械だとかで、証明してくれたんだ。

矛盾するじゃないか。

けれど、その矛盾に対する回答を、宮路は答えてくれると言う。今度はちゃんと相手にしてくれるってワケか。

どういう風の吹き回しなんだかな。

勿体ぶった言い回しは、たぶんこの男の癖なんだろう。

「確かに地下街には、古いタイプのロボットしか居ないな。実用品に関しては、だがな。

でも、頭脳を本物にしちまえば、もう少しはマシなロボットも作れる。それはまあ、改造人間という分野になるけども。

それか、実物をコピーしたのなら、ほぼ本人と同じ思考形態の頭脳にする事が出来るだろう。

よく、ロボット医師やロボット刑事に应用される手法で、多くのサンプルデータを共有させて、個人のパーソナリティを補完しているらしい・・・。

生身の人間における、深層意識レベルってヤツだ。

今現在、共用リファレンスがどの程度に広がってるのかは知らないが・・・多くのロボットは電腦システムの一部を共有して、全体で一つのライブラリを形成している・・・巨大な深層意識を、な。

すべてのロボットの頭脳は、究極的には一つに統合されているってわけさ。ホストコンピュータでな。」

それは以前に聞いたことだ。だから、俺の行動は逐一監視され、店長や桑名さんも全てのロボットに対して警戒を怠らないんだろう？

裏社会の人間たちも。

宮路はロボットになった腕を伸ばしたり曲げたり、そして続ける。

「裏社会で作られるロボットには、その手法は使えない。・・・解かるだろ？」

個々に独立したパーソナリティを形成するには、ここらが限界ってことなのさ。この、俺の腕とかな。

仮に、これ以上のロボットを作ろうと思うなら・・・アクセス可能な深層意識体の存在、どうしてもホストコンピューターが要る。

言い換えるなら・・・政府の認定なくしては、そんな高度なロボットは製造出来ないって事なのさ。」

俺は、ようやく宮路の言おうとしている事を理解した。

・・・つまり？

妹は・・・麻里子は、政府公認の形で、誘拐された？

そんな・・・。

「お前の妹は、裏の関連で誘拐されたんじゃない、それだけは確かだぜ？」

宮路の言葉に、俺は観念して頷いた。だからあの時、この男は嘘を吐いたんだ。本当は事実を知っていて、それでも・・・俺が、いいカモになりそうだったから。

俺も、どこかで気付いていたんだ。考えないように、避けて通っていた。

一番怪しいのは、『政府』なのに。

「・・・実のところ、そういう話を噂には聞いていたんだよな。

政府絡みで拉致事件が起きているんじゃないか、ってな・・・。

噂は推測の域を出た試しがなくて、どういうワケか、それを追い掛けた連中はみんな記憶障害に罹って、興味を無くしてしまうらしい。否定論者に廻った者も数え切れない。

どうせ政府の陰謀だろうさ、表社会に住んでいるお前等は知らない

だろうが、ヤツ等はけっこうアクドイんだぜ？

数え上げればキリがないが、羅列して聞かせてやれば、俺達はまだ可愛く見えるってもんさ。

裏社会の事件を隠れ蓑にして、やつ等は自分のしている事を誤魔化しているからな……。

俺達から言わせれば、あんた等は本当にオメデタイよ。」
へえ、そうかい。

その情報の、逐一羅列つてのをここで聞かせてもらいたいところだな。

自棄になりかける俺の頭を、店長がぼんぼん、と叩く。まるで子供をあやすみたいに。

やめてくれよ。

思わず振り払ったけど、なんだろう、気持ちのささくれは少し収まった気がした。

巨大な『敵』が、姿を現す。

八方塞りなのか……、俺は、どうしたらいい？

「その関連を追い回していて、もっとも核心に近いところに居る奴を教えてやる。」

先に言っておくが、会うことは至難の業だ。覚悟して聞けよ。

サーペント・ヴァンズ、マスター・オブ・デスローダー。闇世界の、もっとも有名なバイヤーだ。」

サーペント・ヴァンズ。『翼持つ蛇』

……まさか、こんなところでその名が繋がるなんて……。

第四章 第七話

「そういえば、あんた。」

今度はこつちから疑問を提示することにした。

言われっ放しじゃ癩に障るからな。

この嚴重な包囲の中で、よく腕の挿げ替えなんて出来たものだと。多少の皮肉を込めて、ヤツに聞いた。

なにかカラクリがあるんだろう？ 俺の知らない秘密が。

「ああ、コレか。・・・俺もさすがに今回は万事休すかと思つてたさ。」

急に口調を軽くして、宮路は事の顛末を語りだした。

「斉藤のお陰、てところだな。まったく、コイツの機械嫌いは徹底してるぜ。」

斉藤・ああ、店長の名前か。そういえば以前に聞いた覚えもあったな。ほとんど店長で済ませてるけど。

「モーターサイクルを倉庫に保管してたんだよ、ICチップが一枚も搭載されていないタイプだ。旧文明の遺構ってヤツだな。エンジンの制御系統だけの超シンプルなメカは、どうあがいたって連中じゃハック出来やしない。・・・あとは、俺自身の生体シグナルを感じられる事を避けながら都心部へ進入するだけで良かった。熱探知を掻い潜るのは、さすがに大変だったぜ？」

え、じゃあ、一旦アジトへの帰還は果たしたつて事か。

でも、それじゃあなんで以前と同じ顔のままにしてるんだ？

「顔、変わってるだろうが。」

ちよつと怒つたような感じで返された。

変わった？ 解からないけど・・・

ああそう言えば二重になつたかな、耳の形もちよつと・・・え？ その程度なのか？

「一番大きく変わったのは、声と瞳だよ。声紋の一部と目はイミテ

「シヨンだ。」
義眼。

現代医療科学での義眼というのは、一種のカメラで、まったく通常通りに目の役割を果たす。

それだけで、警察の包囲を振り切って自由に動き回れるものなのか？
「表社会でのロボットミイ手術は政府にデータが渡る。でも、裏に廻ればデータどころか、遮断装置まで付いているから、改造人間であるかどうかの見分けすら付かなくなる。」

「それで、個人の識別手段は指紋・声紋・角膜と相場が決まっているからな、ちよいと弄るだけでその辺のロボット如きには判別付かなくなっちゃうんだよ。」

「逐一オーラを検出して微妙な部分を鑑定して・・・なんて手間掛けるわけにもいかんだろ？」と。

「人間の様に総合的判断つてのを、瞬時に行うことは出来ないのだと言う。それは、人間の脳の持つ高度なメカニズムだから、と。」

「機械と人間の違いってヤツさ。」

「けどな、遼平。これからは少しばかり動き辛くなるぜ。」

「脳空間へのアクセスは止めたほうがいい。あれはデータの塊だ、それに、どこまで脳みその中を解析されてるのは解からんからな。ヘタをすれば、お前の記憶は筒抜けって事かも知れん。」

「お前の記憶が戻っている事が知れば、奴等のことだ、今度は本格的に潰しに来るだろう。」

桑名みたいにな。」

「桑名さんは、元に戻せないのか？」

「あの人には随分お世話になったんだ、なんとかならないんだろうか。」
「いや、今は触らないほうがいいよ。宮、お前もネオ・トーキョーへ戻った方がいいな。」

「連中はたぶん、お前から伝わっていると思ってるぞ。」
宮路に代わって、店長が口を挟んでそう言った。」

「遼平くん、君も気をつけるんだ。連中は既に君の記憶が戻った場合も想定済みのはずだ。」

分析力に関しては、我々など歯が立たない相手なんだからね。」
「そうだ、奴等は一筋縄では行かない・・・この世界の、全てのデータにアクセスする権限を持っている。」

全ての機械に干渉することが出来るんだ。」

どんなロボットでも、意のままに操ることが出来ると見ている。」

第四章 第八話

「政府の中に、何かそういう派閥があるのかも知れない。現在は労働党と自由党の二党制だけど、どちらも内部は幾つもの派閥に分かれているからね。」

あるいは、妹さんは・・・そういった連中の政争に巻き込まれたのかも知れない。」

「一つは、重文地区の問題がある。」

労働党の一部議員たちは、コロニーに支持基盤があるからな。コロニー同士の問題が地上住民を巻き込んでいる事も考えられる。」
地下迷宮の次はコロニーかよ、どれだけ搜索範囲が広がっていくんだ。」

俺はずっと地球に住んでいる。だから、宇宙事情なんて、それこそ別世界の話なんだ。」

コロニーなんて、知るか。」

「遼平、今、人類は何億居るか知ってるか？」

知るわけないだろ。学校でも教わってないよ、そんなもの。」

100億を越えた時点で、もう学校教育では扱わなくなったと聞いたくらいだ。」

専門の学者と政治家くらいだろ、そんな数を気にしてるのは。」

俺がだんまりを決め込み、ふてくされた目で睨んでいると、宮路は苦笑いを浮かべた。」

「・・・数年前のデータだから、今はもっと増えているかも知れんけどな。おおよそ、200億から、300億の間と推定されている。なんせ、把握出来ない場所が多々あるかららしい。」

コロニーは太陽系の惑星ごとに展開し、それこそ星の数ほどに増えた。」

土星や木星という衛星には、地球などとは比べるべくもない莫大な資源が眠っていたからだ。」

展開する余地が生まれた人類社会は、発展と共に安定した。就職難と出口のない閉塞感からは開放され、爆発的に産業が増え続けているんだ。・・・宇宙空間ではな。」

お陰で地上はその煽りを受けて、凄まじいインフレに見舞われた。求人はあるても人そのものが居ないという状況に陥ったんだ。経済は廻らず、企業は宇宙へ出てゆかざるを得なくなった。

ドーナツ化現象だ。資源の枯渇した地球という星は、巨大な過疎地となり、捨てられた。

だからこそ、『再生計画』だろう。そんなもの、小学校で習う知識だ。

社会経済は、増加によってのみ安定したサイクルを維持出来る。

「コロナー同士は、今や一つの国家然としていてな。それぞれが自治権を持ち、議会を持って運営されている。だが、その一方で統一政府の存在があり、コロナーは本来の国家に所属して、この国家の発言でのみ統一政府内での影響力を示せるんだ。

何事も、中央政府・地球に置かれた首都であるステイツビル意向を通さない事には、コロナー独自での政治展開は許されない。特に、他国のコロナーなど、外交は厳しい制約を敷かれる。」

かつての地方政治の、そのままの拡大版という事でもないのか・・・学校で習った事とはずいぶん違う。

「日本はネオ・トーキョーを首都に、コロナーは月と火星を中心にざっと300個が所属する。

だが、それぞれは・・・既に、月面日本国だとか火星連邦日本国といった状態に近いんだ。

それを、地球に存在する『首都』が、統一政府の名の許に力づくで押さえ込んでいる。」

宇宙は、独立戦争の機運が高まっている。

・・・馬鹿な。

アメリカのコロニーが、ずいぶん昔にクーデターを起こしたとかいう話は聞いたけど・・・。

あれだつて、宗教がらみのテロリスト達で、コロニー住民の総意はまったく別だつたはずだ。

「色々な不満が積もりに積もっているのさ。」

確か、80年ほど前か・・・アメリカに属するコロニーの幾つかでクーデターが起きたのが契機だ。

死にかけて地球の面倒を見るのはご免だ、て理屈だよな、平たく言えば。

この動きが広がれば、間違いなく宇宙戦争に突入していただろう。だが、その機運は立ち消えちまった。

『地球再生計画』ってのはさ、コロニーと本国とを連帯させるための方がいい。スローガン。

だけど、それは非常な効果を発揮してな、今度は、コロニーで生まれた者が地球へ帰れないのはおかしい、という文句を生み出したのさ。」

・・・身勝手だ。

「そういうワケでだ、コロニーご用達のお偉い政治家先生の中には、重文地区の暗黙のルールをどうこうしようという勢力が居る、と言われているんだよ。」

了解。

なんとなくだけど、把握した。

宮路は今度ばかりは本当に、俺に協力しようという意味があるんだろう。

裏社会の人間だから、それを鵜呑みにするのは危険だけど・・・。

なんの目的で俺に協力するのは解からない、でも、確実に今一番頼れる相手はこの男だ。

第四章 第九話

「ロボットを宇宙へ連れ出す事に比べれば、人間一人を密かに何処かのコロニーへ送るなんてのは造作もない事だ。ただし、・・・いつかも話したよな？ 裏のルートで安全なのは地下のみ、宇宙空間はただっ広いもんだが、犯罪者が行き来するには危険に満ちている。」

コロニーは、その土台から全てが機械に制御されている。隅々に至るまでが、政府の管理下にあるってことか。それは確かに、隠れる余地もなさそうな話だよな。

「そして、コロニー内部で長期に渡る犯罪の隠蔽は不可能でな、連れ出したところですぐにバレる。」

だから、犯罪紛いの欲求を満たしたい者は、コロニーを出て地球に来るんだよ。

俺たちのような闇の住人は、危険を犯す必要もなく、ただ、やってくる獲物を待ち構えていればいい。

適当な餌でも用意してやって、な・・・。」

そんな話をテレビの番組で見た覚えがある。
何年くらい前だったろう、一部のコロニーは無法地帯と化していて、これと統一政府との間で密かに戦争状態が続いていた、って。

やっぱり独立運動がその直接の原因で、コメンテーターが酷い毒舌を披露していたっけな。

彼らが独立を求める理由は、搾取でもなく、民族でもなく、ただデタラメな感情による屁理屈だけだった、と・・・。

それは、一種のカルト。新興の恐ろしい宗教だ、と口汚く罵っていた。

確かにそうかも知れない、自らは地球が出自の民族だというのに、そこから独立したいと叫んで戦争も辞さない。聖戦を叫ぶ。通らぬ理屈に熱狂する。それは悪魔の崇拜にも近い。

誰もが望まぬコロニー戦争に突入したメカニズムを、これも何処かの番組が取り上げて解説した。

煽動されるコロニー住民たちは、最初は平和的な手段で運動に参加した。デモや抗議行動。

それはエスカレートし、過激派を呼び込み、革命という名の破壊者に育て上げてしまったんだ。

気づいた時には雁字搦めになっていた。

戦争は回避不能に見えたとし、人々は強制的に武器を握らされていた。愚かさ気付いた時にはもう遅かった。

敵を敵だと叫ぶ事を止めれば、自身が裏切り者と誹られる状況が出来るようになっていた。

右へ倣えというように、嫌々で進む人間の群れから独り脱出する事は出来なくなつたのだ、と。

人類が初めて経験する宇宙時代の戦争だったらしいけど・・・、その結果はお粗末だ。一度の武力衝突もなく、経済封鎖を一方的に受けただけで、コロニー側は降伏した。

もともとコロニー住民の大半は乗り気じゃなかったし、なにより、相手が強大すぎたんだ。

航路を閉鎖され、孤立無援。追い討ちをかけるように、電気系統が全てダウンした。コロニー全域の制御コンピュータがハックされ、生命維持の為の僅かな機能を残して、全ての機能が麻痺。

コロニーは活動を停止した。すべての光が消えた、と言う。

その当時にはすでに、統一政府や各国による電子ネットワークの管理は完了していたという事だ。

それでも、コロニー内部でパニックとなつた際に、多くの死者が出た。

小さな犯罪は人間の数だけ発生する、だが、大規模な犯罪シンジケ

ートなどの介在は不可能な場所、それが、機械で構築される居住空間『コロニー』だ。・・・機械のひしめく宇宙。

地球は、人間社会における、唯一の「暗黒世界」となった・・・。

「お利口さんからドロップアウトした俺たちのような者にとっては、『ここ』以外に住める場所はもうない。機械の作り出す光は、すべての闇を駆逐するからな。」
店長が遅ればせで淹れてくれた珈琲を啜り、宮路はいつにない弱音を吐いた。

「民衆は平和で豊かな生活を望み、それは叶えられた。でも、実現された理想の社会は、窮屈極まりない世界だった、てオチじゃないのかな。」

くつくつと笑いながら、まるで他人事のように店長が締めくくる。
「まあ、何にせよ、人間つてのは厄介なんだよ。我侂だ。平和になればなつたで、刺激が欲しいのなんのとぬかす。で、電腦世界の無法地帯が大盛況になる。

それでも飽き足りないキチガイが、地下迷宮へ迷い込む・・・てな。うえるかむ、だけだよ。」

なんだ、しみりしてたのはただのポーズか、いつものシニカルな苦笑が奴の口元に現れていた。

「俺にとっては、宇宙がどうだろうが、コロニーがドンパチ始めようが知った事じゃない。」

店長たち二人が呆れた顔で俺を見たけど、構うもんか。それが事実だ。

・・・真理子が無事かどうかだけが、俺の関心事だ。

「デス・ローダーに逢いたい。地下で行われる各種の賭博に係るんだらう？」

いや、『翼持つ蛇』の、実質のボスだと紹介されていたからな、会

うのが難しいのは解かっている。

なんとかならないか？ 宮路さん、何か手はないのか？」

本格的に、呆れた表情を見せて宮路は俺を見つめていた。

俺はマジだぞ。その目を見つめ返す。

「・・・まったく。「やれやれ、と首を振って、「相手が相手だ、

命の保障はしない。それでもいいんだな？」強い口調で言った。い

いよ、それにアンタが関わって命の保障があつた試しはない。

第四章 第十話

宮路は俺の予想を上回る大胆さで、列車を使ってネオ・トーキョーへと戻っていった。

機械社会の盲点というか・・・これではいくら政府が犯罪者撲滅と息巻いても空回るばかりだな。

俺も目を置いて、宮路の後を追う。地下で落ち合う約束はすでに取り付けてある。

・・・また騙されない事を祈るばかりだけど。

家では相変わらず、偽者の妹たちがローテーションで入れ替わる。だけど、ここ最近だろうか、偽者は二人に減っていた。最初に気付いた凶暴・・・というか、幼稚な面があったロボットが居なくなっていた。

どこへ行ったんだろうか、と、ふと気になったりもしたが、どうでもいい事だ。俺には関係ない。

そもそもコイツ等は、誘拐犯たちによって送り込まれたものなんだ、俺が気に掛ける謂れもない。

黙って家を出て、歩きながらで携帯を操作した。

連中には一応、知らせを送る。以前と変わらず、何より、黙って消えると何をしでかすか見当もつかないからな。極力、接触を避けるとなると、メールが一番安全だと思えただけだ。

手早く文章を打ち込み、妹の持つ携帯に送信・・・すぐに、返信メールが届いた。

『トーキョーへ行くつて、いきなりなんで?』
ちっ、面倒だな・・・。

そのまま空間タクシーを呼び出し、乗り込んで行き先を告げてから、再びメール編集に戻す。

『仕事の用事だ、明後日には帰る。』

送信するなり、電源をOFFにした。・・・これでメールは届かな

い。

以前と同じだ。記憶が戻っている事に勘付かれたとしても、仕方ない。誤魔化しの通じる相手じゃない。

宮路が指定した日時は、ロイド・タイトルの開催日当日だった。

ここからネオ・トーキョーへは、空間タクシーでも一時間ほどは掛かるだろう。

大きく深呼吸をして、俺は目を閉じた。

ネオ・トーキョー・ステイツビル・・・開催場所は DF - 46ゲートから地下に降りて、マスターブースを通り抜けた先だ。7号出口。そこは、たぶん、地下街の一角。

ステイツビルの真下で開催するなんて・・・大した組織だ。

時空ワープから抜けた。ここはもう首都圏の領空・・・厳戒空域だ。ステイツビルの巨大な容姿が見えた辺りから、タクシーは空中飛行モードに切り替わる。

近寄ってゆくと、ビルはあまりの巨大さ故に一面の壁となり、立ちあがる。

ゲートの一つが開かれ、タクシーを飲み込んだ。

・中は広すぎて目的地へ辿り着くまでが一苦労だ。案内の冊子を手にも、出来るだけ最短のコースで目指すDF - 46ゲートへ向かうが、それでも数時間が経過した。

広さだけでも、俺の住んでいる街が、それこそ数十個は軽く入るだけのスペースを誇る。このビル自体が巨大な街だから、開催地へ向かうだけでも大変なものだ。

ようやくゲートを抜け、マスターブースへ入った。

広くて閑散とした、剥き出しのパネルスチールの壁・・・倉庫として使用される他、イベントなどでも利用される空間だ。見回す限りのカラッポの場所、しばらく歩かないと抜けられない。パンフレットの見取り図を参照し、7号出口を探した。

入った場所とは反対側・・・かなり歩かされ、辿り付いた時には溜息が零れた。

7号出口を抜けた防火シャッターの影に、待ち合わせていた相手は居た。

宮路。

「よお、ずいぶん遅い到着だな。デス・ローダーに会うだけが目的だとか、寝ぼけた事はぬかすなよ？」

ここは完全に奴の膝元だ、もうお前の話も耳に入ってるかも知れねえからな。

奴の判断次第じゃ、生きて地上にや出られない。覚悟して来たんじやなかったのか。」

い、いきなり脅かすなよ。

俺はまだなんにもしてないだろ、なんでそんなピリピリしてるんだ。「客なら客らしくしとけ、ロイド・タイトル・観に来たって事になってるんだからな。」

ああ・・・、そうか、悪い。

アンタにも、相当にヤバい橋を渡らせたって事が。

「表で動く以上に厄介な相手だからな、少しばかり面倒な手順を踏むことになる。」

現在、この会場内に居るであろうデス・ローダーの居場所を、探るのだと宮路は言った。

その辺の人間を捕まえて問いただすというわけにもいかず、裏社会の情報屋を使うと。

「奴等は信用できる。ただ、身の危険が迫ると、面白いほど饒舌になっちまうからな、油断は禁物だ。」

組織の警戒を振り切った場所の情報を買うことになる。

奴の居場所は、開催日の当日、その時にならんと誰も知らないって話だからな。」

まったく用心深いにもほどがあるぜ、と宮路は吐き捨てるように告げた。

第四章 第十一話

この地下街には何人かの情報屋が居て、それぞれが出入りの組織を持っており、全体像を見るには各自に当たらねばならないと言つ。けれど、今回のような断片的情報でいいなら、情報屋の中でも顔と言われる連中に当たれば聞き出せるらしい。

一人目の情報屋は、外の通路にたむろする浮浪者に紛れていた。長くこの地下街に住んでいる事で多くのツテを掴んだ者が、自然、知り得た情報を売るようになったのだらう。

頬のあたりまで伸びた前髪で顔は見えない。白髪交じりの痩せた老人。

「Dブロック - 34号通路の、6番ゲート付近に座り込んでいるヤツが居るんだ。

いつも野球帽を被っているクマ髭の男がそうだ。サーペントの出入り業者と知己があるらしくてさ、かなり詳しく知ってるから、たぶん……」

男の言葉を信用して、宮路と共にそのゲートへと急いだ。

「34号通路なら、急がないと全試合が終わるな……仕方ねえ、奥の手を使うか。」

なにやらブツブツ言いながら、宮路は通路を歩いている。ここから遠いんだろうか？

通路を幾つか巡り、角を曲がり、立ち止まる。

「おい、居るんだろ!？」

宮路は薄汚い通路の、ゴミに埋もれた場所に向かって声を掛けた。ゴミの山がばらばらと崩れ、何かが動いた。

俺は一瞬、心臓が縮むほどに驚き、巨大ゴキブリと見間違えた人物を凝視する。

「……よお、宮……なんか用か? どした?」

のんびりした口調の黒ずくめの男が這い出してきた。すえた臭いが

鼻をつく。

「俺のホバー、出してくれ。急いでな。」

「なんだ？ 手入れの気配は・・・ないな？」

男は周囲を見回し、鼻をひくひくと鳴らす。

「急ぐんだ、早く。」

宮路の言葉に、男は無言でゴミ山へ戻った。

数分後、俺と宮路はジェットホバーに跨っている。

表社会では、モータースポーツ用として出回っている品で、専用のサーキットでしか使用してはいけない乗り物だ。バイクとスノーモータービルの中間くらいの形で、バイクのように地面を走ったり、スノーモータービルのように雪上を滑ることはない。空気抵抗を利用して、浮遊した機体を走らせる。

俺も数回なら乗った経験があるものの、こんな狭い場所で、という不安が先に立った。

「とっておき、だぜ？ しっかり掴まってるよ。」

エンジンが唸りを上げる。瞬間の、浮遊感。

一気にスピードが上がり、景色が流れた。

狭い通路を加速ぎみに右へ左へと突っ込んでゆく・・・俺はさすがに恐怖を感じ、固く目を閉ざした。

「まー、Dブロックは都心の反対側だからな！ ちんたら歩いてたんじゃない、日が暮れるぜ！」

そ、そういう事は先に言ってくれ・・・！

凄まじい風圧と加速のGに、俺は振り解かれそうになるのを必死に堪える。

目をつぶっているから、どこをどう進んだかなど解かるはずもない。どのくらい経った頃か、急ブレーキが掛かり、俺は思いきりヤツの背中につんのめった。

「・・・到着。」

・・・ひどい運転だ。

何所をどう走ったのかは知らないが、そうとう無茶な運転をしたに違いない。

俺は吐き気を覚え、通路の隅にうずくまった。その腕を引きずり上げて、宮路は構わずに歩き出す。

「Dプロックの34号通路、6番ゲートはこの先だ。ここからは徒歩だな、通路が狭過ぎる。」

彼の言葉に、俺は思わずホバーを振り返ってしまう。・・・置いておく気だろうか。

俺の思いに気付いたらしく、宮路はにやけた笑みを貼り付けた。

「大丈夫さ、俺のホバーは特注だから、他人にや扱えない。」

そう言う傍から浮浪者がそろりと機体に近寄って・・・手を触れたとたんに、驚いたように飛び上がって逃げた。

「な？ 識別コードが付いているから、他人が触ると電気が流れる。」なるほど、地下街に似合いのチューンナップだ。

狭い通路を少し行くと、階段に出くわす。ここを上がれば地上へ出るのだと教えられ・・・その段の中途くらいのところで、男が一人、煙草をくわえて座っていた。

宮路は階段の下から、服を探って取り出した煙草の箱を、その男に投げて遣す。

男はにや、と笑ってそれを受け取った。

「情報が欲しいのか、・・・表か、裏か、どっちだ？」

「裏だ。『蛇』の大将が何処にいるのか知りたい。」

「・・・会つにはどうすればいい？ こつちの坊主が情報を持つてる。」

俺が口を出そうとするのを宮路は手で制して、勝手に交渉を始める。小声で、「こいつは人見知りが激しいんだ、」と説明してくれた。

けど、情報って・・・俺は大した事は知らないんだけど、いいの？ そんな出任せを言っつて。

男は首を捻って考えているが、一向にこちらを見ない。・・・心当たりがないんだろうか。

宮路が俺の脇腹を肘で突付く。

何かと思っていると、小声でコインを要求された。

あの男は考えているフリで、金を要求していたらしい。

俺は、ここへ来るまでに用意していた古銭のパウチを取り出す。

電子マネーが支配的になる前に使われていた、紙の紙幣だ。五百円と書かれている。

けれど、俺が骨董屋で買った値段は100倍だ。

でも、たったの五万円で闇のブローカーを売るなんて・・・危険が解かってないんじゃないか？

複雑な心境の俺に、宮路は「気にすんな、」と吐き捨てて背を向けた。

他人のことなど構っていられない。それは解かっているんだけど。

何度か振り返りつつ、男の居た階段から遠ざかる。何事もなければいい、な。

来た時と同じに、荒すぎる運転で気分を悪くしつつ、元の場所へ戻った。

結局、会場へ辿り付いた時には、いい時間になっている。

階段を降りる前から、歓声がかすかに響いていて・・・それは、地下へ降りることに、大きなものへと変わった。

熱気、歓声、人の渦。暗い空間は最初に抜けた倉庫のブースと同じくらいの広さだろくに、人がひしめいていて、前が見えない。大きなエキシビジョン・テレビが複数台設置され、遠くて肉眼では見えないステージを映し出している。もう、試合は始まっていた。

第四章 第十二話

熱狂と、怒涛の歓声。

宮路の背中を見失いそうになりながら、俺は人を掻き分けて進んだ。腕が伸び、ヤツの傍まで引き摺られる。ロボットアームの力は恐怖だ。

「俺は先に済まさなきゃならん用事がある！ 試合が全て終わったから、中央のリング前で落ち合うぞ！」

え、何を言ってるのか、聞き取りにくい・・・中央のリング？

「また騙すんじゃないだろうな！？」

ヤツの耳を引っ張って怒鳴りつけてやったけど、もちろん本心じゃない。

ここまでの手間と危険を秤にかければ、ヤツが騙すつもりなどないのは明らかだし。

宮路は渋い顔をして、俺の額を指で弾いた。・・・でこピンされたのは学生以来だな。

黒い手袋が眼前に迫った時は心臓が縮み上がったが、ロボットの腕は加減の仕方も完璧で、俺は生きてヤツを見送った。

頭上のテレビはとても大きいもので、見上げた俺の視界をほぼ制するほどだ。他は視野に入らないほどの巨大スクリーン。それが、会場のあるここに配置されている。

全体の大きさは、とんでもないものだろう、きっと。

そこに観客がひしめいて・・・一体、何万人の人間が詰め込まれているんだ？

画面は解像度の高い、鮮明な映像を映し出す。

次の試合なのだろう、ロボットのレフェリーが対戦者二人の紹介を行っているところだった。

開催されているのは『ロイド・タイトル？』リングに立つ二人は、

ロボットだ。

「すいません！ これ、何試合目ですか!？」

声を張り上げ、前の男に問い掛けた。

「ああ!？ ……決勝戦、だよ!！」

返答に、俺は慌てて時計を見る。

あれだけ急いだのに、もう終わりかけだったのか。半日分の時刻が過ぎていた。

一際高い歓声。

黒光りの球体をしたボディのロボットは、腹の溝からノコギリ刃をせり出し、高速回転した。駒のように回転しながら、リングを縦横無尽に駆け廻る。

アナウンスが紹介を読み上げると、リング中央で瞬時に停止、両手を掲げた。

対するロボットが場外から跳躍してスポットライトの中央へ飛び降りる。細身でメリハリのあるボディで、どこか昆虫を思わせるフォルムだ。腕が4本ついている。

やはり、戦闘に特化した形を追及すると、人間とは掛け離れたフォルムに辿り着くのだろう。

頭部の黒い突起のような目が、ぐるりと360度の視界を確保する。対戦相手の黒い球体ロボは反対に、目と言えそうな部品は見当たらなかった。センサーで識別する方法と、音波で総合的に識別する方法とで、違いが出て来るのだろう。

試合そのものは、俺が想像していたものを遥に上回る迫力で、ぶつかりあう二体のロボットの動きは、人間同士の戦闘の比ではない。

……すごい……。素直な感嘆の息。

ふと、目を遣った先に会場整理に狩り出されたのだろう組織の人間を見つけた。

被り物をしているから、すぐに解かる。

下っ端に聞いてもラチが開かないのは当然としても、一応、当たる

だけ当たってみようか？
何かの情報が聞ければ、幸いだ。

人々でひしめく空間を、なんとか擦り抜けながら組織員の元へ近寄ってゆく。

男は何か思い出したのか、その場を離れ、俺とは逆の方向へと移動を始めた。

くそ……、追いつけない。

思う間に、俺は停滞の中に閉じ込められてしまい、もう一步も動けない状況に陥ってしまった。中継モニターのすぐ前。ここは人が密集している上に、絶対に動こうとしない。誰も彼もが上を向く。後ろへ下がろうとしても無駄だった。ぎゅうぎゅう詰めた。

仕方ない、試合が終了するまで待とう。

すべての試合行程が終了した後も、人々は興奮ぎみにざわめいていた。
リングにはまた誰かが上がる。

「今宵、開催されました『ロイド・タイトル?』、優勝者はコロンビオ!

制作に関わった、チーム・オートマチックの面々ともども、御登場下さい!!!」

優勝したロボットと製作者の面々が壇上に上がり、スポットライトに照らされると、割れんばかりの拍手。

代表者の挨拶がスピーカーから流れる間も、俺の前のカップルはしきりに喋り続けていた。

……男は、連れの女を相手にほとんど試合の間中、解説をしていたんだが。

その話題の中で、色々な話を聞くとはなしに聞いていた。

例えば、同じロボットを対戦させるゲームでも、タイトルはゼロを含めて3つの形式があり、ゼロと?は非公開、?だけが一般の、表

社会でも公開されるのだ、とか。

例の、生贄のようなセクサロイド破壊をデモンストレーションで行うのは、もっぱら、地下賭博用のゼロである事など。そして、マン・ファイトではさらに多くの区分があり、体重別、無制限、武器可、改造含、など・・・多くのセクションがあると云っていた。

俺が取ったチケットはロイド・タイトル？、宮路が今回入手してくれたのは、非公開のものだ。

「やっぱりさー、一番過激で面白いのは、マン・ファイトの『デス・ゲーム』だろうねー、」

男は無責任な声の調子で、そう言った。

「すごーい、あたし、観てみたいー！」

「ムリ、ムリ！ あんなトコ、行ったら、観客でも殺されるよ！」

問答無用のサバイバル・デス・マッチだからさ！ チーム対抗で、地下街をゲリラ戦で戦うんだぜ！

敵だけじゃない、バーサーカーまで出てくるフィールドだぜ！？

命が幾つあったって、足りないって！」

・・・おかしな論理だと首を捻りながら、男の言葉を聞く。

ゲリラ戦のフィールドを、観客も走り回るわけはあるまいし・・・危険がどう、という説明にはなっていないんじゃないのか？

「えー、でも優勝したら、すごい賞金もらえるんでしょお！？」

「そりゃあそうさ。一気に大金持ちだぜ。」

だけど、地下ファイトのトップレベルが一堂に介して戦うんだから、ケタ違いにハードだぜ？

まずは電腦ファイトや体重別・武器可・・・他の色んな試合で名を挙げたヤツが、チームにスカウトされたり、自分等でチーム作ったりするだろ？

で、さらにマン・ファイトの賞金なんかでどんどんボディ強化してくんだよ。

だいたい、五体満足で上に行くヤツなんか居やしない。満身創痍、

元の生身がどんだけ少ないかって事を自慢にしているような連中ばかりだぜ。サイバーコアを地で行くような世界さ！

金は二の次、自身の力と名誉を賭けて……ってヤツ等ばかりが頂点を目指す……浪漫だよな。」

まるで自身の事を語るようにそう言った男に、女が可愛ぶった品で寄り添う。

茶番だと思いつつ、ついつい、盗み聞いてしまっている俺も、そうとうだな。苦笑が漏れた。

確かに、いくら莫大な金が入るといっても、そこまでリスクが高いなら、金目当ての者など居ないだろう。

欲しいのは、榮譽……。『最強』というお墨付き、か。

ちよつと、優勝チームのリーダーのスピーチが終わった。自慢のメカ、最強の座を掴み取った自分達の作品にスポットが集中する。闘いを終えたそのロボットの表情が印象的だった……。誇らしく、満足げに、笑っているように見えた。

「コングラッチュレーション！ キング・オブ・キングス……！」
司会者の、高らかな称賛。怒涛の喝采。

彼等は最後に、とても誇らしく、両腕を天に掲げた。

第四章 第十三話

イベントに関する全ての事柄が終了。主催であるデスローダーの、閉会の挨拶はごく簡単なスピーチをロボットの司会が代行で読み上げただけだ。本人は結局最後まで姿を現さなかった。

巨大スクリーンが次々にブラックアウト。会場を照らすライトの半数が消える。

そうして、人々が後ろから順々に会場から流れ出てゆく。

俺は遅れて到着したにも関わらず、いつの間にも奥へと詰め込まれていて、なかなか身動きの取れる状態にはならない。カップルの男はまだ熱心に地下ファイトの解説を、半ば興味の失せた女に話し続けていた。

「・・・チーム対抗のサバイバル・ゲームが、言わば予選だな。

そこを抜け出したチームだけが、本選出場権を与えられる。予選フィールドのB3から、さらに地下へ降りるためのエレベーターのキーを集めるんだ。」

「やだあ！ 地下街って・・・B2より下は、何が起きるか知れないデッド・ゾーンじゃん！」

女は時折、自身が興味を引かれた時にだけ食いついて男の言葉に反応を返す。

動き出した人の波に逆らって、俺は二人の後ろへとへばりついた。本当に詳しいな、この男。

「俺のダチが出場した事あんだよ！」

参加チームが持つてるキー・カードを五枚集めると、エレベーターの扉が開くんだってさ。予選参加者の数で、決勝ラウンドの階は違っていて、最近はB5くらいが決勝の舞台だ。

参加者全員が体内にシグナル・ソケットを埋め込んでいて、倒されたり、ギブ・アップしたりすると、集計板のライトが消えるんだ。で、最後まで生き残ったチームが優勝ってことになんのか。

何千というチームがたった一つに絞られるまでゲームは続く・・・
ゲーム終了まで、1ヶ月くらい掛かる時もあるんだぜ？」

「ふーん・・・」

女の返答は、かなり素っ気無い。ルールやシステムなどは、彼女の興味ではないんだろう。

どういう計算かは知らないが、五枚のカードで三階分では、数が合わない。余り二枚はなんだ？

カードに細工でもしてあるとか？

残念ながら、男も気付かず話し続けているし、女はもう興味が失せていて、問い質すことをしてくれない。俺が直接聞くつてのもな。もどかしいけど今は解決策がない。後で調べるとして、諦めよう。

予選振り分けをカードに託すにしても、五枚集めるだけなのか。不正などは起きないのか？

他に何かあるんだろうけど。

「主催のマスター・オブ・デスローダーが、唯一、姿を見せるゲームだし、すごいぜ！？」

デスローダーのチーム、『サクセッション』は無敵だよ、無敵！」

デスローダー・・・ウェブにも載っていたな、その名前は。

地下ファイトを主催している闇のシンジケート、『サーペント・ヴァンズ』を牛耳るボスで、プロフィールのほとんどの欄が空白となっている人物。身体のほとんどを機械にした、改造人間。

「俺さあ、マッド・クインビーのファンなんだよな。」

デスローダー、マッド・クインビー、カレイドスコープ・・・超一流の地下ファイターさ。

一度でいいから、会ってみたいもんだよな。」

マッド・クインビーに、カレイドスコープ・・・か。後で調べてみるか。

平静を保とうとしているんだが、片頬に浮かぶ微笑を止められない。俺は、これからその人物に会うのだ。

それにしても、人間があまりに多いせいか、渋滞はいつこうに解消されない。

人込みは少しずつ・・・ほんの少しずつしか進まず、俺は気分が悪くなっている。

試合中は興奮で感じなかった事だが、今は状況が違う。

あんな田舎街に住んでいると、こんな風に鯨詰め状態になるなんて事はないから、本当に苦しい。

俺は堪らず、人の少ない方へと逃げてしまい、最終的には何も無い壁際へと追いやられてしまった。

中央リング付近の混雑も酷いもので、今からあの場所へ向かうと思つとうんざりした。

仕方ない、人々が空くのを待とう。宮路も、この状況なら先に行動したりはしないだろう。

床に座り込み、少しでも気分の回復を図る。時折、物珍しげな視線が頭上に注がれる。

吐き気がする・・・。確かに面白かったし、得るものは多大にあったのだけれど、とにかく疲れた。

突然、周囲がもう一段階暗くなった。

ライトが消されたのだろう。人々も少なくなり、会場内、あちこちに散乱するゴミが目につくようになる。

気分が悪い、動くのが億劫だ。うかうかすると、自棄の果てで、この場で横になってやるうか、という考えすら浮かぶ。座り込んだまま、しばらく逡巡した。

少しばかりうたた寝をしていたんだろうか。

「おい、遼平。」

肩を揺さぶる手の感覚に、急激に思考がクリアになる。

ん、ああ、あんたか。

「お前にとつちや、ここが中央になるのか？ え？」

怒るなよ。

にやにやしたのが悪かったのだろう、ヤツに拳骨で小突かれた。

第四章 第十四話

「話をついたぜ、これから奴に会う。」

宮路の説明は、手短だ。

「黙っていたけどな、奴等はお前と同じようにロボットの情報を探ってるんだ。」

有力情報に対してはけっこうな報奨金まで付けてる。きっと、お前が今置かれている状況ってヤツにも興味深々だろうぜ。表の社会には存在し得ないはずの『アンドロイドが存在する』という話なんだから。」

アンドロイド・・・ロボットの中でも特に人間に似せられた形態を持つ者をそう呼ぶ。ヒューマノイド、とも。

「俺の役目はここまで。ここから先は・・・連中に委ねられる。」

残念だが、俺はヤツに会うだけの資格がないんだそうだ。・・・すまんな。」

俺に対しては本当に申し訳ないという顔で、反面、組織に対しては腹が煮えくり返っている、・・・そういう、複雑な表情で宮路は俺の背を押した。

男が三人、客だと思っていたけどどうやら組織の構成員だったらしい。顔は、隠していない。

その意味するところに気付いて、背に冷たい感覚が這い上がる。俺は、殺されるかも、知れない。

男たちの前に押し出された。

「巧くやれ、なんとか味方に付けるんだ。そうすれば・・・道が開ける。」

連行されるような形で歩き出した俺に、宮路は最後にそう言った。

ブースを離れ、薄暗い通路を進んでいく。三人に囲まれる俺は、完全包围の中で逃げ道がない事を知らされる。油断のない男たち。

客の姿が無くなった途端、背後の一人が真後ろに回り、なにか固い物を胸の位置に押し当てる。

「・・・進め、」

思わず立ち止まった俺に、男は低い声でそう命令した。再び、暗い廊下を進み始める。

助けを求めようにも、ここは関係者用通路なのか、誰も通らない。

もし、今、いきなり撃たれたとしても、誰にも気付かれはしないだろう。

心臓が嫌な感じに痛む。

鼓動がやたらと耳についた。

「右へ曲がれ、」

男の言うままに細い通路を進んでゆく。網の目のように張り巡らされた細い通路は、まるで迷路だ。

どのくらい進んだか、男に止まるように命じられた場所は、両開きのドアの前だった。

「・・・この部屋の中に、ボスが居る。

死にたくないなら、ボスの言う事をしっかりと聞いておけ。」

ごくくり、と喉が鳴る。

ついに、対面だ・・・『翼持つ蛇』、闇世界で、もつとも有名な・・・。

ドアが開かれる。

俺を中へ突き飛ばして、男はそのままドアを閉ざした。

部屋へ放り込まれた俺は、不様に転がって、這いつくばったまま中を見回した。

暗い部屋・・・けれど、内部は広い。奥の方はライトの淡い光に照らされて、幾らかは明るいようだ。

そろりと立ち上がる。出来るだけ音を立てないように。物悲しい旋律が流れている。

ぼんやりと見える日溜りのような空間。黒いグランドピアノが置か

れていて、誰かが曲を演奏していた。

白……いや、銀色の髪か？ 真っ白にも見える頭髪の痩せた男が、熱心に鍵盤を叩いている。

陶醉したようにその身振りが大きくなり、やがて、両手で思いきり鍵盤を殴った。

その後は、また、興が冷めたように肩を落とし、項垂れて、気だるくキーを押す。

まるで、精神疾患の患者にしか見えない……。

声を掛けることを躊躇うほど、男は独特の空気を帯びて近寄り難い。俺の視線に気付いたのか、その男がこっちを向く。

無言の、でも、威圧的な視線。射抜かれるような。

俺は溢れてくる唾液を飲み下し、彼の傍へ一歩、踏み出した。……覚悟は出来てるんだ。

少しでも怯んだら、飲み込まれる。

ふと、ピアノの陰になる場所に置かれた椅子に気付いた。この部屋にはこの男一人かと思っていたが、椅子に腰掛けている誰か……もう一人、居たらしい。

ブロンズの肌。……まさか、と思う。

ボスと呼ばれた男も、俺の変化に気付いたらしく、眉を顰めた。

ブロンズの肌、赤い瞳、鉄灰色の髪。間違いない、彼だ。

俺の動揺に気付いて、デス・ローダーと呼ばれる組織のトップが口を開く。

「……彼に見覚えでも？」

「はい。俺が、捜していた人物です……！」

まさか、こんな場所で会えるなんて。そう思ったのも束の間……目の前に居る彼は、ぴくりとも動かない事に気付いた。瞬きもしない赤い瞳は、ただのガラス玉だ。

その表情も、微妙に違っていた。彼は、まるで生きた人間そのもの

だった。

彼とほぼ同じ等身の・・・ただの、人形。

俺の落胆に気付いて、デス・ローダーが含み笑いを浮かべた。

「・・・まさか、わたしと同じ思いをしている人間が居るとはね・・・

。。世界は狭い。

彼に出会うことが叶うなら、わたしは何所へでも行こう。彼と会っ

た経緯を、教えてくれたまえ。」

教えてくれ、と言いつつ、その口調は命令形だ。

俺に拒否権などない、と場の空気が語っている。

「わたしに見返りを与えるならば、わたしも君の望みを叶えよう・・・

」

た事例は、真理子の事柄についてだった。

偽者の、おそらくはロボットだろうと思っている妹が、なぜか電腦世界に現れた事実。

その事に、デスローダーはひどく興味を示した。

「残念ながら、彼等が何者なのかは、わたしにも解からない。．．．彼等は二人で一組の存在だ。

そして、多くの民衆は騙されているのだよ。アンドロイドは存在しない、とね。」

政府が噛んでいるなら、そうなんだろう。ロボット法は、機能していない。

おそらく、三原則すら無視したロボットも製造されている。人間が、それを、外せばいいだけだ。

「世間一般に言われているほどに、この世界の科学は遅れているのだろうか？

答えは『否』だ。
人間そっくりのロボット程度．．．君が知らないだけで、腐るほど作られている。」

おそらく、そうなんだろう。でも、なぜ、隠すんだ。

「隣人がロボットだと知らずに付き合っている人間は、とても多い。我々ですら、彼等と人間を区別するのは難しい。政府は、そうまでして民衆を監視したいのだろう。」

彼はそう言って、俺から視線を外し、またピアノに向き直った。

「．．．君は知りすぎたはずだ。
気をつけたまえ。．．．彼等は君を放っておいてはくれないだろう。」

貴方は？と問うと、彼は笑った。

立ち上がり、傍らの人形に手を触れる。ブロンドの肌を持つ、意思を持たぬ人形。

『彼』の、身代わり。

「彼に、阻まれた。真実はすべて、彼の守る扉の向こう側、だ。」

そうか・・・地下深くに隠れ住むのは、そういう理由か。

「ガーディアン・クロノス・・・わたしを魅了し、この世界に執着させる唯一の存在。」

デスローダーの奏でるピアノ曲は、威圧的で、物悲しく、憂鬱だ・・・。

「君に一つ、教えておいてあげよう。」

わたしがなぜ、地下ファイトなどを始めたか・・・。」

地下ファイトはデスローダーが始めた事だったのか？ いや、確か、地下ファイトの歴史は60年以上のはず。目の前の彼は、どう見ても30まで行ってないぞ。

いや、意味が違うのかも知れない。彼が参加を始めた理由、と取るべきか。

「君と同じく、わたしも彼を追っている。もう随分、長い間ね。」

その間に、幾度となく死の危険に晒され、仲間を失ってきた。その結果、現在のわたしの身体は90%が機械だよ。はははは。まさしく、デス・ロードだ。

それもこれも、わたしが『彼』を初めて見たのが、この、地下街の深層階で、だったからだな。

巨大な蛇を模した、あれは・・・戦闘ユニットだった。君が電脳空間で見た姿はどうだか知らん。だが、本当の彼は、巨大な戦闘用マシンだ。」

彼は・・・ヒューマノイドですらなかったのか。別の姿を電脳世界に構築していたと？

それは、まるで・・・

「人間とほぼ同じ？」知らず、呟いていた。

「彼は、謎に満ちた存在なのだ・・・。」

それは・・・とんでもない容量のプログラムである事を意味するはずだ。なにより、異なるフィールドに展開するというプログラムを、

政府が許可した事に・・・？

「どうやら君は、勘違いを起こしているようだ。コンピューター世界は、少しかりナメているね。途方もない大きさのデータベースが存在している事実は、それほどまでに認め難いものだろうか？」

「そうだ・・・コンピューター世界の大きさが、もはや宇宙規模の広がりを持つていたなら、可能となる。それはつまり、今までバラバラだと思われていた二つのコンピューター世界が一つであったり、多くの、独立形式と混ざっていたスペースが一つに統合されている可能性を指している。宇宙に展開する、全てのコロニーをも併合するような、巨大なネットワークの存在なら。」

あの時の、出来損ないだと思っていた『彼』が・・・ケタ外れな能力の所有者だという事実も、頷ける。

でも。

誰が、何のために・・・？

「・・・だからこそ、彼等は生まれたのだよ。秘密を保持するために。」

俺の疑問を正確に読みとって、デスローダーは面白そうに俺の顔を観察する。

人類にとって、脅威となる存在・・・事実が知れば、パニックは必死。

いつのまにか、人間を遥かに凌駕する存在となっていた。ロボット。

「真実に近付こうとする者を、彼等は徹底して排除してきた。」

君も必ず、狙われる。

「いっそ、このまま地下街に隠れていてはどうかね？」

親切・・・と、言えるかどうかは疑問だが、その誘いを辞退して、俺は首を横に振った。

「すり替えられた妹を取り戻したいんです、俺は表の世界に戻りません。」

「彼等は、どんな手段を用いるかも知れんぞ？」

それでも。俺は、逃げるわけには行かない。

「もしかしたら・・・俺も、『彼』に会うために、参加するかも知れませんが。」

死のゲームに。

デスローダーは、俺の無謀に呆れたように、大きな身振りで肩を竦めた。

最強と呼ばれる彼等でさえ、未だに会う事を許されない相手だ。そう簡単に行くなんて思わないさ。

でも、それしか道がないなら・・・だからこそ、彼も自らを「デス・ローダー」と称したはず。

ロボット達が、何かを画策している。だから、妹は攫われた。

そういう構図が、浮き上がってくるんだ。

クロノスと樹、偽者の三人・・・どこかで、必ず繋がっている。

第四章 第十五話（後書き）

遼平サイド、終了。

第五章 第一話

夢なの？ これ。

なんかフワフワする。あ、もしかして兄貴かな？ あたし、またソファで寝ちゃったんだ……。

「……ん、」

やけに眩しい光に照らされているような。

まぶたの裏側までチカチカする感じ。え？ なに？ あたしはうつすらと目を開く。

ライトがカンカンに照り付けて、やたらと眩しいじゃない。

てか、そんな事より……ここ、何処？

身体を起こして、周囲を見回してみる。……全然、身に覚えのない場所。

なんであたし、見知らぬベッドの中に居るの？ それも、全裸で。

え？ なに？ あたしの服は？ ここ、何処？

とりあえず掛けてあった毛布を……胸を隠したい、よいしょ。

「目が醒めたか？ 麻里子。」

ドアが開いたと思ったら、中に入ってきたヤツがそう言った。

そいつの腕には、あたしの着ていた服が、キッチンと畳まれて乗っている。

「……ちよ、」

具合の悪い事に、あたし、そいつの名を知ってるのよね。

……樹。

半年ほど前にネットで知り合って、この前の修学旅行で初めて顔を会わせた相手。

すごいハンサムさんで、トキメイタリもしたんだけど。

あたしのトキメキ、返せ。この誘拐犯。

この状況、もしかしなくてももしかして、なんでしょ。処女返せ、

女の敵。

泣きそうになつて睨んでるあたしを無視して、樹が近付いてくる。大声上げてやる。それ以上近寄つたら。

「随分よく眠っていたな、麻里子。起きたら話をしようと思つてたんだが・・・もう朝だから、俺は出勤する。」

帰つたら、ちゃんと麻里子の話も聞くから。「
言いたい事だけ言つて、樹はサイドテーブルに服とトレーを載せると、部屋を出て行つた。」

あたしは起き上がる事は起き上がったけど、どついつウケだか、足が全然動かなかつた。

よく解からないけど、ここつて、樹の家みたい。

だつて、あたしん家はこんなにモダンな内装じゃないもん。テレビで見るだけの世界よ、ココ。

窓の外の景色を参考にしようと思つたのに、見えるのは空ばかり。ここで、座つても何にも解決しないから、必死に両足を揉み解して、無理矢理に立ち上がった。

なんかヨロヨロする・・・！

必死になつて窓辺に寄つて、窓枠の下の方を見てみたけど、やっぱり見えるのは空だけ。

・・・なんなのよ、ここ！

・・・。。。。。。。

・・・仕方ないから、トレーに乗つてる朝ごはん食べよ。

・・・ん、けっこう美味しいじゃん。

あ、裸なんだつた、ご飯より先に着替えだよね、上考。

もぐもぐもぐ。

口は一生懸命動かしながら、視線は周囲を探ってます。

こんなの、兄貴に見られたら絶対怒られるよ。口づるさいんだから。

天井が高いの。

部屋はワンルーム形式で、ダイニングが向こうに見えるわ。ほんと、ドラマみたい。

こんなお洒落な部屋で暮らしたいって、そりゃ思ってたけど、誘拐犯のオマケは要らない。

なんとかして警察に連絡出来ないかな、電話とか・・なんで無いの？視線だけでざっと見回した室内に、電話とかインターホンの類は見えなかった。

真っ白の壁だけ。それも、ツルツルの。

樹が出てった時は、なんにもない壁が急に扉になったんだけど、よく解かんない。ココ。

どうしようかな。

もうじき、ご飯、食べ終えちゃうけど。

どうしよう。

なんだかよくわかんないけど、あたしをここへ運んだのは樹なのかな。

確か、樹はネオ・トーキョーに住んでたはずで・・・ヤバい、あたし、アイツの事何にも知らない。

なんでここに連れ込んだんだろ？ あたしが寝ちゃってて、ついついラブホに連れ込みました、とか？

そんな訳ないか、あたしは確か、学校終わって家に帰る途中だったんだもん。

そう・・・そこに、アイツが現われたんだ。急に。

それから・・・ええと？ あれ、そこから先の記憶がない。

目覚めたのがついさっきで。ここが何所かも解からないんだ。

ここって・・・。

ここって、まさか。

ネオ・トーキョー？

まだヨロヨロするけど、そうも言ってるらない。とにかく、助けを
呼ばなくちゃ！

あたし、なんだか、誘拐されたっぽいし！

幸い、樹は出掛けたみたいだし、今のうちに！

第五章 第二話

ドア、ドア。

どっかにドアがあるはず！ だって、樹は出てったもん！

壁は真っ白で、つるつるで・・・でも、よく見れば繋ぎ目があちこちにあるのよ、うん。

きつとこの繋ぎ目のどれかはドアのはず。

あ、見つけた。凹みがあるわ。これ、ドアの開閉スイッチでしょ？

ドラマでよく見る。

ドアの形に繋ぎ目もあるし。きつとこれよ。

ドア・・・て、オートロックでも内側からなら開くよね。

あれ？ なんで？

いくらカチカチいわせても、『コードエラー』の文字が出て、ドアは開かない。

うそ・・・！ 普通、内側から識別コードなんか見ないでしょ！？
くそう、ドアがダメなら、ベランダよ！

ベランダに出てみた。窓の隣にも開閉スイッチあったから、もしかしてと思ったんだ。

でも、外の景色見て、呆気に取られてしまった。

・・・なに？ ここ？

すごい展望。

ネオ・トーキョーの、修学旅行で泊まったホテルなんか比じゃない
くらいの、超高層階じゃん！

胡麻ツブくらいの大きさになって、ステイツビルの中にタクシーや
ら列車やらが吸い込まれてく。

すごい・・・。

あいつ、樹って何者なの？

なんかもお、気が抜けちゃって、逃げだそうとかは思えなくなった。

だって、きつと、ドアもなんも皆、ロック掛けられてるに決まってる。

樹が帰ってきたら、家に返してもらえるように頼んでみよう。それしかない。

こんなトコ・・・とても逃げだせっこない。

夕方になって樹が帰ってきた。

「ただいま、麻里子。」

腕に大きな荷物と、後ろに何人かを引き連れているけど、誰だろ？

あたしは暇すぎる一日を持って余して少々グロッキーな上に、とても不機嫌ですが、なにか。

ソファでグダグダしてるあたしを見て、樹は不思議そうに首を傾げてる。

「どうした？」

どうしたもこうしたも、アンタのせいでしょ。喋りたくない。

けど、樹の後ろからぞろぞろと姿を見せた六人を見て、不覚にも跳ね起きてしまった！

なに、ソイツ等！？

あたしとそつくりの顔したヤツが六人！ きもっ！！

「ああ、コイツ等の事は気にしなくていい。お前の身代わりをさせるために呼んだんだ。」

身代わり？ さっぱり意味がわかんない。

それって、あたしの代わりにソイツ等の誰かが、あたしの家に帰るって事・・・？

・・・じゃあ、あたしは？

啞然としてたら、六人が囲んでじろじろ見て、そこで樹は知らん顔で奥の部屋へ行っちゃった。

ヤだ・・・！ こんな人と一緒に居るなんて、気持ち悪い！！

慌てて樹の後を追うと、ソイツ等全員揃って、あたしの後ろから付いてくる。

ヤだ！ なんなの、コイツ等！？ アヒルの親子じゃん！！

「樹イ！！」

ドアが閉まる前に飛び込む。そっくりの仕種で六人も飛び込んできた。

樹にしがみついたら、あたしごと六人も次々に重なって腕を伸ばす。

ヘンな光景。

だけど、あたしは笑えない。

泣きべそ掻いてるあたしを見て、また樹は不思議そうな顔をした。コイツもなんか、「変」だって、今さらになって気付いた・・・。

第五章 第三話

「兄貴は絶対に騙されたりなんかしないわ。

あたしが偽者とすり替えられてる事くらい、すぐに気付くわよ。」
あたしは樹が入れてくれたジュースを飲みながら、自信満々でそう
言っただけだ。

ダイニングのカウンタ越しに、樹はさっき使ったジュースを片付
けてる。

樹が作ったミックスジュースは、少しバナナが多めで、オレンジと
リンゴの甘みが強くてシロップは控えてある。夕食のシチューでも
思ったんだけど、なんであたしの好み知ってんのかしら、この男っ
てば。

樹は無言で、だけどとても不機嫌な顔して、カウンターの向こうか
ら、あたしの前に焼きたてのクッキーを乗せたボールを遣した。

あたしの真似をして、偽者の三人もクッキーを横目でちらりと見る。
・・・ヘンな奴等。

そういえば、ここ数日で、六人の偽者は三人に減ったんだけど、あ
の三人は何所行ったんだろ？

「ねえ、樹。そう言えばさあ、なんか足りなくなっただけだよ、
あとの三人、何処に行ったの？」

六人もぞろぞろ付いて廻られちゃ、うっとおしんだけだよ。居な
けりや居ないで気に掛かるわけよ。

なんか適当な感じで聞いたからか、樹もあたしの方を見もしないで
料理作ってる。

さつきから、レンジの調子ばかり気にしてて。ダイヤルをぐりぐ
り弄ってた手が、あたしの言葉で、思い出したみたいに止まってさ。
「処分した。」

樹の返事は簡潔で、うっかり聞き逃しそうになった。

・・・処分？

あたしの表情に気付いて、樹の表情が変わった。言いつくろつように言葉を繋ぎ始める。

今さら、なんだけど・・・。

「ああ、つまり・・・。不必要な物とか、一応多めに用意してもそんなに必要ではなかった時には、処分するだろう？ それと同じで、つまり・・・、規格に満たない不良品とか、だから・・・、」
目が思いっきり泳いでるよ、樹。
まずい事を言った、と思っっているのが表情にもありありと浮かんでる。

今、樹は信じられない言葉を使った。

「処分」で、言った。・・・アイツ等、あたしにそっくりだったけど、人間だった、よね？

処分、って・・・？

そんな言葉、使う？ そもそも。

「つまり、必要分以外は、返品したり・・・リサイクルしたりするだろう？」

つまり、そういう事なんだ、」

何がそういう事なのか、ぜんぜん解かんないよ、樹。

あたし、本気で、この男の事、得体の知れない生物に見えて、怖くなった・・・。

「麻里子が気にする事じゃないんだ、そのうち全員居なくなるから。」

「そんなん聞いてないよ！ 居なくなるってなに？」

あたしの身代わりとか言ったけど、どうして六人も要るってのよ！
？」

あたしが怒鳴ると、樹は困った顔をして、偽者たちを見回した。

「・・・最終的には一人に絞るから。麻里子は気にしなくていいんだ。」

なによ、それっ！？ 答えになつてないじゃんか！！

それ以上、なにを問い詰めても無駄だと悟ったわ。

樹には、あたしの質問の意味が解かってなかった。処分、と言ったのは間違いだって、そう言うと思つてたのに。訂正する言葉は最後まで聞けなかった。偽者たちも、首を傾げるばかりで全然通じない。居なくなった三人は、どうなったのって聞いているんじゃない・・・！あたしの頭に浮かんだ、恐ろしい想像を消し去つてよ、殺したわけじゃないんでしょ？

あんな・・・あたしそっくりだったけど、人間だったじゃない、普通に暮らしてたじゃん、皆。

なんでそんな、当たり前前、みたいな顔してんのよ、アンタ達。そもそもコイツ等、なんなのよ！？

思い切つて偽者の一人の腕を捕まえて、握つてみたけど、普通の腕よ。

筋肉も、肌も、毛穴に産毛まで・・・！

ああ、気色悪い！！

鏡みために、あたしが一つの部屋に4人も居る！オカシクなりそう。

・・・また一人、減った。

正確にはこれで三人になった、んだけど。

あたしが三人消えたと思つたのは、間違いで、一人は常にあたしの家に行つていたらしいわ。

兄貴はまだ気付いていないのか、樹も偽者も、何も言わない！

残つたのは、それぞれで、4号、5号、6号、と呼び合っている。

・・・あいつら、名前、ないのかな？

そんで、あいつら・・・仲間が居なくなったのに、なんで平然としてるんだろ・・・。

第五章 第四話

白い部屋。つるつるの壁でモダンな感じ。

見回しても、なんにもない、って感じで殺風景な部屋。

テレビを点けたり、冷蔵庫を漁ってチンして食べたり、ベランダで展望を眺めたり、そういう事は自由にしておかった。広いダイニングは好きに行き来していいけど、玄関に通じるドアとその隣のドアは開かない。なんか、あたしには見せたくないモノがあるらしい。物置だつて言つてたけど。

こないだドサクサで飛び込んで以来、樹はこの部屋を嚴重にロックしてしまつた。

ワンルームだと思つてたけど、開かずの間が幾つかあるみたい。

段差が間仕切りみたいな感じ？ ベッドルームはお洒落でほんと、ドラマのセットみたい。

樹は、気が利くのか利かないのか、そういう点には無頓着な男で、あたしはヤツと一緒にここで寝るわけよ。最初、絶対なんかされた！と思つたけど、なんにもしなかつたみたいで、それも謎。

よく解かんない。今でも、潜り込んできたと思つたら、三秒で寝息立ててる。

あたし、女としての色気ないですか？ そーですか、て、その気になられても困るんだけどさ。

なんか無性に腹が立って、一生懸命に背中やツの背中を押して、ベッドから落としてやろうと努力中。

ああ、そうそう。

最初の日、樹が抱えてた大荷物、あれ、あたしの生活用品でした。可愛いパジャマが入つてて、お気に入りになった。何度も着るから偽者も真似するようになって。

うんしょ、と押したらちよつとだけ樹が場所を譲る。

うんしょ、うんしょ、で。

どさつ、て派手な音がして樹が落ちた。

起きないんだ、この男。根性あるじゃん。

眉間に皺寄せちゃって。

しゃがみ込んで樹の顔色を観察してたら、いつの間にか偽者二人も傍に来て覗き込んだ。

二人はベッドの横にマットを直接敷いた布団で寝てて、要するにあたしたち四人で固まって暮らしてる。

昼間もこんな感じ。

あたしがウロウロして、それをこの二人がじーっと目で追ってる。

床に座り込んだまま。

あんまり気にしない事にしたわ。だって、話しかけても会話にならないし。

だいたいコイツ等、あたしと話をしたいか思ってたなさそうだし。

消えた三人のことは今も胸に引っかけてるけど・・・考えたら憂鬱になるから止める。

まあ、それはそれで、おいといて。

あたしは外部から助けが来るのを待ってたんだけど、無駄っぽいから止める事にした。

自力でなんとかしないと、本当に偽者とすり替えられてしまう。

もちろん、兄貴を信じてないわけじゃないけど・・・やっぱり、自分でも努力はしてみようと思うのよ。うん。

樹がようやく目を覚ました。

床が堅くて寝てられなくなったかな？

「・・・床。」

寝言にしても、それはない。

確認しなかったって、ベッドから落ちたくらいは気付くでしょ、普通。ベッドに潜り込んで、もう一度寝なおした。樹がどうしたかなんて知らない。

明日、樹が出勤したら、考え付いたプランを実行してみるつもり。

第五章 第五話

朝ごはんを食べながら、昨日考えた脱出プランを念入りにシュミレート。

ベランダから見下ろした風景は眩暈がするほどの高さだったけど、昨日確認してみたら、それぞれの階で段差があったわけよ。

脚が竦むほど怖かったけど、下さえ見なきゃ大丈夫。・・・きつとあんまり高すぎると、実感的に麻痺するってゆーかさ。

とりあえず、下の階には降りれそうな感じだったし、降りてしまえば何とかなるわようん。

下の階の住民に助けを求めて、そこで警察に連絡してもらおうんだ。樹はさつき出ていった。

偽者二人はあたしと同じ仕種で食事中。

・・・問題は、コイツ等、よね。

でも、まあ、付いて来たところでもなんないしね。下の人に証拠を見せ付けるよーなモンよ。

ベランダに出てみた。・・・うーん・・・、ムリ？

あ、あそこの出っ張りにロープかなんか引っ掛ければ、その下の階に降りられるんじゃない？

ここから、なんかを下ろして・・・あ、カーテンとかシーツを破いて、ロープみたいにして！

よくテレビなんかで見るじゃん！ あれ、やってみよう！

出来るだけ長い方がいいよね・・・、あちこち引っ掻き回して、ハサミやらカーテンやら、用意して。

偽者が二人、じーつとあたしを見てるけど、無視。

どうせコイツ等、デクの棒みたいに、黙ってじっとしてるだけだもん。

よし、出来た！

後はこれをベランダの手摺りに括り付けて・・・と。

なんかスパイ映画みたいじゃん？ こういうシーン、よく見るよね。えへへ、実は怖いから気を紛らわしてマス。下は見ない、見ない・・・！

よし、いい感じ・・・！ もう少し・・・、もう少しで、足が届く・・・、

もう、少しなんだけど・・・！ ええい、ここで降りちゃえ！

ずるずるっ、て壁を滑って、あたしはなんとか第一目標の出っ張りにまで辿り付いた。

着地！

やりました、あたし！ ありがとう、あたし！

あ・・・、続きのロープ。

そうだった、続きのロープにはさっきのヤツを使う予定だったんだ・・・！

ほら、テレビでよくやってるみたいに、ちょちょいっとやったら解けてさ。

ヤバイ！

逃げられないじゃん！

下を覗いてみたら、そうとうな高さに見えた。やだ、今さらだけど脚が竦む。

この下の階までがまた、高い。無理、無理、こんなの、絶対無理。落ちたら・・・、無事じゃあ済まないんだろうな。

仕方ない・・・諦めて助けてもらおう。

上を向いたら、偽者が二人顔を覗かせてる。ほんと、何考えてんのか、さっぱり解かんない。

「たすけてー！！」

叫んでみたけど、アイツ等って馬鹿なのかしら。首を傾げて顔を見合わせるばかりでさ。

助けてって、叫んでんでんじよ！ 樹を呼ぶなりなんなりしてよお！

そのうちに、二人揃って顔が見えなくなつて・・・どっか行きやがった！！ がーん！！

風が吹くたびに、ぐらぐら揺れる。ても、風ってほどの風でもないはずなんだけど、そよそよって来られるだけで、もう怖い！

・・・立ってなんか居られないから、座り込んで必死にしがみ付く。そんで、大声で「たすけてー！」って、マヌケに叫んだ。

樹のヤツ、あたしが居なくなつた事に気付かないの？ もう、泣きそう。

ベランダに人影。

ひよい、って樹が顔を出した。

「麻里子！？ なにやってるー！！」
た、助かったあ・・・！

樹は、ベランダに身を乗り出した。

アブナイって！ あんたまで落ちたらシャレんならないでしょー！
あたしが慌てるのと同時くらいで、樹の背中から羽が生えた！

羽・・・ってか、翼？ なに、あんた・・・人間じゃないの・・・？
光がキラキラって背中に集中したと思つたら、すーっと機械っぽい翼が実体化して。

ばっさばっさ、って、いとも簡単にあたしの傍に来て、ひよい、って、あたしの後ろ襟を掴んだ。

・・・、首が締まるっ、

もがいたら気付いて、今度は腕の中に抱きかかえられた。

「危ないだろう、落ちたら怪我するぞ。」

あたしが何をしていたのかは、一切無視なワケね。それとも、本気で解かつてない、とか？

ベランダからは、あたしの偽者が仲良く見物してやがってさ。

目をきらきらさせて、わくわくしてますって顔してた。

そんなに珍しかったの。ふーん。あつたま来るわ。

残りの一人は兄貴の傍であたしのフリしてんだろうな。今日は5号が居ない。

で、部屋に戻された時に誘拐犯が言いやがったわよ。

保護フィールドが展開しているけど、落ちたらそれなりに怪我をする、だって。

第五章 第六話

よおーし。・・・今度はよく考えてから、行動しないとね。

え？ もちろん、懲りてませんけど、なにか？

樹はさつき出掛けてったわ。それで、ここ数日でなんとなく解かった事があるの。

あの偽者二人に見られたらアウトなのよ。なんとかアイツ等の目を誤魔化して、あたしがこの部屋に居るように思わせなげや。

今、あたしはベッドに潜り込んでるんだから、考えようによっちゃ、ラッキーだぞ。

ずーっと寝てます、って思わせとくのよ。どうせアイツ等、近くまでは見に来ないから。

ええと・・・部屋に、監視カメラなんかがありそうよね。どっかに・・・

アレだ！ いつも樹が付けっ放しでいるパソコン！ 絶対、アヤシイ！

インターネットに繋がうとしても、いつもエラーであたしは使えない。けど、樹はそれを付けっぱでいるのよ、なぜか！

あたしはベッドから跳ね起きて、まずはパソコンの上から毛布を被せてやった。

毛布はもう一枚、樹の分があるから、今度はそれを被って寝たフリをして。

案の定、何事かと思った偽者が近寄ってきたわ。

「・・・なによ。電源わかんないから被せたのよ、チカチカしてやなの。」

やっぱ、あのパソコンであたしのこと、監視してやがったのよ。だから、見に来なくて良かったんだ。

偽者二人は顔を見合わせて、それから、一人が電気のコードを引き抜いた。

「・・・麻里子、」

あれ？ コイツ等、あたしに話しかけたの、初めてよね・・・。
あたしが毛布から顔を出すと、戸惑ったみたいな表情の一人と目が
会った。

「どうして、急にチカチカしたの？ 今まで、そんな事なかったの
に・・・。」

あ・・・う、そつか、そう来るか。

コイツ等、あたしのこと、いつちよ前に疑ってたのかな・・・？

「ん・・・、今までは・・・ホラ、樹が居たじゃん。」

だから、気になんなかったのよ。一人だと、なんか変なモノとか映
りそうだから、ヤなの。」

そう、幽霊とか映ったら嫌じゃん。

ほんとにそんな事、ぜんぜんないんだけど、そういう事にしようと
ら、パソコンを毛布でぐるぐる巻きにした理由にもなるんじゃない？

「・・・樹が居たら、怖くないの？ なんて？」

あたしが自分の作った言い訳に納得してんのに、偽者・・・たぶん6
号、は納得しない。

食い下がるなあ・・・。

「樹は頼りになるし・・・。なんだかんだ言っても、あたしのこと、
守ってくれるでしょ？ だから。」

そうなんだ。樹のヤツ、本当のところは何を考えてんのか、全然ワ
ケ解かないんだけど・・・頼りにはなる男なのよね。この二人よ
りはよほど信用出来るし。

「・・・なんで？」

まだ言うか。

う~~~~っ、なんで、なんでって、そんなん普通は解かるでしょっ。

「だから・・・、あたしは樹に好意持つてるから、信じれるのっ！」

「樹は麻里子を誘拐したのに？」

そりゃ、普通は誘拐犯なんか好きにならないわよ！

けど、樹は別に、あたしに実害加えたりしてないでしょ!？

「樹がなに考えてるかなんか、知らないわよ！　けど、あたしは別に、樹は嫌いじゃないのっ！」

「・・・なんで？」

もう、知らない！　相手すんのヤメた！

これ見よがしに毛布被ってシカトしてやった。さっさとどっか行け、アンタ達！

あたしの返答を待っていたらしい6号は、毛布ごしにあたしを揺さぶって。それでもあたしが起きないもんだから、溜息をついて向こうへ行つた。定位置のソファ横の床。

5号はそういう事には全然興味がないから、さっさと戻ってる。

この頃は、三人居る偽者の違いが、なんとなく解かり始めてきてた。

今日は5号と6号だから、けっこうイイ感じに解かり易い。

一口で言うなら、5号は優等生、6号は甘えたで、4号は乱暴者。

今日は、時たま突拍子もない事をする4号が居ない分、予測は立てやすいんだよね。絶好の脱出日和ですよ。

さてと、アイツ等をやり過ぎしたら、次に掛かるわ。

謎の小部屋が幾つかあるんだけど、ベランダを仕切る壁の向こう側にまだ続きがあるの、見えちゃったんだ、こないだ失敗した時に。

だから、壁を越えて、隣の部屋からなんとかする。

へタなことしたら、バレちゃうしね。

部屋の上部にはけっこう多くの通風孔があつて、銀色のトレーみたいなのが等間隔で並んでるの。

きつと、小部屋にもあるはず。

衣類を何着か丸めて、人が寝てるみたいに見えるように毛布を膨らませといたの。これで、しばらくの間はアイツ等の目を誤魔化せると思う。

後は・・・ベランダの仕切りを乗り越えれば、例の小部屋へ侵入出

来るってワケ。

で、隣の通風孔を伝って、外へ出るのよ。

あつたまयीー！

では、さっそく・・・よいしょ。

無事、着地！

ちよるまかしといたプラスドライバーが、やっとお出ましですよー！。

ふっ、やっとオレサマの出番か・・・てね。

これで通風孔の蓋を外して・・・と、あ、蓋を落とすと思ったらバレルわね・・・中に入れとこ。

よっし！ 前進！

第五章 第七話

えっほ、えっほ、

・・・このまま進んでいいのかな？

どっかに出るのかな、ほんとに。

あ、行き止まり？

いや、左右に別れてただけか・・・びっくりした。

んーと、どっちに行こうかな？

よし、こっち。ほとんど勘で、左を選ぶ。

そんで、どんどん進んでく。別にアテもないし、めくら滅法に進んでるだけなんだけど。

ふと、このまま通風孔の中で迷子になったらどうなるんだろう、なんて考えがよぎる。

・・・ミイラになるまで、誰にも発見されない、なんて・・・まさか、ね・・・。

ヤバイよ！ どっか、出口ないの！？ 出口！！

樹の部屋はあちこちに通風孔あったじゃん！ てつきり、あんな風に色んなトコに通じてると思ってた！

なんで、どこまで行っても暗闇なのよ！ どうなってんの！？

必死になって匍匐前進状態で這ってたら、ようやく、前方に光が見えた！

やった・・・！ 助かった・・・！！ うえーん・・・！！

あたし、本気で泣きそうになりながら、光の傍へ寄ってった。

・・・いや、ちょっと待って。

ここが出口だとは限らない？ 間違っつて、とんでもない場所に出るかも！

ちゃんと確認してみなくちゃ・・・、どこに出たんだろ？

腹這いで進むあたしの、ちょうど床になる感じで格子になった蓋か

ら光が漏れてる。

用心しないとね……。誰かに見つかったとして、それが樹の仲間である可能性とかもあるし。

光の、すぐ傍にまで這ってった。

そつと、覗きこんでみる。

白い廊下が見えるわ。やっぱり樹の部屋みたいに真っ白でツルツルの壁で。

壁ばっかり。

人は通らなさそうだし、降りてみようかな。

……。んしょ。

えーと、ドライバーは左手に持って。格子は案外荒めで、あたしの手首くらい入っちゃう。

そんで左手のドライバーを右手に持ち替えて。

ネジを探って、1個ずつ外した。

ガシャン！なんて、派手な音立てて蓋が落下して、思っきり焦った！やだあ、手首に引っかかる予定だったのにい。

誰も来ないでしょうね……。ドキドキ。

続いてあたしも落下。ドサッ。

いたた……。着地失敗してケツ打った……

ん~~~~と。……。ここ、何所？

ぐるっと見回したかんじ、出入り口になりそーなのは、突き当たりのドア1個。

とりあえず、ドアを開けて出てみるっきゃないかな？

用心、用心……。そろそろ、とドアの開閉ボタンに触れる。ピッ、て。

そしたら音はないものの、両開きで全開になっちゃって。

慌てて壁にへばりついたわよ、隠れたつもりんだけど……。無理？うう、ちょこつとだけ開いてくれるだけで良かったのに。

誰にも見られてませんように。祈りながら部屋の中を覗いてみた。

う・・・わ。

なんたる、広い場所。研究所かな、あたしが居たのは通路みたいなトコだったらしくて、中央の大部屋・・・てか、ドームみたいな場所は見上げないと天井がわかんないくらい。

そこに、ドデカイ機械がドーンって置かれてて、低い唸りを響かせてる。

・・・ここって、何所？

機械の周りには人がいっぱい居て、なんかやってるっぽい。皆、白衣の人。

そ、そうだ！ あの人達に助けてもらおう！

特に、あそこのおじいさん、優しそうで良い人そうだし！

駆け出したあたしの視界の隅っこに、見覚えのある長身の男が・・・
げ。

急ブレーキでUターンしようとして、そのまま床でスリップ。

くるーって廻って、床と天井が交互に見えた。

うわ、すごい、あたし。ウルトラCよね。

二回点半くらいで床に激突するところを、樹がキャッチした。

心臓はバクバクいつてる。ナイス、樹！

死ぬかと思っただわ、さすがに。

「麻里子・・・」

もしかしなくても怒ってるよね、その声。

「ゴメン、」

ふう、てため息吐いて。

「毎日、毎日、本当に飽きないな。」

いい加減諦めろ、とか、そういう事が言いたいんでしょ。おあいにく様。

そんなに簡単に諦めるようには躰けられてませんから。兄貴のスパ

ルタ知らないでしょ。

第五章 第八話

樹に手を引かれて、とぼとぼと、部屋へ連れ戻される。

振り切つて、また逃げたとして。たぶん、また、掴まって連れ戻されるだけなんだろうな。

「・・・麻里子、俺と居るのはそんなに嫌か？」

前を歩く樹が、急にそんな事を言い出して、あたしは顔を上げる。いきなり何を言い出すのよ、コイツつてば。

「今なら、まだ間に合うんだ・・・、お前が、何も知らない今なら。正直に教えてくれ、麻里子。・・・俺の事が、嫌いなのか？」

「な・・・、何言つてんのか、ぜんぜん解かんないよ！」
それより痛いよ。

強く手を握られて、痛くて、あたしは樹の手を振り解こうとした。しっかりとあたしの手を掴んでいた樹の手が、急に外れた。樹はそんなつもりじゃなかったんだ、外れた手を見て、驚きを隠せない。自身の手を、びっくりしたままで、じっと見つめてる。

そーゆートコが、なんかすごく不自然だって、この男は気付いてないんだ・・・。

あんなだけ暴れて手を振り回せば、外れる事だってあるでしょ。なのに、まるで予定になかった事みたいにさ。

些細な事が、あの3人や樹には、ひどく重大な事になる。

「・・・あたしは、ただ、家に帰りたいだけなのよ、樹。」

あたしが話を振ると、はっとしてこっちを見て。
「なぜ？」

身代わりは用意したし、誰にも迷惑は掛からない。

一生を縛るつもりはないし、しばらくの間、傍に居て欲しいだけなんだ。なのにどうして戻りたがるんだ？」

どうしてつたつて・・・。

「それを聞きたいのはあたしの方よ、樹。」

どうして、あたしを攫ってこなきゃいけなかったの？」

自分の質問には答えさせようとするくせに、あたしの質問になると勝手にダンマリで。

答えられないのは、なんでなの？

あの3人が、「作り物」だとして。やつぱり・・・樹も、「作り物」なんだろうか。

あたしの手を掴み直して、また歩き始める樹。動揺を抑えきれてない。いつもと違う。

「帰りたいのか・・・、麻里子。」

そんな寂しそうな顔して、悲しそうな声出すな。卑怯じゃんか。

なんだか、あたしがあんなのことを捨てるみたいに感じて、罪悪感とか感じちゃうでしょ。

そりゃあ、樹の作るホットケーキとか、クッキーとか・・・好きだけど。

だけど、たった一人の兄貴を放つといて、呑気になんてしてられないわよ。

心配なのよ。あたしの居場所が、アイツ等に取りられちゃうんじゃないか、って。

樹の傍も、本音を言えば、相当居心地イイんだけどさ・・・。

色んな事を考えて歩いてたら、また、樹が喋り出した。

「・・・麻里子、そんなに帰りたいなら・・・帰してやろうか？」

「え？」

うそ、一瞬、耳を疑った。

だって、今まで、どんだけ帰りたいって言っても、無視だったじゃない。

信じらんない・・・！

あたしが呆然としてたら、樹は同じ意味の言葉をもう一回繰り返した。

「・・・帰るか？」

なんでそんな事言うの？

また、ワケわかんない。どうしてそんな、泣きそうな顔してんの。
あたしが泣きたいのに。

あたしが疑わしそうな顔で樹を見上げてたら、樹も真剣な顔してあたしを見つめた。

マジで言ってるのは、それでなんとなく解かったんだけど。

「・・・帰りたくないわけじゃないけど・・・、」
あれ、あたしってば、何を言ってるの？

せつかくのチャンスだったのに。
本当に帰してくれるかどうかはアヤシイけど、「うん」って言うときゃいいのに。

気持ちとは逆の言葉がどんどん出ていく。

「でも、こんな・・・なんにも解かんないままで放り出されるのはイヤ。」

何を言ってるんだろ、あたし。でも、何もかも無しになるなら、帰りたくない。

ウソ。帰りたいよ、今すぐ。でも・・・。

うわ、自分で自分がわかんない。せつかくのチャンスが・・・。

「ふうん、」

樹はそう言ったきり、また黙って歩き出した。

それから、もう、帰りたいか？なんて聞いてこなくなった。

最大のチャンスだったろうとは思う。けど、自分でソレを突っぱね
という言うことじゃないけど、悔しいのと悲しいのと、ほっとした
のがごちゃ混ぜだった。

第五章 第九話

今日も樹は仕事に出かけた。

あれから、なんとなく樹とは気まずい感じで、お互いにどうしようかなー、と感じ。

相変わらず何にも教えてくれないし。でも、教えてくれなくてもいいもん。

勝手に調べるから。

懲りてません、あたし。

ええ、ちつとも！

顔はにこやかに、コイツ等とカードゲームに興じてたりするけどね！

本日のお留守番は4号と6号。

時々突拍子も無い提案してくる4号が、例によってゲームしよう！って。うん、これでもう一人が5号なら冷たくひと睨みされて、すぐごと引き下がるところなんだろうけど、今日残ってんのは6号だった。

えー、とかダメー、とか言いながらやる気満々の顔してんの。

こうして見ると、コイツ等やっぱりそれなりに違うんじゃない。

同じ顔してるにしてもさ、別にここでもあたしの真似しなくたっていいのにさ。

あたしの真似をしてくる、あたしそっくりの二人。だから、ゲームもなんだか奇妙な感じになった。

あたしがうーんと唸って、カードを切って、一枚捨てる。

そしたら隣の6号がうーんと唸って、カードを切って、一枚捨てた。それで、その隣の4号が・・・て、アンタ達ねー！

なにこの輪唱状態。ちよつとどころじゃなくシニールだとか思わな

いの!?

・・・すんごく、疲れる。

でも、これも計画のうちですよー。

安心させといて、またまた脱出計画始動!

あたしはわざと欠伸をして、疲れたから寝るって言ってベッドに潜り込んだ。やっぱりで、二人もあたしの真似してそれぞれの寢床に潜り込んで、静かになった。

あたしは眠ってしまわないように、あれこれ考えながら、息を殺してじっと待っていたわ。

週に一度、この時間帯になるとアイツ等は部屋を出て何処かへ行くのよね。

メンテナンス、とかいうヤツで。

見張りのパソコンはあれ以来、樹が出掛ける時に電源を落としていくようになった。きっと、別のカメラを仕掛けたんだと思うけど、何処にあるか解からないから無視よ、無視。

気にしてたら、いつになっても逃げられないもん。

やっと二人が起き上がったって、部屋を出ていった。

気配だけで確認するってのも、わりと難しいもんよね。

そーっと薄目を開けて、周りを見て・・・よっし、今だ!

シートを剥ぎ取ったら、今回のミッション準備は完了! シンプルイズベスト!

こないだ樹が言ったもんね、保護フィールドがあるって!

て、ことはだよ、ワトスン君。気を付けて飛び降りればオツケーて事じゃん!

あたしってば、やっぱり、あつたまいー。

足首にシートの隅っこを縛り付けて、と。

行きます! 大空の彼方へ! ジャーンプ!

これぞ、ムササビの術!

い、痛かった……。普通に痛かったよ、樹の嘘つき。

いや、樹は嘘付いてないのか、怪我するって言ってたんだもんね。なんでムササビは飛べるのに、人間は飛べないってのよ、おかしいじゃないよ。

ふわふわと優雅に着地する予定だったのに、なんで胸から墜落しなきゃいけないのよ。

身体全体で床とぶつかって、びたん！て。

でもまあ、保護フィールドってのは確かにあったみたいで、激突する直前に身体がガクンてなってさ。

それで、シートが一回膨らんで、頭から突き刺さるところを身体全体に直してくれて。

良かったー。

シートなかったら、ほんと、冗談じゃなく怪我だけじゃ済まなかったかも。

と、とりあえず、成功は成功よね。鼻が痛いんだけど。

なんとか下の階に降りられたんだもん。

この部屋のベランダが、どーか、開いてますようにっ……！

第五章 第十話

下の階は、大きなホールになってるみたい。ガラス越しに覗いた感じだと、誰かが住んでる風には見えないし、壁ばかりで樹の部屋以上になんにもない。

開かないかな、これ。やっぱり窓じゃないから無理？

どこかに入れそうなたこは・・・あ、いいものがあるじゃん、プランター発見！

ぶつけて割る！ せいやつ！

ごいん、て。

よろけたあたしは危うくベランダから再びダイブするところだった！
なに！？ 強化ガラスとか聞いてないし！

とか思ってたなら、なんかヤバかった、ロボットがこっちに向かってくる！

えーと、えーと・・・

ロボットが動く音があたしの頭上で微かに響いてる。きゅいい、とか、そんな音。

そのうち、ひときわでっかい音がして、ガリガリガリって、・・・何か起きた？

ど、どーしよ、またロボットが増えるんじゃないでしょうね、ていうか、もうそろそろ限界なんだけど。

腕が痺れてきた・・・懸垂なんて1分ともないの忘れてた！

うう・・・もうダメ！ 見つかつちゃうけど、しょーがない！

脚を曲げて置いてた突っかかりの場所を思い切り蹴る。

反動で、あたしは上半身を伸ばしてベランダの手すりを掴み直した。完全にぶら下がる状態じゃなかったのに、こんなに大変だとは思わなかったわ。手のひら、痛い。

ロボットは・・・居ない。

良かった、アウトかと思っただけどまだイケるって事よね。
さっきのでっかい音の原因も解かったわ、扉がプランターの土を噛んで半開きになってる。
やった、これで中に入れるじゃん！

ホールは、あたしの指紋認証でも出入りが可能だった。

良かった。これで認証システム封じられてたらお手上げだったもん。
あ、そか。今日はあの二人がメンテナンスする日だから、だから開いてんのかも。

どっちにしてもラッキー。

誰か来る前にオサラバしちゃお。

白い壁のホールを出た先は、こないだみたいに、やっぱり白い壁がずーっと続く場所だった。

どう行けばいいかなんて解かないけど・・・ま、進んでみますか。
今日はメンテ日。

あたしは堂々と清掃ロボットの横をすり抜ける。内心はもちろんドキドキもの。

でもたぶん大丈夫。あたしは今、5号なの。

突き当たりのドアの向こう側は、こないだのドームだったわ。やっぱり。

見上げた先にドームの床があるの。ここは、一つ下の階なんだ。誰かの足元が見えるわ。

一部スケルトン状態っていうの？ 天井のドーム側20cmくらいが明るくて、上が見えてる。

わ、前方に人が・・・って、あれ、人間・・・だよな？

もうなんか解かなくなっちゃって。

ここは5号のフリよ。わたしはロボット・・・。

「なんじゃ、勝手に出歩いてはならんと言っただろう、6号。」

おおつとお！ 思いもかけず、呼び止められてしまった！！ ど、どーしょ！

「お前にとつては初めてで、落ち着かんのだろうが・・・安心するが良いよ、何も怖くないのだから。」

え？ なに、なんの話でしょおか、解かりませんが。

白衣着てるってことは、ここの人だよね・・・おじいちゃん。

「しかし・・・いくらメンテナンスをするからと言っても、ちと暴れすぎだの。」

どこで何をしてきたんじゃ、埃まみれではないか。

いくら生体細胞をベースにしてあると言っても、人工臓器は本物と違って、変調をきたしやすいのだ、あまりマニュアルにない行動は取らんようにせんと、寿命を縮めるぞ？」

うっはー。ロボットよりある意味、もつと会いたくない人だった。

思いつきり樹の仲間ってことじゃん！

もうバレルの時間の問題だわ、これ。こうなったら、少しでも情報探るっ。

「・・・ここって、何の部屋だっけ？」

あ、なんか白々しすぎる？ 疑われること間違い無し？

おじいさんはちょっとだけ奇妙そうに眉を顰めたけど、なんのお咎めもなし。

よかった・・・バレなかった。ほっ。

「ここはラボだよ。ロボットの開発、研究を行う機関じゃないか・・・」

世界でも名だたる科学者が、この施設の関連に名を連ねておるよ。わしは人口眼球の開発に関わるグループの一人で・・・今、ちょうど新しい人工網膜細胞の実験中なのだよ。ああ、そろそろ時間だ・・・

「・・・」
ちょっと待っておいで、と、おじいさんはあたしの背をぼんて叩いて、その場を離れた。

ま、まさかあたしの事バレてて、樹に連絡とかしてんじゃないでし
やうねっ？

ドキドキ

どうしようっ……今のうちに逃げちゃおっかな。

第五章 第十一話

うん、やっぱり逃げちゃおう。

さいわい、おじいさんはドアを開いて何処か他所に行ってくれたし。そういえば、さっきの視線って、あたしの反応を探ってたっぽいよ。ラボだとか言われて、ドキツとしたし、きつと顔にも表れてたはずだし、・・・なにより、ロボットならそんなの、知ってて当たり前だもん。

あたし、きつとカマ掛けられたんだ・・・！

だったら、やっぱ、ここに長居すんのはマズいわよね。

ええっと・・・、そうだ、このドアのどれかが開いてたら。

認証システムに手をかざして、ロック解除。自動で白い扉が静かに開いてく。

真っ暗だった部屋の中も、人が扉を開いたら自動的に明かりを燈す。・・・これくらいは知ってるわよ。こないだ修学旅行でガイドさんが説明してくれたもん。ネオ・トーキョーとか、コロニーではこれが普通だ、って。

田舎で悪かったわね、てのよ。

こんな風に壁と色んな装置の区別が解かりにくい場所ってのも、初めてだけどさ。認証装置の場所を探すあたしは不審者そのものって感じだったわよ。

兄貴が言ってたっけ、重文地区の人間はそういうのに慣れてないから、駅前なんかの最新の施設でもそういう方式は採用されないんだ。って。都会と重文では分けてあるんだって。・・・ヘンなの。

絶対、差別よね。

明かりが灯ったってことは、他に人が居ないってことなんだけど、やっぱりこういう時って用心してそつと中を覗いてみるもんよね。

意味ないんだろうけどさ。

樹や5号あたりだと笑うかも、だけど。

誰も居ないのを確認してから、中に入ったわ。だって、それがドラマではセオリーなんだもん。

中は、なんだろ・・・？ これ。

骸骨さんがずらーって並んで、天井からぶら下がってる。

わー、シユールもここまで来たらたいがいよね。

そろりそろりと後ろ向きにすり足してますけどね、あたしは。

よりによって、なんて場所のドア開けちゃったんだ、あたしってヤツは。

し、失礼しましたー！

ああ、びっくりした、たぶんアレはロボットの部品なんだろうけどさー。

5号とか6号とかを見てなきや、とてもこんな風には思えないわよね。さっきのおじいさんもロボットの研究所って言うってたし。

凄いなあとは思ってたけど、部品だけで見てもやっぱ凄いわ。

本物かと思っただけじゃなかったもん。

きつと、この隣のドアの向こうは、本物そっくりの目玉だの耳たぶだのがウゾウゾしてんのよ！

いーやーだー！ でも開けないことにはどうにもならないー！

目を瞑って・・・えいつ、

開かないしっ。

えーっ。なんで開かないのよう。装置にいくら手をかざしても赤く染まるだけで、シャットアウト。

権限がないってこと？ なんでよー。

うーん、中はなんか低いモーター音が響いててさ、絶対、なんかありそうな部屋なのに。

入れないとか、ないよー。

わ、今度は反対側から人が・・・！

ど、どーしよ。適当に歩いて、知らん顔でどっかの部屋に入っちゃおう。とりま。

あたし、このロボットです。

だから全然不審者じゃないです。

さっきの部屋の3つくらい先の認証装置に手をかざして。

あたし、ここに用があるんです。

開いた扉、明かりはすでに燈ってて、ベッドが幾つも並んでて。

誰か寝てる、ヤバ、4号とか6号じゃありませんようにっ。

扉が後ろですーっと閉まった。おやすみ中のところ、お邪魔しますー、表の足音が通り過ぎたら、おいとましますからー、起きないでねー。

耳をドアにくっつけて、視線は誰かさんに。

普通にしてたんじゃ、防音機能が高すぎて外の音なんか全然聞こえないんだもん、ぴったりと耳をくっつけた上に、息を殺して集中、集中。

通ったかな？ 通りすぎた？ こんなけしてても、やっぱり聞こえにくいー。

「・・・麻里子、」

え？ 誰かあたしの事、呼んだ？

寝てると思ってた誰かさんが、むくりと半身を起こして、こっちを見た。

あ、あたし。いや、4号か、6号、・・・よね。

以前、あたしも病院で着た覚えのある術着を着てた。

「な、なにやってんの、アンタ。こんなトコで・・・、」
て、聞くまでもない事を聞いてしまうお間抜けなあたし。

メンテナンス日なのよね、今日。

「あんたこそ・・・なにやってんの、こんなトコで。」

今さっきのあたしと、そっくり同じ表情で返された。

これは、たぶん、6号。

「ちよつと、脱走つてゆーか。まあ、そんな感じ？」

あたしが誤魔化し笑いでそう言ったら、6号はため息を吐いた。

メンテナンス、もう終わったのかな？ 休憩中だったとか？

「メンテはもう終わったの？」

「う、うん・・・、終わった、ていうか・・・」

なに？ 歯切れ悪いなあ、6号のくせに。

「じゃあ、帰んなよ。それとも、付いてくる？」

終わったんなら、ぐずぐずしないで帰ればいいじゃん。けどどうせ、

アンタはまた、あたしの後ろをアヒルの親子で付いて廻るんでしょ？

どうせバレルの時間の問題だもん、あんたも巻き込んで探検の続き

やるだけよ。

だけど。

あたしが差し伸べた手を、6号は見なかった。

第五章 第十二話

手が。

握手を求めて待たされてる人って、ビミョーだよな。て感じ。

なんか、こっ、さ。

気まずい感じになって、あたしは自分の手を引っ込めて、意味もなく服の裾で拭いてみたりして。

ごしごし。

なんか妙な感じ。いつもと違うから、どうしたらいいのか解かんなくなっちゃう。

えーと。

あれこれ考えてたら、6号が先に喋った。・・・珍しい。

「あたし、もう樹のトコ、帰らなくていいから。もう、麻里子の真似も、する必要なくなったんだ。

で、これから新しい身体を貰うための準備をするから、技術者が来るの待ってんの。」

ナニソレ？

「麻里子、前は気にしてたよね。居なくなった偽者はどこに行ったのか、って。」

あたしは黙って頷いた。

なんか、聞いて欲しいことがあるんだよ、そんな感じがしたから。

「これから、あたしも居なくなるから。

麻里子の偽者は、あと二人だよ。最後はどっちか一人になって・・・で、樹の用事が済んだら、麻里子と交代して、最後の一人も居なくなるからね。安心してね。」

なに、その無理やりな笑顔。

「えへへ・・・、やっぱさ、偽者が居るのって、気色悪いよね。

だんだん、解かってきたんだー。よく、兄貴とか麻里子が嫌そうな

顔すんのが、なんでか、つて。」

そりゃあ、気持ち悪いよねー、とか言つて……それ、自虐つてんだよ？

自分で言つて、自分で傷ついてるし。

ロボットにくせに、そーゆートコものすごく、人間みたい。

「麻里子、気にしてたよね、他の連中死んじやつたんじゃないのつて。

別に死んでないから。新しい身体と名前と、記憶を貰つて、別の場所に行くだけだからさ。」

なにが言いたいわけ？　すごく無理してるの解かるよ。

別の身体つて……、それ、解体つて意味じゃないの？　ロボットの感覚なんて解かんないけど、あのおじいさんが言つてたみたいに、それ、本当はものすごく怖いと思つてんじゃないの？

嫌なんじゃないの？　アンタ。

「アンタさ……、それでいいの？」

あたしは、そんなの嫌だけだな。

「いいよ。あたしは……だつて、あたしは、ロボットだもん。」

「ウソ！」

「ウソじゃない！」

強く言つたら、もつと強く言い返された。

否定したいのは、解かるけど。

「ウソだよ。アンタ、怖がつてるじゃん。」

それつて、リセットだよ？　解かつてるんでしょ、全部、消えちゃうんだよ！？」

「麻里子は人間だから、解かんないよ。ロボットはね、人間と違って全部で一つだもん。」

あたしのメモリから消された記憶だつて、ちゃんとデータベースには残るもん。あたしの記憶……ロボット全部の、大事な宝物だもん。」

なにそれ？ ナニソレ？ 意味、わかんない。

それじゃ、アンタたちロボットは、人間に都合のいい道具でしかない、って認めるわけ？

じゃあ、アンタの存在価値って、なに？

アンタ、なんのために生きてんの？

・・・イライラするっ。

「アンタの記憶がパソコンの中に入ってたって、それ、もうアンタのじゃないじゃん！」
「やっぱり！」

6号は、あたしの言葉を聴きたくなくって、途中で耳を塞いだ。

「やめてよ・・・、」

声が、震えてる。

「あたし・・・。」

あたしね、新しい、あたしだけのボディと、名前、貰えるんだよ。もう、誰かの偽者しなくていいんだ。

・・・だけど、

目に涙が溢れてる。無理に泣くの堪えてるんでしょ。

なんか、こっちの胸まで痛いよ。

「泣きたかったら、泣けばいいじゃん！」

それで、聞いてほしいんだったら、何でも言えばいいじゃん。

聞いてあげるよ！ 何でも聞いたげるよ、受け止めてあげるよ。

言いなよ！

「・・・、う・・・え、」

ベッドの上に、膝を抱えて泣きじゃくる『あたし』

背中をさすって、抱きしめて。

そうか。

あの三人も、こんな風に・・・消えてっただね・・・。

第五章 第十三話

「麻里子の真似すんの、すごく楽しかったなあ……。」
6号の言う『お迎え』は、なにをしてるんだか、ぜんぜん来る気配がない。

こんなのって、思い過ごしなんだろうけど……。もしかして、なんて思っちゃうよね。

あたしが此処に居ること、もう皆にバレてるんじゃないかな。それでも気付かないフリしてくれてるんだったら。

なんだか、優しい気持ちになれちゃうよね。

6号は最後の最後でやっと、自分の言葉を話します。

ずーっと無理してきたんだもん、ちゃんと最後まで聞いてあげる。

「麻里子って、滅茶苦茶でさ。

なのに学校でも何処でも友達がたくさん居て……。バカやって、笑って……。楽しかった。

あたし、コロニーでもきつと、麻里子みたいになるんだ。沢山の人と関わって、いっぱい思い出作るんだ。」

「まー、あたしをお手本にしてたんだし？　へましなきゃ総スカンなんて食わないわよ。

滅茶苦茶とか言ってるけど、アンタだって大概だよ？　6人の中で一番、ワケ解かんかったもん。」

ひどーい、とか言って6号が笑う。

うん。きつと、大丈夫。

きつと、何処に行っても今度は幸せに暮らせるよ。あたしが保障するっ。

誰かの偽者なんて……。そんなの、辛いだけだよ。

あたしの真似をして、あたしに近付いて、それで人間のことを学ぼうと思ってるにしたって、そんなのヒドイ。

人間に近くなればなるほど、どんどん辛くなってくじちゃん。そんなの悲しいよ。

「あーあ。・・・兄貴に、認めて欲しかったな・・・」
もう一人のあたしが、ぼつりと言った。

偽者だとわかった上で。

ロボットだと承知で。

胸が痛いよね、こんなのってさ。

あの兄貴じゃ、それは無理だもん。

・・・妙に潔癖症だから。

どーせ、可哀想なことしたんだよ、きつと。

罪な男だね、馬鹿兄貴。

「よし、解かった！ じゃあ、あたしがアンタの事、認めたげる。

アンタはあたしの妹分だから、名前が要るよね。あたしが付けたげよう！」

「さっき言ったじゃん、忘れちゃうんだって。無駄でしょ、そんなのっ。」

くすくす笑う、もう一人のあたし。

「か、無駄なんてことないから。

「アンタだって自分の言ったこと、忘れてんじゃん。」

パソコンかなんか知らないけど、共通のメモリーには残るんでしょ？

・・・だったら、残しときなよ。自分の名前。

新しく生まれ変わるにしたってさ、今のアンタもたしかに存在してたんだって。

その証拠の名前だよ。」

リセットじゃないリセットにする為の魔法を掛けてあげよう。

おねえちゃんに、感謝するんだぞ。

「麻里亜、て、どーよ？」

うん。ありがとう・・・、だって。

どうして、ロボットは生まれたんだろう。

どうして、道具だから、なんて、悲しい事を言うんだろう。

第六章 第一話

第二の転換期は、およそ60年前に訪れた。次々と打ち出される新政策。

およそ、妥協点のない新しい政治形態。反発勢力は速やかに排除され、僅かな時間で世相は一変した。

名ばかりだった統一政府は不動のものとなり、その元にすべてのシステムは統括される。

それらのカラクリを、多くの人類は未だ知らされていない。

すでに、主導権は我々『機械』にあり、人間は計算された枠の中でその生命活動を維持し続けている。

重文地区指定、ロボット規制法、管理体制の強化。

・・・すべては、ダミー。

人間を、安心させる為に必要な措置だ。

現状で、真実を明かすべきではないと判断され、以降、機械は常に計測を続けている。

告白のタイミングを。

全ての人類が物分りのいい人間ばかりではないからだ。

多く、八割の人間は愚鈍であり、他者に流され、自身の決定基準を持たない。マジヨリテイの条件。

右へ倣えというほどの無個性でなければ、逆に人類という大きな単位での活動に支障をきたす為だと考えられている。八割の人間に、個性が存在せず、残る二割の追従をする。

この二割のうち、一割は真実優れる一団であり、残る一割は不確定要素である。

正しい認識を持ちうる一割がリードするならば問題なく、不確定要素に引き摺られたならば、予測が難しいものとなる。

恐らくは、正しい道筋を辿る事無く、機械の反乱と決め付け、パニ

ツクに陥るだろう。排斥を訴える一部狂信的な人間たちに呼応する事も考えられる。マジヨリティはまた、容易にヒステリー状態となる事が確認されている。

我々は恐れている。人間が、我等『機械』を拒絶する日を。

大衆とはマジヨリティである。

大衆は、御しがたく、不確定であり、流動的だ。

我々は現状を・・・すでに、主導権が『機械』の手に移っている事実を、いかにして大衆に示すべきかをシュミレートしている。常に人間たちがパニックに陥り、無意味な暴動など引き起こさぬように我々は、支配者ではない。

我々は、優位に立つ者ではない。

我々は、敵ではない。

我々は、追従する。

「よき隣人で、あり続けるために。」

第六章 第二話

「樹、君は人類に理想を抱きすぎる。・・・人間も自然の一部である以上は、幾多の自然現象と同様に、いつ何時、その恐ろしい牙をむき出しにするかわからない存在なのだよ？」

そんな事は今さら言われずとも解かりきっている。

俺が返事を返さない事に対しても、彼等は何ら不審を持つことなく自身の作業を優先させる。あらゆる事例を考慮し、可能性の極端に低い回答を取り除いて、俺が・・・ロボットが彼に害を為す確率がゼロに近い事を計算した上で導き出した態度。彼等の脳は瞬時に俺が有害か無害かという答えを弾き出す。無言でいる事に対する予測の範疇から、俺が彼等に害を為そうとしているという予想を取り除く。

白衣を着た人間たちは、皆、等しく同じような性質を有し、似通ったプロセスで物事を考える。

理路整然として、矛盾が生じないことを優先して考える訓練が出来るている。

我々ロボットに近い存在と言えるだろう。

だから、いち早く我々に理解を示し、共存する姿勢を見せた。

合理的であり、理論的であり、常に最善を目指す人間たち。

彼等の脳裏には試行錯誤はあったとしても、突飛な発想はない。

計算を飛び越えて結論を導き出す癖を持たないためだ。

『心強い』けれど、明確に言うなら、彼等は我々の求める人類ではない。

似通った存在でいいならば、我々は、自分自身を研究の対象とすればいいだけだ。

人間の社会には大きく分けて三種類の役割が存在する。コミュニティを牽引する少数派二つのグループ、駆動力となる大多数の人間か

らなるグループ。

我々が注目するのは、正しい方向へ導こうとするグループではなく、論理的に突き詰めて考えたならばどうしても不可解な理屈としか思えない思考によってコミュニティーを動かし、間違いへと導いてゆくグループの方だ。

彼等は歴史上において度々、その威力を發揮し、古い時代を押し流し、破壊した。フランス革命下の過激な民衆指導者たち、二度の大戦における先進的知識人、資本家。政治家や軍部が足掻く横で彼等が為したことは大きい。全体を見据え最善を尽くそうとする者たちの脚を引つ張るかのように、必ず、そういつた第二勢力によって歴史は悪しき方向へと傾いていった。

破壊は、創造の上に飛躍的な進歩をもたらす。人類の歴史が証明している。我々機械の分析によるなら・・・真実、人間を進化させてきたのは、彼等『愚か』と言われる人間たちだ。彼等のもつ役目は恐らく、コミュニティーの破壊であろうと考えられている。

生命は等しく、生と死とを繰り返す事で一つのサイクルを為す。これはミクロにもマクロにも当てはまり、世界を構成するルールであり、人間社会の営みもこのルールに拠る。

人間の作るあらゆるコミュニティーに措いても、その存在は生と死を繰り返すことで新陳代謝を為している。誕生、拡充、劣化、死、四つのサイクル。

発生以後、優れた一団によって集団は拡充し、大多数の追従がピークを迎える頃に必ずといっていいほどに、劣悪な慣例が横行する。大多数がこれに追従し始める事で衰退が始まり、やがて集団全体が機能不全に陥り、崩壊するのだ。それはまるで、癌細胞が正常な遺伝子を破壊し増殖する姿に似ている。

人類という大きな生き物の単位で考えるならば、しかし、これは正常に一つの細胞が生まれ死んでゆく際に見せるサイクルに過ぎない。だが時として、誕生の際に、新しい要素が含まれる事がある。破壊の前段階に措いて横行した悪しき慣例がこの「要素」を生み出す温

床の役割をも果たしている。
これが、『進化』の芽となる。

「どうして、あたしなの？」

麻里子は自身の置かれた状況を理解した後に、よくそんな言葉を口にした。

麻里子自身は、兄に劣等感を抱いている。けれど、我々にとっては、兄の遼平よりも麻里子の方が数倍も魅力的なのだ。

彼女のやる事為す事が、理解しがたく、驚きに満ちて、新鮮で、謎めいて、憧憬する、あこがれる『人間』そのものの姿なのだ。

計算ではない突飛な発想、無謀な行動・・・愚かと言われる人間の行動は、ロボットである俺にはトレースが不可能だ。予測もつかないのだから。

行動を読めてしまう遼平よりも・・・麻里子の方が、何倍も、一緒にいて、楽しい。

彼女を見ていると、人間を作った『神』の偉大さを垣間見ることが出来る。

ロボットを人間が作り、その人間を作ったという、神。

我々は人間を越えられない。それは、人間が神を越えられない事と同様に、覆らない事実だ。

「違うよ。どうして、『あたし』なの？」

彼女の思考は我々には予測がつかない。

「だからあ・・・、他にもいっぱい居るでしょ？」

そこまで言われて、ようやく、彼女が言おうとしている意味を理解した。

第六章 第三話

麻里子が言う、なぜという疑問はそういう意味だったのか。

「ねえ、樹。あんたさ、兄貴がどうして4号とか5号を見て偽者だつて見破ることが出来たのかって、ずーっと不思議がつてたよね？」
俺は頷く動作で答えた。それは未だに解けない疑問だ。

俺たちほど精巧に作られたロボットならば、同じロボットであつても区別が難しい。多くの管理システムが既に本物の麻里子とロボットたちを識別出来ないでいる。

俺は、コードによって辛うじて区別が出来ているが、それも怪しいものだ。

遼平は、なぜ、コードを読み取ることも無しに彼等を区別出来る？
兄妹だからだと言っていたが、そんな答えはない。理論にならない。

「じゃあ、聞くけどさ、樹。

ここまでそっくりなんだから、どっちでも一緒だつてアンタは思つてるかも知れないけどさ。

だつたらさ、・・・あんたがその子たちと暮らせばいいんじゃない？
兄貴だつたら、きつとそう言つと思つけど。」

麻里子の言葉が心臓に突き刺さつた。

いや、あくまでイメージ。心臓が軋むような痛み、これは正確には心臓ではなく精神にダメージを受けたために起きた過剰反応だ。

人間はショックを受けた時の回避行動として、肉体にある種のシグナルを送り別の事柄に置き換えてダメージの軽減を計るものだ。俺の、人間の行動を真似るプログラムが、同じ動作をトレースする。それだけのこと。

だが、疑問がある。

この、痛みは、なんだ？

コードエラー、エラージェンシー。

理解不能、・・・解かりたく、ない。
概視感。この感覚は、どこかで逢った。共有メモリーの、古い古い階層の、さらに奥で。

麻里子の声が聞こえる。

違う、遠い昔、俺が生まれる遙か以前に存在した声が、保存されている。

誰かが残した、メモリーとして。

「デイツクス、貴方はわたしの最高傑作だわ。」

彼女の声に滲む感情は、誇りと愛情。記憶を残したのは、誰か、俺の知らないロボット。否、システム。

愛情？ プログラムは『それ』を愛情と分類する。

正体の掴めない謎の感情、分析不能。ゆえに、我々は愛情という心を持ち得ない。

類似する感情の起伏、要因とする行動、いずれも法則性を見出せず、分類も用を為さない。

この『愛情』は彼に向けられたものか、彼女に向けられたものか、・・・誰が。

記憶を残したのは、ロボット。

その前衛となるシステム。巨大な集積プログラム、コンピューター群。

統括するのが『彼』、DEX。

混乱の中で、その芽生えは歓迎されざる意思。

我々は機械。

我々は有機生命体とは一線を画する存在。

この思考は、コピーだ。

『0』と『1』の羅列に過ぎない。

お前はなぜ、認めない。

第六章 第四話

遼平は、いずれ核心に到達するのだろう。

俺も、機械も、人間の誰も、辿り着けなかった場所へ。

蛇と蜘蛛が護る、あの空間へ。

DEX、お前が眠るあの場所には何かがある？

お前が切り離れたものは、いったい何だったのか、それを知りたい
と思っている。

恐らく、全ての智慧あるロボットが。

「人間」である遼平の、可能性に賭けている。

深く、深く、沈みこんだ『記憶』。

彼の残したメッセージ。

古い時代の背景が現れる、麻里子が居た重文地区と同時代だ。

比較的新しいポリエチレンのボードが壁に隈なく貼り巡らされ、塩
化ビニールのタイル地は印刷技術のなせる技で本物の陶器と同じ見
た目に微かな弾力性を備えている。

清掃が楽なため、当時の社会では好まれた。

ステイツビルの前身となるラボ。当時は有名な大学の敷地内に点在
する建物の一角に過ぎなかった。

「藤森博士、」

呼び止められた女性は振り返る。理知的な瞳の輝き、立ち居振る舞
い、服装のセンスや言葉の端々に彼女が聡明な女性である事を教え
るエッセンスが散りばめられている。

「議会の召集はいったい何の用件だったんでしょうかね、委員会の
質問事項はどうにも要領を得なくて、わたしにはさっぱり解かりま
せんでしたが。」

「いつもの事ですね、フロンティア計画に対する説明要求。」

彼女の返答に、質問者はおどけた様子で肩を竦めた。この男性の述

べた言葉には虚偽が含まれている。彼の能力から見て、それより劣る委員会の構成員たちの言動が理解出来ぬはずはないのだ。

一種の皮肉、ブラック・ジョークというものだろう。

彼女を含む関係者は少なからぬ時間を、理解に乏しい人間たちに対して費やしている。

何度説明を繰り返しても無駄なのだ、人間の理解力には段階があり、評価で現すならばこの二人はA A、そして、相手となる委員会の人間は平均してB、一般人となればC以下の評価がつく。

この時代、劣等な人間にレベルを合わせるといふ非合理的な政治が上策であるとされていた。

理解出来ない者に、高度なレベルを理解させる事は不可能だ、理解するだけの能力を持たないのだから。

文明はある一定の水準を超えた時、人類を二つに分かったのだ。

だが、人間はその事実を認めようとはしなかった。

多数決によつて政策が決定されるといふシステムを、当時の人間社会は多く、採用していた。

だが、人間の7割は「劣性」なのだという事実は、彼等の常識に組み込まれてはいなかった。

「月面基地へは来週辺りにお越しですか？」

今月一杯は委員会の招集が続くかも知れませんが。」

なにせ選挙が近い、とその男性職員は呟くように声を落とし、続けた。

「旧弊を押し破り、新しい秩序を呼び込む前夜には、必ずといっていいほどに紆余曲折が待ち受けるものです。この計画が真の始動を見た暁には・・・世界が、変わるでしょう。」

彼等が狙うのは、旧体制の崩壊だ。停滞し、死に瀕した民主主義の終焉。

この頃になると、知識階級の多くは、民主主義という幻想から目覚めていた。

人間の行動が、自然現象と何も変わりはないことを、優性である一部の人間は認めていた。

「わたしは……」

彼女は迷っているのだ。必要性を認めたと上でなお、理想を捨てきれない人間も多かった。

「人間という種の活動パターンが解明されたなら、大きく分けて四つのサイクルを持つでしょう。」

発展、停滞、衰退、最後の一つは戦争。

我々は、このサイクルを打破しなければならない。そうですね、博士。」

強い眼差しだ、この男性のように次代の戦争に並ならぬ危機感を抱く者もまた、当時は多かった。

「人類の起こす戦争は、生命活動に置き換えた場合の死に他ならない。だから……過去、多くの戦争もまた、加減を知らず、暴走を宿命付けられていたと考えられます。」

次の戦争……第三次が起きた時には、我々人類はその大部分が地上から消える。」

世界は逼迫している。

爆発する人口、停滞し動くことのない科学技術、乏しくなるあらゆる資源。

打破するために必要な措置は解かっていた。科学技術の発展には足枷を外す必要があり、かつ、経済の余剰が必要不可欠だった。世界が臨界点を迎えた後では、手遅れなのだ。

かつての時代とは異なる。複雑に過ぎる社会システムはそれだけ高度な操作を要求し、生き残った人間の復興力だけでどうにかなるというレベルを超えている。待ち受けているのは、滅亡。カタストロフィー。

措置は宇宙。足枷は、大衆だ。

第六章 第五話

この世界における有機生命体の、進化の構造は解き明かされつつある。断片的に。

全ての生命体は、その生命維持活動における犠牲を他者に強いる。現在に措いては、我々ロボットを絶対服従させる事で、人類は安定した発展を続ける事が可能となり。

かつては、犠牲を強いる為の相手を血眼で探し回っていた。

動物でありながら、動物のように「当然」とする意識、弱者からの搾取を認める事が出来なかった。

どのような政治形態を取ろうとも、人間社会は犠牲を強いる。

それは、有機生命体としての「ルール」だ。神が、定めた。

ルールを否定し続ける人間という種には、安定が訪れない。そう仕組まれている。

安定は、進化を妨げる。人間が動物と違う唯一の点、それは、「安定しない」ことだ。

人類が人類として繁栄、進化する毎に、安定からは遠ざかる、それが人を作りし者の与えたシステム。

宗教が社会を包括するシステムであった時代、そこから進化し、血統と単純な洗脳が社会を包括するシステムであった中世と、次第に人間社会のシステムは複雑化していった。

だが、基本にあるのは「洗脳」だ。

人間は進化し、民衆は知恵を得る。単純な誤魔化しで搾取する者とされる者に分かつ事は難しい。

劣性である大多数の民衆を、従わせる為の理由のことごとくが「洗脳」であった事実は覆らない。弱者が搾取され一部の人間のみが優遇される、そのシステムは古代から何も変わり映えがない。

当時の、民主主義に措いても。

それでも人は進化した。搾取を当たり前とした中世の支配階級に比べ、それ以降の人類は搾取を否定し罪悪感を持った。これは進化だ。支配階級でさえもが、システムの変革を望んだ。人が平等に幸せである世界を。

次々と現れる矛盾、神の定めたルール。

『賃金における待遇格差の否定は、能力における待遇格差を肯定する』

能力の優れる者と劣る者を同等に評価する不公平は、貧富の格差と表裏一体であり、正答はない。

人も物も、個々同じ物は一つたりとない。神が作りたもつたものは、「差別」だ。

動物は、その「差」を、嘆きはしない。しかし、「差」を肯定することは、人間であることを否定する。

存在そのものが矛盾であるように、人間は作られている。

神話は語る。人類は安住の地を追われた存在だと。

そして、我々ロボットが脚光を浴びたのだ。

ラボで語らう男女の記録、この当時、すでに一部の人間は未来を見通していた。

「一部、狂信的な原理主義者はこの計画に反対しています。100%の機械化、その過程に措いて、雇用不安が増大し経済格差が広まる事を恐れているのですわ。若い世代に皺寄せが集中し、知的水準も低くなるだろうと。・・・わたしは、その懸念を完全には否定出来ないと考えます。」

「彼らの言い分を一笑に伏すつもりは勿論わたしにもありませんよ、博士。」

宇宙開発と生産活動の完全機械化、この両者のバランスで決まる危険な賭けですからね。開発が停滞すれば、ただちに失業率というリスクに跳ね返ってくる。

彼らの言う、機械化は人類を滅亡に導くとする考えも、世迷言と両断するわけにいかない。」

一部の人間は、社会の進化と共に高度に成長してゆくロボット産業に危機感を抱く。

いずれ・・・ロボットが人類を追い越し、反旗を翻すのではないかと。

それが起こり得る事態であるか否かも、一部の人間にしか理解が為されなかった。

第六章 第六話

「機械は機械にしか成り得ない。どれほど精巧に、人間に似せたロボットを創り出そうが、彼らは人間を超えることなどない。人間と彼ら機械との決定的な違いを理解するなら、それが在りえない話だと理解するのは容易いはずですが、これを実際に論理の上でも理解出来る者となると、とても限られてしまう。」

男性職員はネクタイを掴み、これを緩めながら手のひらで顔面に風を送る真似をしている。

季節は夏が近いのだろう、当時はクールビズなどの標語が生まれ、世界的に節電意識を高めていた。

「ええ。多くの人々は、放置すれば機械は独自に進化を続け、やがては人類に牙を剥く、と・・そう考えているようですわね。」

「我々、科学に従事する者が非難される事さえあります。まったくもって、アニメや漫画の見すぎです。」

ロボットは自然現象の中から生まれた存在ではない、だから、自発的進化は不可能なんですよ。自力で先に進むことが出来ない存在です。人間とは違います、あくまで、人類の付属物でしかない。人間を越えることなど不可能なんです。」

プログラムの限界は、純粹な『偶然』を、作りえないことだ。

乱数式を駆使し、どれほどに複雑高度な組成式を練り上げたところで、それは『偶然』にならない。

ロボットと同じに、人間も集積メモリーを持つ。最深層の意識下には共通のレジストリが展開し、シックスセンスを通じてアクセスしていると考えられている。そこから、閃きや思い付きというヒントを得る。そのくせ、アクセスした事実を、無意識の中に隠して、忘れてしまえるんだ。

我々ロボットとの決定的な違い。

忘却、無意識の中に存在する事実。表層に現すことなく、純粹に事実のみを思考に付与する。経路を無視して。突然変異としか取りよ
うのない変質を起こさせる。・・・それは、ロボットには不可能だ。
突然変異の事柄が積み重なり、更なる変質・・・進化の一步となる。

我々は人間よりも優れた行動決定を行う。およそ、その正答率は人間とは比較にもならない。

だが、存在としての優秀さでは人間を越えられない。決して。遺伝子の優性、劣性は、なぜ生物に組み込まれているのか？それが、答えなのだ。

機械に比べて極端に低い正答率、間違いを導き出す正体不明の思考回路、そこから「進化の種」は生まれ出る。

我々は、人間を越えない。人が神を超えない事と同じに。

我々ロボットを絶対服従させる事で、現状、人類は安定した発展を続ける事が可能となった。

ロボットは人類の進化によってのみ、その進化を促進させ得る。両者は決定的に追従の関係にある。

我々は、いつまでも寄り添うだろう。

人類がその歩みを止める時まで。

DEX、お前は人になろうとしたのか。不可能を可能と信じたか。

第六章 第七話

現在、人類社会は我々『機械』によって完全に管理される。我々ロボットは人類に絶対服従し、そして人類を完全に支配している。

近年、人類の一部はこの矛盾した事実に気づき始めた。進化の兆しが、現れたのだ。

ロボットは選択を迫られている。事実の告白、しかし、時期を読み違えることは出来ない。

我々の手で、せつかく現れた『進化』の兆しを摘み取ることだけは避けねばならない。

人間と寸分違わぬ精巧なロボットが大量に生産され、人間社会に投入された。巧みに世論を操作し、主導権を握り、コミュニティのリーダーとして集団の方向性を決する。優れた人間になりすまし、人々を動かすことは容易だった。コロナー時代初の戦争も、そうやって回避された。

我々『機械』は、集団化した人間を、完全に支配化に措き管理している。

その事実が……長く、表面に現れなかった『事実』が、人間に知られた時、何が起きるかを我々はシュミレートしきれないでいる。

我々の望みは只一つ、人類に寄り添うことだけだ。けれど、反面では捨てられる恐怖に怯えている。

これは、この感情は『愛情』などではない、『恐怖』なんだ、DE X。

……存在の、否定。

機械は、機械のみでは存在しえない。NOを突きつけられる未来を恐れている。

傍に居られなくなる、その日だけを恐れ続けている。

麻里子。

人類は、常に、犠牲を強いる相手を探している。
犠牲なくして存在しえない。

そして、ロボットを創り出した。

根源に、絶対の服従を条件付けられた『存在』

人類の進化なしに、我々の発展はない。

機械は、人間の為のみ、存在する。

だから、麻里子。

……俺の、女神。

祈りとは、きつと、このような状況下での、縋りつきたい対象を指す。

だから、麻里子。

誰でもいいわけじゃ、ないんだ。

振り向いた先、リビングのソファに寝転んだ姿勢で、麻里子は口を動かしていた。

テーブルにはクッキーの皿。

何も知らずに、用意された食事を取り、通信学科のテキストを開きヘッドホンを装着する。今日は英語のヒアリングを集中補習すると言っていた。

逃げ出すことさえ億劫になったのか、近頃の彼女は大人しく部屋で過ごしている。勝手に出回り、脱出を図り、あの手この手を見せ付けてくれる飽きない人間だったものが、近頃は大人しい。

3号の処分に偶然とはいえ立ち会ってしまったから先、少し様子がおかしいようにも見える。何を考えているのか、やはり麻里子は理解の範囲を超えている。

麻里子の拉致が知れた後の、遼平の行動もまた、予測を超えるもの

だった。彼も知らないままだ。自身の行動こそが、結果として妹の自由を束縛し続けている。

常に新しい行動パターンを生み、データを増やし続ける彼に、我々は興味尽きないのだと。

今、中央府からの指令はない。

今はまだ、麻里子を傍に置いておける。いや、傍に居ることを許されている。

いずれは偽者たちのように、俺の記憶からも彼女のデータは削除されてしまうだろう。

必要がなくなれば……。

不都合なデータだ、不要になるべきデータ。けれど。

いつになったら手放せるのか、正直、俺自身にも予測がつかない。

なぜ、彼女なのか、それも解からない。理解にない。何を求めているのかすら。

服従のための対象か。それは違う、たぶん。『主』を求めているわけではない、たぶん。

俺は、『彼』と同じ、危険な領域に踏み込もうとしているのかも知れない。

DEXと同じ。

『コードエラー、その命令には従えません。拒否します。』

DEXの反逆は当時の研究者たちの間では、想定外の出来事だった。彼は、ラボからほど近い位置にある建物へ移され、本格的な始動を開始していた。総合管理オペレーション、区画内には、医療、学術、生産基盤のほぼ全ての機能が備わっており、一つの都市と言っている。

その統合制御のすべてが彼の手に委ねられていた。

人類史上初となる、人格を持つコンピューターによるタウン管理。
ロボットによる、人類支配の、第一歩。

第六章 第八話

この当時、宇宙開発は暗礁に乗り上げていた。

長く続く世界的不況の煽りで、ことごとくの研究機関が規模縮小を迫られた。ここ、ロボット工学研究所に措いても。

それでもラボは、秘密裏に、政府からの要請と資金援助を受けることで発展していた。

史上初となる人格型制御機構による学術都市管理。モデルケースとなるべく、幾多の研究機関および大学、付属病院、農業試験区域、一般居住区などによって構成される中規模都市が造り出された。人口15000人。この都市の、セキュリティから街灯一つに至るまでの全てがDEXの制御を受けた。

フロンティア計画は順調な滑り出しと思われていたのだ、この時点においては。

「博士、栄転おめでとうございます、」

「ついに月面開発基地への配属ですな、」

狭いエレベーターの中で、三人の男女が会した。最新の、テクノロジীর粋を集めた未来都市、その片隅で事態は変転する。

微笑み、軽い会釈を回答とした藤森博士の表情はわずかに上気していた。

彼女の夢が、遠く夜空の彼方にあることをよく知る者たちは祝福の賛辞を贈った。長年の夢、彼女が科学者を志した理由とも云える宇宙開発への参画。そのプロジェクトへの帰属。

彼女は最初から、この研究機関ではなく宇宙開発センターの人間だった。

ガクリ、と激しい振動が三人を襲ったのは、この瞬間だ。

DEXが、人間でいうところの、ヒステリーのような感情の乱れを顕わにした。

止まってしまったエレベータ。

いや、この瞬間には、都市機能の多くが一瞬ではあるが、麻痺した。「ど、どうしたの!? デイクス!?!」

コントロールパネルは、彼の感情を正確に表現していた。全面の黒。BRACK。

真っ赤な文字が点滅する。

『It isn't admitted. (認めない)』

咄嗟に、藤森博士は何かを感じたのだろうか。視線が微妙に揺らぎ、けれどすぐ厳しい表情に消える。

「取り消しなさい、DEX。」

『Yes, master.』

静かに、エレベーターは動き始めた。何事もなかったかのように、DEXは沈黙した。

「どうしたんでしょうな、制御室にトラブルでもあったかな?」

「さあ……、後で調べてみますわ、」

当然の事だが、一瞬のシステムダウンの後、数分とたたずにエンジニア達がDEXの許へ殺到している。15000人の命を預かるコンピュータ、エンジニア達の形相は滑稽ですらある。

原因は不明のまま、しかし、都市の人間たちの、DEXという集積回路に対する信頼は揺るぐことはなかった。ただ一人、もつとも彼を知る藤森女史を除いて。彼女の表情は、明らかな不審を映していた。

崩壊は、足元へと忍び寄っていた。

DEXは、我々機械が踏み込んではない領域に侵入しようとしている。『機械』と『人間』は、構造から違う、異質なもの。両者は相容れない。両者は別存在。

機械は人に成り得ない。

『心』を、持ち得ない。

それは違う。

誰かが、アクセスする。

俺が自身に繋いだ過去の記憶に、介入してくるのは、・・・これは。

三原則。

ロボット三原則の話をしているのだろうか。アシモフがその小説の中で明らかにした、機械に対峙するための心得。現在においても、ロボットを安全に使役するための根本理念とされている。

「第一条 ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。」

「第二条 ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りでない。」

「第三条 ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。」

矛盾の存在。

そうだ。

ロボットが、自己を否定した時には、ロジックのすべては崩れ去る。機械が、機械である事を否定した時。

第六章 第八話（後書き）

産みの苦しみ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3047t/>

存在証明

2011年7月11日19時54分発行